

やまど池

創部60周年 記念号



高三郎山頂にて

めざせ 100周年



OB会会長 22期 黒崎 敏男

今年9月15日開催の総会において会長に就任しました黒崎です。

先輩方から引き継いだバトンを受け取り、微力ですが会のために全力を尽くしますので、これから5年間どうぞよろしくお願いいたします。

表題の言葉は懇親会冒頭の挨拶の中で述べさせて頂いたのですが、自分たちの期は昭和33年(1958年)生まれで、奇しくも金大ワングル部創部の年であったことから、自分自身が100歳を迎える年に当部が100周年を迎えることになり、それを面白おかしく表現させて頂いた次第です。

人生100年時代を踏まえれば、自分が100周年記念総会・懇親会でお祝いの言葉を述べることも決して不可能ではないのではと1人妄想しています。

しかしながら、高齢化と人口減少が急速に進み、価値観も多様化している中で任意団体がそこまで長期に存在できるかは予断を許さぬところでもあります。

先輩方の情熱と伝統の灯を消すことなく次の世代にワングル部及びOB会の活動を引き継いで行くためにはこの段階でいくつかの具体的対応を開始する必要があると感じております。

こうした観点から次の5年間の重点として次の3点を掲げ、自ら率先して実行して行きたいと思えます。

- ① 現役との交流の拡大と支援充実
- ② 若手・中堅OBに対する活動への誘導(特に金沢市周辺の方々)
- ③ 現在実施している活動の今後についての検討

①は事故対応や現役の負担軽減を目的に、今回の総会において提案があり承認を得たところの「現役活動支援寄付金」の積立継続、一般会計からの支援金の確実な実施、さらには懇親会や小屋作業等への参加呼びかけを通じ現役時代からOBと顔なじみになるような取り組みを継続することで対応します。

②は若手・中堅OBに小屋作業等のOB会活動への参加を幅広く周知し、無理のない範囲でOB会活動に加わって頂き、将来の役員候補としてOB会運営に興味を持つ方を1人でも多くするような試みをしたいと思います。

③は実施中の小屋修繕、高三郎登山道整備、さらには会報「やまざと」発行といった継続中の各活動について今後も同様に行えるか、行う場合はどうすれば可能か、見直す場合はどうあることがふさわしいかといった観点で様々な機会に多くの会員の皆様のご意見を伺ってみたいと思えます。

おそらく、在任期間中にすべてに明確な結果を出すことは難しいとは思いますが、少なくとも次期における改革につなげるよう努力します。

顧問あいさつ

顧問 西川 潮

こんにちは。このたびワンゲル部の顧問になりました西川潮と申します。

私自身、学生時代は北海道の大学でワンダーフォーゲル部に在籍し、夏は沢登り、冬は山スキーを楽しみました。気づいたときにはどっぷりとワンゲルの生活に染まっていました。OBになってからも部に入りびたり、高みを目指していた当時の若手OB・現役とともにネパールヒマラヤの6,000m峰2座に全員登頂を果たしました。

思えば、海外登山の計画当初は、全員、アイスクライミングはもとより、本チャン(本番)の岩のぼりの経験ありませんでした。知人から東京の社会人山岳クラブを紹介していただき、春は谷川岳や北岳で本チャンの岩のぼり、冬は八ヶ岳でアイスクライミングを学び、ともに高みを目指して頑張っていた仲間に、学んだ技術を伝達しました。ほぼ0からの出発でしたが、たくさんの方々の温かい支援のおかげで、海外登山の勉強会発足から山岳技術の積みあげまで約1年の準備期間で達成できたことは、自分たちの自信形成につながり、良き思い出になっています。

その後、私はニュージーランドで大学院生活を送ることになりました。ニュージーランドでは、急峻な氷尾根からの20時間を越えるピークアタックや、ヒドゥンクレバスだらけの恐ろしい氷河歩き、遊覧セスナの乗客を見上げる以外は一日誰とも会わない僻地の岩場での本チャン岩のぼりを経験しました。また、アメリカ・ヨセミテではビッグウォール登攀や地上1,000m超えのチロリアンブリッジを経験しました。自分にとっての山は自身と向き合う場だったと考えています。

最近、すっかり山から離れ、かつての山や岩壁での経験を、別世界での体験のように感じています。登山技術は日々進歩していますので、技術面で教えられることは少ないかもしれませんが、現役の皆さんが、安全に配慮しつつも、充実した活動を進めていけるよう支援していきたいと考えています。



主将あいさつ

62期 吉田 優輝

こんにちは。今期1年、伝統ある金沢大学ワンダーフォーゲル部の新部長を務めさせていただくことになりました、2年の吉田優輝と申します。山登りは大学に入ってから始めた若輩者



ですので、部員やOBの方々に苦労をおかけしてしまうかもしれませんが、そういったことが無い様、頑張っていきたいと思っています。

まず、はじめに、今年は甚大な被害を出した台風21号をはじめとする天候不良の影響により、ほとんどの夏合宿のパーティーが山行を断念、切り上げてしまう結果となりました。満足な活動報告ができず、申し訳ありません。

さて、前部長の山本さんは、遭難対応のマニュアル作成等、安全登山の意識改革を行い部内の事故防止に取り組んでおられました。現在のワンダーフォーゲル部は、圧倒的に山岳部出身の者が少なくなっております。そのため、皆で協力し合いつつ、この活動を続けていくことで、更なる安全性の向上を目指します。

また、ワンダーフォーゲル部のウェブページ作成の仕事も兼任することになったので、現在のワンゲルの活動を、OBの方々や未来の部員たちにも楽しんで見てもらえるようなサイトを作っていけるよう、頑張っています。最後までお読みいただき、ありがとうございました。

目 次

			(頁)
OB会 会長挨拶	めざせ100周年	22期 黒崎 敏男	
金沢大学ワンダーフォーゲル部 顧問あいさつ		顧問 西川 潮	
	主将あいさつ	62期 吉田 優輝	
【創立60周年記念行事 OB会総会・懇親会】			
総会の様子・懇親会の模様・懇親会写真集			4
参加者名簿			11
【OB会活動便り】			
第21回 野沢温泉スキー合宿2018		12期 宮島 孝司	12
近畿支部活動報告		11期 加藤 忠好 他	15
東海支部活動報告		17期 渡邊 和文 他	31
【同窓会便り】			
一期一会の会2017 高野山にて		11期 畔山 宏次	33
2018年 いちご会 (11期会) 報告		11期 井上 史三	35
15期会 白山一里野温泉と三方岩岳登山		15期 上馬 康生	37
【現役より 夏合宿報告】 ワンダーフォーゲル部 61～63期			
北海道合宿・飯豊連峰・北アルプス縦走			39
中央アルプスP・南アルプスP			42
【投稿のページ】			
敬老の登山		6期 合津 尚	44
仏教伝来の道を旅する		8期 篠島 益夫	46
金沢あるある		9期 山中 重夫	52
『一本足らない男』の物語		9期 鍋島 武	53
ベネチアの迷路		10期 吉野 和彦	54
3期の登内(とのうち)郁夫を偲んで		11期 長岡 正利	56
ネパールと元留学生のソバナさん		15期 舟田 節子	57
遠山郷・下栗 再訪		17期 小島 敬	61
2018年 小屋作業に参加して～甦った新道～		20期 松下 和隆	65
近年の、外国での記憶から・・・		11期 長岡 正利	69
KUWVOB会 会計報告		22期 黒崎 敏男	72
OB会 会費及び寄付金の納入についてのお願い		23期 小久保 光将	73

表紙の言葉 <高三郎山頂にて> (上馬 康生/15期)

OBと現役が力を合わせて蘇った道が、往時のように広く一般にも使われる高三郎山登山道となることを願う。

金沢大学ワンダーフォーゲル部
創立 60 周年記念行事 OB会総会・懇親会

於：KKRホテル金沢

2018年9月15日(土)に多くのOBが全国から集まり開催されました。



60周年記念行事受付の様子

総会報告

(司会：22期 小林 正人)

会長の挨拶 (20期 久富 象二)

116名を超えるOBの皆さん、前田達男元顧問並びに前顧問の竹内先生から引き継がれた新顧問の西川潮先生にもご参加頂き、開催できたことの御礼があった。

また、現役とOBが連携を深めながら交流をしていくことがOB会を存続していくことに繋がっていくので、しっかりとネットワークを作っていくことを望む旨の挨拶があった。

活動・会計報告 (22期 黒崎 敏男)

これまでの5年間の活動として、

- 1 創立55周年記念総会・懇親会の開催
(平成25年9月於：KKRホテル金沢)
総会・懇親会参加者
OB 82名、現役 29名、来賓 2名 113名
- 2 「やまざと」vol. 28～vol. 32の発行
- 3 小屋作業・小屋酒場 年2回のペースで実施

犀川ダムへの道の途中が通行止めになっている。ダム上流の水位観測所跡地がある付近の道が崩れ先に進みにくい状態である。高三郎登山道を甦らせた。

- ・現役とOB会役員の懇談会 毎年1回実施
 - ・現役活動への支援 毎年1回実施
- また、会計報告があり、承認された。

現役活動支援寄付金の新設について

(20期 久富 会長から)

この60周年記念総会に向けて9期の山中さんから提案を受けており、この総会の場で現役支援のための寄付金の設立を提案したい。

(9期 山中 重夫さんから)

現役のための支援のお金も集めていくことにOBの皆さんのご了解を得たい。5年に1回2000円ほどの寄付をお願いしたい。進んで寄付したい方については設立した口座に振り込むようにするというのを提案したい。

(OB会長からの説明)

現在1年間に2000円、5年間で1万円の会費を戴いている。寄付はあくまでも任意で、使いみち等については役員会におまかせ願いたい。寄付で使うお金については「やまざと」等で随時報告していく予定である。

本提案については満場一致のもと承認された。

新役員の選出 (敬称略)

会長	22期	黒崎 敏男
副会長	22期	奥村 将人
事務局長	24期	仲村 正一
会計	23期	小久保 光将
幹事	22期	小林 正人
幹事	37期	若山 悟
アドバイザー	20期	久富 象二

会長が新役員を代表して全員の紹介をして満場一致の拍手で承認された。

そのあと旧役員の退任の挨拶が行われた。

会長	20期	久富 象二
副会長	16期	北川 隆次
事務局長	22期	森 恵利子
幹事(名簿担当)	23期	名倉 均
アドバイザー	15期	奥名 正啓

懇親会の模様

(司会 : 22 期 森 恵利子)



司会を進める森さん



出演者と森さん

(山本主将 挨拶)

61 期で主将の山本球さんから創立 60 周年を迎えたことへの祝意、自分たちには創立当初のワンゲルがどのようなものであったかは想像もつかず今とは随分違った姿であったのではないかと思うことなどが話された。また、現在ワンゲルには毎年一定数以上の新入部員が続けて入部しており、それぞれに活発に活動して時代にあわせて成長を続けていますのでどうかご安心くださいといった旨があった。



挨拶をする 61 期 山本主将

(OB 会長 挨拶)

黒崎会長から現役の皆さんには是非 60 年に及ぶ OB の方々の熱意・情熱あるいは伝統を感じ取って戴いてこれからの活動に活かしてもらえればと思っている旨、さらに卒業後は OB として現役の活動を支えてもらいたい旨があった。

自分が生まれた年は昭和 33 年で、金大ワンゲル部が創部された年にあたり、深い縁を感じたことも話された。



挨拶をする黒崎 OB 会長

(西川 潮 新顧問挨拶・乾杯ご発声)

新顧問から自身も大学時代は北海道大学ワンダーフォーゲル部に属し山を楽しんでいたこと、大学院時代のニュージーランドでも登山をしたが、日本と違って一緒に食事を作って食べることがないことに驚いたことなどが話された。

ご挨拶の後に乾杯の発声を頂き、懇親会を開会した。



西川 新顧問の挨拶

乾杯の後、11期の青柳さんから、野沢温泉スキー合宿が開始以降、OBが42名、その家族が17名総勢59名で活動して20年の節目を迎えたこと、記念として冊子を制作したことが報告された。そして5万円をOB会60周年にあたり寄付をしたことも話された。

(現役からの報告)

2018年度の夏合宿5パーティの報告と山本主将から現在の危機管理・安全管理体制が報告された。

(遠征報告 60期 松山 諒佑)

この遠征に参加するにあたりOB会より25万円の支援を戴いたことの御礼、国際的に有名な花谷泰広さんという登山家を中心となって若い人にヒマラヤ遠征の機会を与えようということで今回が3回目となる未踏峰登頂に向けての登山を行った旨が説明された。

概要として4月10日から5月20日の40日間ネパールに滞在し、5月8日、未踏峰パンカールヒマール(6264m)に初登頂を果たしたが、その様子についてスライドを使って説明があった。



ヒマラヤキャンプについて説明する松山さん

この遠征では冒険する楽しさを感じるとともに知らない世界はまだまだあると感じ、その世界へのスタートに立った気持ちを述べられた。

この後OBの方々が近い期ごとにグループに別れ、壇上に上がり当時のエピソードや歌で盛り上がった。

(3~6期)

昭和33年5月24日土曜日午後1時 尾山食堂2階でワンダーフォーゲル部設立総会が開かれ、その発起人は、会津若松市出身の田村昭夫(3期)・鈴木兵一(3期)の2人であった。はじめは10人も集まればよいと考えていたそうだが、実際には47人も集まった。第1回目の山行は6月14日に小立野に集まり医王山に登りその後キャンプをしたとのこと。80歳を超えた田村さんは金沢大学南下軍のハッピーを着て元気な姿で来られていました。



ワンゲル部発起人 田村さん

(7~8期)7期の沢田さんから立食パーティは75歳を過ぎた身にはきついとの言葉のあと、「愛染カツラ」をリクエストされ楽しく合唱が始まった。

(9~11期)ワンゲルに入って教えてもらったという「山の子」が歌われた。

(12~14期)「白山の尾根」を辛い階段や高山植物のきれいな花を眺めながら登ったことを思い浮かべながら歌われた。

(15~16期)まだまだ気持ちは30代とのことで「蒙古彷徨の歌」を合唱。

(17~19期)「北岳の歌」。コンダクターは渡辺さん。日本のワンダーフォーゲルについて書かれた本の中で金沢大学の山小屋であるベルクハイムが東京大学の小屋の後2番目にできた大学の山小屋であることが紹介される。

(20~22期)「ライダーズインザスカイ」を歌う。

(23~24期)「四高寮歌」を歌う。

(25期~)「金沢大学校歌」を歌い盛り上がる。

最後に前田元顧問の閉会の挨拶と「森のうた」を合唱。そして名残惜しい中、60周年記念OB会懇親会も幕を閉じられ、気の合うグループごとにKKRホテルを後に・・・。

懇親会 写真集



9期・11期中心のOBの皆さん



12期～14期中心のOBの皆さん



15期～16期中心のOBの皆さん



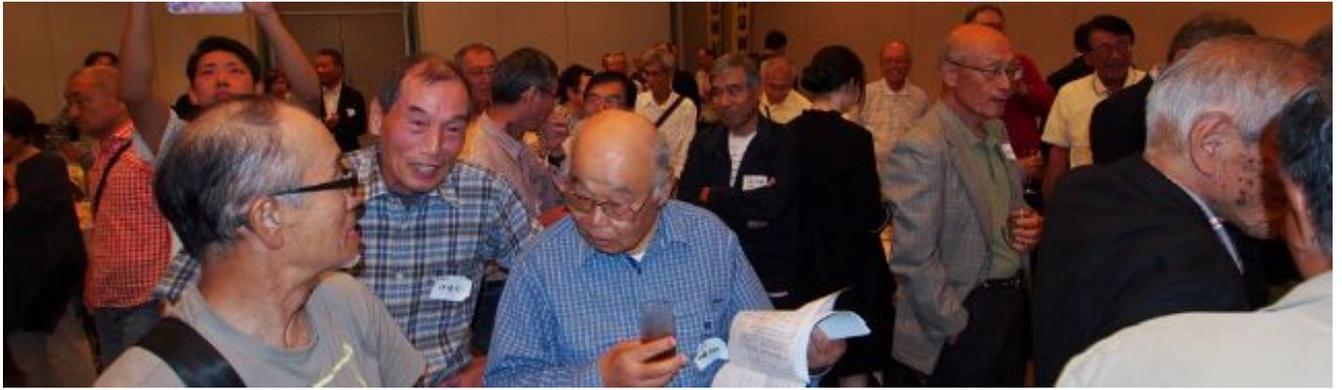
20 期～22 期中心の O B の皆さん



23 期・24 期中心の O B の皆さん



25・28・29・34・37・49 期他の O B の皆さん





60周年記念行事参加者名簿

期	氏名	旧姓
元顧問	前田 達男	
顧問	西川 潮	
03期	北 正昭	
03期	高島 誠	
03期	田村 昭夫	
03期	西尾 皓史	
04期	清水 徹男	
04期	高田 昌嗣	
04期	森島 稔	
04期	佐藤 秀紀	
05期	影近 憲一	
06期	池田 進	
06期	合津 尚	
07期	小野江 佳美	上山
07期	澤田 孝雄	
07期	四十万 利之	
07期	村田 泰恵	木下
08期	穴田 昭一	
08期	伊豫 欣二	
08期	小谷 太平	
08期	篠島 益夫	
08期	中野 謙一	田中
08期	野村 孝弘	
08期	山村 嘉一	
08期	高水間 淑子	石徹白
09期	伊藤 俊成	
09期	清水 一	
09期	白井 勇	
09期	鍋島 武	
09期	長谷川 澄代	今井
09期	平村 耕作	橋
09期	山中 重夫	
11期	青柳 健二	
11期	井上 史三	今村
11期	井上 和子	
11期	片田 寛	
11期	加藤 忠好	
11期	上村 人史	
11期	北川 邦夫	
11期	高田 和守	
11期	矢崎 利哉	
12期	大出 松世	岡本
12期	西田 一秀	
12期	野村 益己	
13期	大島 良治	
13期	柴田 茂樹	
13期	柴田 訓子	高田
13期	辰野 隆義	
13期	吉田 穂積	
13期	神林 博	

期	氏名	旧姓
14期	清家 雅幸	
15期	上馬 康生	
15期	宇野 潔	
15期	奥名 正啓	
15期	金井 澄	
15期	佐野 哲雄	竹内
15期	舟田 節子	西村
15期	増田 富雄	
15期	松縄 宏	
15期	松林 知一	
15期	間所 新一	
16期	井上 敏明	
16期	川端 俊朗	
16期	北川 隆次	
16期	中野 淳一	
17期	小島 敬	
17期	渡辺 和文	
18期	大西 正明	
18期	坂井 尚美	桜井
18期	椿川 利弘	
18期	林 律子	浜
18期	藤森 忠夫	
18期	横井 恒雄	
19期	佐野 吏	
19期	梅 典雅	
19期	早川 大善	
20期	高田 泰夫	
20期	久富 象二	
20期	広瀬 隆	
20期	深田 進	
20期	深田 厚子	和久井
20期	松下 和隆	
21期	加藤 万里子	下沢
21期	滝本 民夫	
21期	田坂 優好	
21期	梅 睦美	瀬戸
22期	奥村 将人	
22期	黒崎 敏男	
22期	小林 正人	
22期	森 恵利子	山崎
22期	安井 聡	
23期	石地 隆司	
23期	小久保 光将	
23期	興井 隆	
23期	戸水 利紀	
23期	鳥越 伸博	
23期	名倉 均	
23期	宮西 康之	

期	氏名	旧姓
24期	麻田 正弘	
24期	黒岩 達夫	
24期	酒井 智治	
24期	仲村 正一	
24期	東 輝明	
25期	高橋 信治	
25期	中村 英治	
26期	畠山 潤	
27期	二木 博子	大川
27期	後藤 孝志	
29期	坂本 行秀	
29期	渋谷 敏行	
29期	高木 美保	
29期	中道 正樹	
34期	伊藤 健一	
34期	奥 民昭	
34期	金田 学	
34期	新保 豪一	
49期	山田 千秋	長谷川

【現役】

期	氏名	旧姓
60期	松山 諒佑	
61期	泉 遼承	
61期	井上 皓介	
61期	内田 大智	
61期	亀谷 英太	
61期	坪内 光太郎	
61期	松島 英志	
61期	山本 球	
62期	伏木 涼太郎	
62期	村井 龍之介	
63期	是松 慧	
63期	楠 大生	
63期	中川 智貴	
63期	幅田 恭矢	
63期	山田 雄介	

（追記）

お知らせします。3期 田村さんから、総会で配布した資料の中に誤りがあった旨連絡ありました。OB会ホームページでよりわかりやすく表示しています。
資料の2枚目
super stringの下に(dark matter) renormalization→
integration (2カ所)
v : frequencyの下に
m : threshld of weight

参加者 14名

- 4期 佐藤
- 8期 野村孝
- 11期 青柳 井上 片田
- 12期 野村益 宮島
- 13期 山西 (二人)
- 15期 上馬
- 20期 松下
- 22期 黒崎
- 26期 畠山 (二人) 日帰り

去年のスキー合宿は20周年記念として盛大に行われ、幹事の青柳さんには立派な記念文集を作って頂きました。今年は節目の一年後に当たり、私は新たな気持ちで臨みました。

ところが予定日の間際になって参加予定者の2名が郷里のスキー場にて転倒してケガをされ参加できないという思いがけないメールが入ってきました。後で聞いたのですが、その内の1人の方はマラソンをされていて運動不足とはいえなるとのこと。その方にとってはあくまでも、不運な事故であったと思われます。

幸先の好くない出だしでしたが、日帰りの2名を含めて14名の参加者があり全員ケガされることなく、無事スキー合宿終了しました。

以後の報告文は、私が行動をしたことを中心に書き記したいと思います。

2月16日(金)

上信越道を北上し、マイカーで豊田インターを出る。高社山を右に見て飯山に入る、積雪の量は例年のごとく曇りの日である。野沢温泉スキー場のある毛無山の稜線、そして、志賀高原辺り山々は良く見える。雪の日の多い北信県境の地としてはかなり好い天気かと思う。

合宿する宿「ふるさと」に10時すこし前に着く。誰もいないフロントの横の従業員室の方に聞くと、井上さんが先程着いてスキー場に出ているとの事。それならばということで、11時頃の予定で着くという大方の参加者を待つことなくゲレンデに向かう。宿の直ぐ上のリフト券売り場にて、3日券を1万円、カードで支払い、上の平下部の初級者コース日影ゲレンデで足慣らしに2,3回滑

りました。地元のシニアスキー教室で滑るようにはいかなく、早々打ち切り、上の平上部のその日の集合場所のレストハウスへゴンドラに乗って向かいました。

そこで食事をとり、井上さん、山西さん夫妻と同席しました。私がぐずって食膳を戻さないでいると、山西さんは甲斐甲斐しくそれを片付けてくださいました。山西さんは控えめで本当に優しい女医さん(せんせい)と私には思えました。

昼すこし過ぎたころ、佐藤さん、野村さん(8期)幹事の青柳さん、私と同期の野村さん、上馬さんが加わり、この日の参加者は一堂に集合しました。

休息とおしゃべりをした後、大方全員で乗り継いで毛無山の頂上に上り、スキーを履いたままそこで記念撮影をしました。

(写真1)



毛無山頂上にて

西には北信五岳が良く見え、東方には苗場山そして、南方には志賀高原の焼額山を見渡すことができました。ここで前日より来場されている山西さんのご主人が一旦富山に帰るとの事で青柳さん、井上さんが途中まで見送ることになり、我々と別れました。残りの佐藤さん、上馬さん、野村さん(12期)と私4人で頂上の東斜面やまびこA(中級コース)を滑りました。野村さんには写真撮影しながら我々と同行して滑って頂きました。

私を除いて他の3人は難なく上手に滑っていましたが、不整地の雪面の苦手な私は様にならない滑りをして他の人に遅れて追いつきませんでした。2,3回リフトに乗ったと思うのですが、膝

が少し痛くなったので無理をせず皆と別れ下山しました。林道を下って宿「ふるさと」の近くの柄沢ゲレンデまでリフトを使って向かったのですが、膝の上部が大変いたみだしました。

第一日目は雪降りでなかったのですが、ほとんどの方が4時ごろ宿にもどってきたようです。同期の野村さんとはブドウ酒を飲みながら山行の話などして夕食を迎えました。

一杯のビール等が添えられ、尽きることなく談笑し、食事の終わる頃は周りの全ての外人客は席を離れていました。

夕食後20畳位ある広間「ゆうぎり」に集まり、脱サラして、金沢にお店を開いた今年初参加の黒崎さんをスタートに自己紹介の形で、各自話をしました。長々と個人的な思い出話をされる方々あるなかで、佐藤さんが部の草創期の話が興味を引きました。自然と関わることをライフワークとした上馬さんは、学生の頃よく部の小屋を利用し、小屋までの、そして高三郎の頂上までの鳥の鳴き声を記録したことを話されました。私には、かつての倉谷の部落、そして、高三郎の山々が目の前に浮かんで来るようでした。



2月17日(土)

朝起きて外を見ると天気予報どおり雪。各自8時過ぎよりゲレンデへと滑りに出て行く。私といえば、やや膝が曲がりにくいので昼ごろまで宿でのんびりすることにしました。雪降りですぐ外湯へ行くのが辛いので宿のご主人にお願いして内湯に入れて貰いました。膝を温めたせいか幾分膝の具合が良くなり、11時過ぎに思い切ってゲレンデに向かう。リフトを乗り継いで日影ゲレンデに着くころ雪降りがひどく、地吹雪のように前が真っ白で進むことが全く困難、必死の思いで近くのレ

ストランに飛び込みました。酷い雪降りですぐ逃げてきた外人でいっぱい。東洋人も相当に多い。

そこで食事をとりゲレンデに出ることは無理と判断してシャトルバスで宿に戻りました。午後、今日参加された片田さんとともにオリンピックの男子フィギュアスケートの模様をテレビで観戦する。羽生選手が金メダル、宇野選手が銀メダルの快挙でした。片田さんはこの雪の中ロングコースのスカイラインコースを滑ってきて、コースから外れてしまったと言っていました。私には、片田さんの若さが羨ましく思われました。

この日は大方3時過ぎ頃まで滑っていたようですが、激しい雪の中、しかも上部の上の平で行動していたと聞きましたが、どのようにしていたのか私には不審に思われました。

夕食前に、山スキーの得意な初参加の上越市在住の畠山(26期)さんが奥さんを連れて顔を出してくださいました。若い畠山さんは今回日帰りということですが、来年以降は合宿を引き継いでくれることを一同皆期待しています。そこで畠山さん夫妻と参加者全員そろって「ゆうぎりの間」にて記念撮影しました。

(写真2)



ゆうぎりの間にて

この日も尽きることなくおしゃべりして夕食をとり、その間に幹事青柳さんよりスキー合宿の記念文集作成の会計報告がありました。本当に青柳さんには言葉に尽くせないほどご面倒をお掛けしています。

夕食後「ゆうぎり」にて例年のごとく発表会がありました。青柳さんがオリンピックでメダル有望の小平奈緒選手の所属する相沢病院の理事長

および各界の名士と同席する写真映像を見ました。次に、青柳さんの同期の井上さんが立山で上級のスキー滑降している勇姿をビデオで鑑賞しました。

今期は外国の遠征記録はなく、田村さんが参加されなかったのが、氏独自の世の提言もありませんでした。やや寂しい感じは免れませんでした。続いて例年山小屋付近の作業に参加されている松下(20期)さんより昨年の報告をして頂きました。文集で報告した通り特殊な刃のついた草刈り機で、笹や小さい木を刈り倒すことが出来るので、道づくりが大いに捗っており、今年は高三郎の頂上まで道が整備されそうとのことです。多くの方にむかしを思い返して登っていただけたならば、苦勞されている関係者も報われるのではないのでしょうか。

2月18日(日)

今日も雪降り、私と松下さんをのぞいて9時頃までには、ほとんどの方がゲレンデに向かって行ったようである。私の膝の状態が幾分良くなったので、雪降りの中でも何とか滑りたくなり、朝から外湯に入り膝を温めました。松下さんに遅れ11時頃、初級コースの日影ゲレンデに向かい数回リフトに乗り小雪の中を滑り降りました。

その日は正午に上の平のレストハウスに集合となっていました。スキーを脱いでゴンドラに乗るのが面倒になり、取りやめて近くのレストランにて食事を取り宿に戻りました。この日皆と一緒に滑ることは出来ませんでした。今日の滑りで膝の悪い私も今回の合宿に十分満足することができました。

金沢方面の3人、上馬さん、野村さん、佐藤さんの乗った帰りの車を見送り、2時過ぎ頃から、私と井上さん、そして青柳さん3人で残り物の菓子等を食べながら宿の玄関の入口の土間の椅子に座って寛ぎました。そして来年もきつと参加しようという気持ちで両名と別れ、私は宿を後にしました。

幹事青柳さんの合宿終了後のメールに「無事終わって心底ホットした」と書かれておりました。今回は特に若くないものの集まりですから、殆どの参加者がそのように思われたのではないのでしょうか。青柳さんは、メールで申し込みの時か

ら気さくに声をかけてくれ、人との繋がりを強く実感させてくれる世話人ようになって居られます。本当に言葉に尽くせないほど幹事青柳さんに感謝しています。

以上、恥を凌いで下手な文章を書いてしまいました。最後に古希を過ぎた私にとって、このように楽しいひと時を与えて下さった参加者皆様本当に感謝したいと思います。そして何時までも金大ワングルOBスキー合宿が引き継がれることを心より希望します。



近畿支部報告

1. 播磨富士稜線 Pw

(報告者 11期 加藤 忠好)

- ・実施日 2017 11/21(火)
- ・コース JR 曾根駅＝鹿島神社～鷹ノ巣山～市境の稜線～涌居山東の展望台～佐土新～JR ひめじ別所駅
- ・参加者 (8名) <§ : 夫婦で参加>
伊豫 § ⑧⑩、藤井⑩、畔山 K⑪、加藤 § ⑪、楠屋⑭、高村⑮
- ・報告

加古川から姫路にかけては低山ながらも岩山が多く、ちょっとしたアルペン気分で歩ける山が連なっている。

雪の降らないこの辺りでは、日陰のない暑い時期よりむしろ晩秋以降が山歩きのシーズンとなる。急峻な形をした岩山であるが、低山だけに見かけほどきつくはない。あまり汗をかかずにアルペンムードに浸れる山域なので、「播磨富士稜線登山」と仰々しい Pw 名を掲げて募集した。

JR 曾根駅から登山口までは歩いて 40 分程度の距離であるが、バスなら遠回りでも 10 分だ。どちらでも選べるように、集合地を登山口となる鹿島神社のチタン製大鳥居にしたのだが、全員がバスの乗客となった。こんな軟弱な集団だから、そろそろ近畿支部シルバーの会を名乗りたいのだが、バリバリ活動してくれる中堅人材が参加してくれないので、今でも OB 会の近畿支部の本隊に居座っている形となっている。



<手をつないだ 8 名と大鳥居>

大鳥居からいきなり岩山の登りだ。岩山だけに視界が効く。南に瀬戸内海が広がり、全山が見渡せる。どこでも休憩地となるのが、シルバー世代には嬉しい。



<どこでも展望地の稜線道>

15 分ほど登って、同じくらい休み休み登っていく。3 ピッチで高御位山の縦走路・鷹ノ巣山の肩に出た。これまでも存分に展望を楽しんで居るのに、ここでも展望を楽しむ。これからは西の縦走路にそびえる播磨富士の異名を持つ桶居山に向かうのだ。富士のような急峻な山容をしているが標高約 250m、こことほぼ同じなのだ。



<スープがうまい：岩場での昼食>

平日、しかも高御位山縦走路を外れると急に登山者が少なくなる。いわば貸切の山となる。少し歩き、岩の展望地で昼食。伊豫さんがいつもながらにスープを作ってくれた。陽射しがあっても、休憩すると寒くなるこの時期は、温かいスープが特にうまい。

この辺りは、低灌木なので視界が効くのに不思議と集落が見えない場所。遠くに六甲山系全山が見えるので、なおさら雄大な場所に居るかのような錯覚を覚えてしまう。錯覚であろうがなかろうが、実に心地良いのは事実である。適宜な岩登りと下りがあり、最後は樹林帯の溝に落ち込む。ここだけが土のような地質、断層による破碎帯なのだろうか。ちょっとじめじめしている。モウセンゴケが赤く紅葉していた。

溝から約 20m も登れば、今度は桶居山方面の岩山に連なる。低木の松がハイマツに見えてくるか

ら不思議だ。このハイマツ地帯でお茶会となった。



〈おいしそうな菓子〉

今日の菓子は、京は亀屋良永の「山づと」と栗の産地「恵那の栗きんとん」がメイン。深山の趣きがありながらも、広場状の稜線から瀬戸内海も望めるという別天地。最高のロケーションだね。女性達がああ菓子この菓子とはしゃいでいる。すっかり少女に戻っているみたいだ。12時から昼食およびお茶会で14時半になってしまった。その間歩いたのは約35分だけだよ。安全が確保されているなら、このような無駄こそが、真に山歩きを楽しくしてくれている。

されど、もう長居は無用と桶居山方へ向かう。小さなコブのアップダウンの道、1ピッチ約40分で東の展望台に着いた。ここが今回の下山の予定地だ。それでも、急峻な山容の桶居山に惹かれ登りたいという男性陣に、まあいいか・・・となった。見る見るうちに男達の姿が小さくなり急な道を登っていくのが見える。結構かかると思っていたのに、約30分で往復してきたのには驚いた。



〈東方からの播磨富士を望む〉

さすがに11月だ。15時を過ぎると急に気温がさがってきた。アルペン登山から、無事16時少し過ぎに下山。解散地であるひめじ別所駅近くの別所食堂で今日の無事帰還を祝った。何をしゃべっていたのか？ JR駅で解散したのは20時少し前だった。

2. 京都・御土居Pw

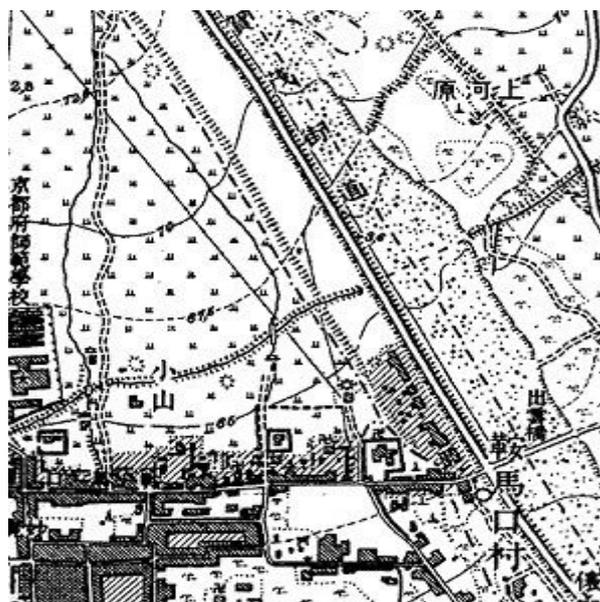
(報告者 11期 加藤 忠好)

- ・実施日 2017 12/15(金)
- ・コース 地下鉄鞍馬口駅～下鴨神社～糺ノ森～加茂川中～交通公園～鷹峯～御土居公園～平野神社＝市五郎明神＝わら天神～(京料理で忘年会)
- ・参加者 (12名) <§:夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫§⑧⑩、高田⑩、畔山K⑪、加藤§⑪、赤地き⑭、楠屋⑭、宇野K⑮、金井⑮、三宅⑮
- ・報告

日本では城壁で囲まれた都市は珍しい。奈良盆地などには環濠集落という小規模なものもあっても、大きな都市というのは皆無に等しい。日本では都市の中に城壁で囲まれた城が普通なのだ。ところが、江戸末期まで京都市街が城壁で囲まれていたというのだから驚きである。洛中という所以である。

NHKブラタモリで、既にご存知の方もおられるでしょうが、実は、土塁を短期間で完成させたのが秀吉、それが御土居だ。

明治以降になって、土塁はほとんど壊されたが、明治期の地形図にでもかなり詳しく記載されている。下図で賀茂川の下を潜って流れているのが琵琶湖疏水である。御土居は疏水と直交するように土手の記号で記されている。またその基部が京都市と鞍馬口村の市村境となっているのが読み取れる。



〈明治期の地形図：鞍馬口附近〉

現在でも昔の状態に近い形で残っているのは京都市北部である。街の中にもその痕跡があちこちに残っている。今回の企画は、その痕跡を繋いで歩こうというものである。



〈平野鳥居前町の御土居〉

私は以前から御土居の存在を知っていたが、実際に目に触れ興味を持ったきっかけがある。歴女を自認する15期金井さんの奥さんの影響である。彼女は京都市内に点在する火葬塚なるものを求めて歩いているというまさに歴女だった。私は聞いたこともない用語だったので聞くと、天皇などの小さな陵墓だとのこと。平安期より以降は土葬でなく火葬にしたので火葬塚というらしい。

へえ、そんなものがあるのかいな・・・程度の意識で、上賀茂神社に向かう京都市バスに乗っていたら、それらしいのが目に入ってきた。急いでバスを降り確かめると、それは火葬塚でなく御土居、つまり秀吉が作らせた城壁の生き残りだったのである。

Pwの集合地を地下鉄鞍馬口駅とした。ここから西へ金閣寺に向かう道のごく金閣寺に近い部分を「金閣寺道」というらしいが、その多くを「鞍馬口道」というのが不思議でたまらなかった。その道も、この御土居を知ってからいっぺんに謎が解けた。御土居によって洛中、洛外が明確になったらしく、洛外に通ずる出入り口のうち鞍馬へ通ずる口を鞍馬口という。鞍馬口道はその洛中の延長部分に当たっていて、その道が、たまたま西に金閣寺に通じていただけのことである。

せっかくの京都なので歴史散歩だ。まず鞍馬口駅から北へ紫明通に出た。水量が乏しかった堀川を運河として使うために、水を補給するために開削されたあの琵琶湖疏水の跡が紫明通だ。京都の道は東西、南北とほぼ正確に付けられているが、水路は等高線に沿うのが常道。紫明通は東西南北外なのだ。紫明通に従って賀茂川の土手に向けゆ

るく登っていく。その土手こそが御土居なのだ。今では賀茂川に沿って家が立ち並ぶが、通常ならば土手の下に家があって良さそうなものである。ここでは御土居が巨大であったために土手の上に家を建てる事ができている。民家の間を御土居の痕跡に沿って鞍馬口まで南下し、西からの鞍馬口道に合流した。

ちょうど鞍馬口に当たる場所に和菓子屋がある。以前、御土居のことを聞いたら「そんなものがあったのですか」という返答。往々にして地元の人というのは昔のことに無頓着なところがあるものだ。

ここに架かる出雲路橋を渡ると下鴨神社である。出雲路の「路」は「地」と同じで、古代出雲族が住んでいた土地という意味らしい。地名は奥が深い。だからここは出雲路にある鞍馬口なのだ。



〈下鴨名物、みたらし団子〉

素晴らしい景観の出雲路橋を渡り、迷わず「みたらし茶屋」に立ち寄る。団子に笑みが出る。店は境内でないのが不思議との意見あり。下鴨神社では時間を食わないようにとさっと通過したつもりだったが、それでも糺の森や河合神社で時間を食っていた。

ん～昼食は、鴨川デルタあたりかな？ でも、下見の時にあるものを見たので、対岸まで渡ろうと思っていた。が、「科捜研の女」効果か、希望はデルタで昼食と洒落込むべし！！となった。しかし・・・恐怖が・・・



〈出町橋と比叡山を背景に〉

何ということでしょう。あつという間に食事をさらっていったのです。被害者は金岩・金井の両コンビ。犯人は背後からの鳶。トンビもさすがだ。「金」だけを狙ったと大笑した。鴨川デルタは「鳶に油揚げ」で有名どす、注意しやす！！との看板があったそう。

昼食はさっと切り上げ、バスで北上。賀茂川に沿って北上してきた御土居と鷹峯から東へ延びてきた御土居とがほぼ直角で繋がる場所がここ加茂川中附近だ。道路を挟んで両側に断片が残っている。城壁というと敵を防ぐという目的もあるようだが、荒廃した京都復興を計る上で境界を明確にする目的、また度重なる北部からの洪水を防止するという目的もあったようだ。



〈鷹峯の御土居と外堀〉

加茂川中から鷹峯に向けて歩く。住宅地でも地形的に高みを帯びているのがよくわかる地域だ。御土居がそのまま残っていた交通公園、土塁上の竹林とともに外側の堀までもが現存している玄塚下あたり、寺を抜け、墓を通り、崖をよじ登り御土居にこだわって歩いた。御土居餅で有名な光悦堂で鍵を借り、柵内の史跡・御土居の上に登った。堀からは相当な高さである。土塁上には桜の大木があり、花見の頃にまた来ようと思った。

鷹峰から南へ、御土居の外堀となる紙屋川に沿って現存する御土居残片や痕跡を求めて北野天神まで歩いた。最後に、祟りがあったので破壊を免れたという市五郎明神の御土居にも登った。もう薄暗くなってきたのでなおさら、その恐さが増した気がした。

せっかくだから「京料理」で打ち上げ。もちろん京都通の金井さんの幹事でおしくいただいた。京は奥深い。その奥に入り込んだような一日だった。

3. 河内飯盛山Pw

(報告者 10期 藤井 直樹)

- ・実施日 2018 1/27(土)
- ・コース JR 野崎駅 9時 50分 集合～野崎観(慈眼寺)～飯盛山直登～飯森城跡・楠正行像(小楠公)前で昼食～権現川～権現滝～むろいけ園地～蟹ヶ坂～御机神社～四条畷神社～JR 四条畷駅 17:20 白木屋にて有志打ち上げ
- ・参加者 (13名) <§: 夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫§⑧⑩、藤井⑩、高田⑩、畔山K⑩、加藤§⑪、赤地き⑭、楠屋⑭、宇野§⑮、三宅⑮
- ・報告

~~~~~  
♪ 野崎参りは屋形ぶうねで参ろう ♪  
~~~~~



〈大東市のマンホールは野崎参り〉

新年初Pwの幹事となり、候補地を野崎観音經由河内飯盛山(314m)とした時、この節が頭に浮かんで来た。

昭和10年に東海林太郎がヒットさせ、野崎参りを全国区にしたというこの古歌が、何故、頭の中にあるのか。胎教? 場末の飲み屋?



〈野崎観音にて〉

半世紀近く在関西の身としては迂闊にも野崎参りは千葉県あたりのことと漠然と思い込んでいた

ので、新発見にこれは行かねばと目的地は即決定。

落語の野崎参りにあるように、当時は大阪から屋形船で行く参拝者と土手に行く人達との間で悪口の言い合いをするのが楽しみであったようであり、13名が罵り合いながら道中に行くのもまた一興と。

1月末という寒い時期のPwにつき、帰路バス停で寒風の中を待つという行程は嬉しからず、駅～歩き～駅のコースを捜してみたら、河内飯盛山に当たったという次第。

待ち合わせの野崎駅、JR片町線は放出（ハナテン）なる難読駅があることは知っていたものの、50年間下車したことがない駅がほとんどというのも旅心を誘う。

集合時に皆さんに聞いてみてもこのあたりは白地図と言う人が多く、関西人と言っても阪急人、京阪人、東海道線人と細分されるのが実態のよう。

野崎観音（慈眼寺）： 行基さんが開基したらしく、野崎参りは5月1日から8日の無縁経法要のことで、駅前からの露天とか今でも非常に賑わう由。

お染久松塚、東海林太郎の歌の歌碑、芭蕉さんの句碑（読めず）、本堂軒下に吊るされた数百の張り子の犬（安産祈願）とか盛り沢山であり、荘厳さはないものの、十分来た甲斐はあった。

河内飯盛山： ここは大東市であり、梅田、大阪駅方向とか展望よし。飯森城跡小楠公像前は日差し暖かく、場所を選べば風もなく幸せな昼食。



〈飯盛山の楠木正行像〉

権現川からツララが現れ、道にも少し雪。今回偵察省略の為、そのまま行ってしまおうところであったが、いつもながら加藤さんが予習してくれていて、権現滝なる名スポットに寄ることが出来た。



〈氷柱の下がる権現の滝〉

府民の森・むろいけ園地で休憩。赤地さんが善哉、餅、火器、鍋、13人前を歩荷して来てくれており、思わぬ甘党小宴会に。

毎年1年平均年齢が上がって行く近畿ワングルにあつて、今日の装備を見ても赤地さんの気力・体力は現役下位並みを保っており、有難い限り。敷物に正座して碗を待つ人、餅をつつく人、顔の緩む人達とここもまた幸せな一時。



〈四條畷神社〉

下山して四條畷神社に寄る： 由緒ありげな立派な神社。

四條畷の戦いで高師直に討たれた楠正行公を祭った神社とのことで、境内に「桜井の別れ」の石像などあり、禰宜、巫女さん常駐の格のある神社と知る。

歴史好きなメンバーはしっかり境内を探索。歴史に弱い私も高師直は伊丹で待ち伏せされて討たれており、ちょっとした石碑があるのを自転車で見に行ったりしていたので、なるほどという感じはあった。

四條畷駅にたどり着き、家路を急ぐ人達と分かれ、安酒屋で有志打ち上げ。

今年も13名らくらくとやや健脚向けコースを踏破出来たとの余韻を胸に帰路に就く。

4. 鷲峰山・再々Pw

(報告者 11期 加藤 忠好)

- ・実施日 2018 2/15 (木)
- ・コース JR京田辺駅=宇治田原～立川～信西塚～釈迦岳～鷲峰山頂～金胎寺～原山の茶畑～原山=JR加茂駅
- ・参加者 (13名) <§:夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫§⑧⑩、篠島⑧、藤井⑩、
畔山K⑪、加藤§⑪、森川⑪、赤地け⑫、
宇野§⑮、三宅⑮

・報告

関西に住んでいて良かったと思うのは、歴史に触れる機会が多いことだ。どんな場所でも同じように時間がながれているはずなのに、どこを歩いても歴史を歩いている体感に気づく。これが関西なのだ。



<釈迦岳山頂にある天測点>

南山城の最高峰鷲峰山もそうである。多少我田引水的なところがありそうだが、南の大峰山とともに北の鷲峰山(ジュブザン)は、二大霊峰といわれる修験道の拠点だったという。しかも、白山を開山したという泰澄と所縁が深い(開基)寺というのでぐっと身近に感じてしまう。

昨年もここに登る山行きを企画したのだが、2回ともに悪天のため流れてしまった。それで再々の計画となったのだが、2日前まで怪しげな雲行き、冬だから無理をしないでおこうと思った矢先、前日になって降雨確率が20%以下となった。実施だ!!

集合はJR京田辺駅、駅で10期高田さんからの差し入れをいただいてバスで宇治田原へ。この辺りは完全に山里。本能寺の変で家康が堺から伊勢を経て三河に逃げ帰ったという同じ道を辿って鷲峰山に向かう。

途中、平治の乱で義朝に討たれた信西の塚もある。小さな塚であるが、信西の知行地であったこの土地の人が懇ろに葬ったという塚だ。そう思うと小

ぶりの塚であっても、歴史が身近に感じられる。不思議だ。



<平治の乱で討たれた信西の塚にて>

鷲峰山の門柱で、家康が辿った道と別れ、いよいよ登山だ。登山といってもほぼ稜線に沿ってつけられた林道を歩くことになる。以前は逆コースで歩いたためか、ほぼ軽い足どりでも下れたのに、その記憶よりも急な登りだった。冬なのに汗をかいてしまった。腹も減ったので、大休憩の昼食とした。結局、門柱よりトイレのある観音山休憩舎まで3ピッチ要した。さらに2ピッチで釈迦岳へ。

一等三角点と天測点に会うために、最高峰である鷲峰山を横目にしてここ釈迦岳まできたのだ。残念ながら琵琶湖も山並みも霞んでいた。

戻って山号が鷲峰山の金胎寺(こんたいじ)へ。金剛界・胎藏界の両方を持つスケールの大きな寺名であるらしい。山上にあるためか、今は随分さびれているが、それでも多宝塔、山頂の宝篋印塔は鎌倉時代のもので、ともに重文に指定されている。山頂から泰澄が空鉢を飛ばしたという伝承があり、空鉢(くはち)の峰とも呼ばれている。



<鷲峰山の最高峰・空鉢の峰山頂>

時刻は15時を回っている。日が徐々に長くなってきているといえ下山せねば。ここからは南へ和東・原山の方に下る。杉林を過ぎると驚きの風景、みんなが「おおー」と声を発していた。

突然、眼下に広大な茶畑が目飛び込んできたからである。京都の勝れた景観選定の原山の茶畑

だ。それにしても猛烈な急斜面。以前には登りで汗だくになったから、今回は逆コースにしたくらい急なのだ。

その時に、這いつくばって働く同年ぐらいの女性と1時間以上もしゃべり、以来知り合いになってしまったのがこの場所である。我が夫婦にとつては懐かしい。



〈等高線に沿って刈られた円形茶畑〉

茶畑の景観でも特に有名な円形茶畑を案内したが、写真撮影で無断立ち入る人が多いらしく、立入りご遠慮の看板が見られた。トイレに行きたい人もいたため、二手に分かれ公民館で落ち合うことにしたが、集落も急坂にあるため、やや心配した瞬間もあった。公民館前でコーヒタイム。例によって羊羹の大小に興じたのは言うまでもない。

鷲峰山南側の登山口に建つ門柱には、17時頃に到着した。そこがバス停でもある。バスに20分ほど揺られJR加茂駅には17時40分前に到着。桑名からわざわざ参加してくれた森川さんと別れた。といっても明石とはどちらが遠いのだろう……。



〈原山の茶畑にて〉

登山口として歩いてきた宇治田原町、下山の原山などの和束町、現在、宇治茶の大半は、ここで生産されていると聞く。例の知人と会ってみたいとも思ったが、バス時刻も迫っていたのでパスすることにした。

また、ゆっくりと訪れたい場所である。

5. 竜王山・摂津峡Pw

(報告者 15期 三宅 毅)

- ・実施日 2018 3/31 (土)
- ・コース JR 茨木駅＝忍頂寺バス停～竜王山～清水廃寺～車作～竜仙の滝～萩谷～総合公園～白滝～摂津峡桜広場 (解散)

(歩行距離 15 キロ)

(オプション； 花の里温泉美人の湯祥風苑)

- ・参加者 (14名) <§：夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫§⑧、篠島⑧、藤井⑩、畔山K⑪、加藤§⑪、森川⑪、楠屋⑭、宇野K⑮、上馬⑮、高村⑮、三宅⑮
- ・報告

3月末実施でしたので企画者の地元高槻「摂津峡公園桜広場」を最終地点に設定し、北摂の霊峰竜王山から東海自然歩道を歩く、滝あり溪谷ありのコースを計画しました。



〈竜王山への参道〉

桜の開花状況と天気心配でしたが、全国的に開花が早まり満開の桜と青空一杯の好天に恵まれまさに春うららのPwになりました。

阪急茨木駅発のバス乗車組とJR茨木駅で合流し、忍頂寺バス停に10時45分到着。

「忍頂寺」(現在は寿命院と称せられる高野山真言宗の寺院)には今回はお参りせず本Pwの最高地点「竜王山」に向けて11時出発。東海自然歩道を蛙岩(どの岩かはっきりわからない)岩刀山(いわたちやま)など見ながら30分程歩くと八大龍王大権現に到着。岩刀山は薬師岩とも呼ばれ、大きく割れた巨岩の割目から薬師如来が出現したと言われているらしい。龍王は池の中に住む雨の神と考えられており八大龍王を祀った祠がある。5分程登ると竜王山頂上(509m)に到着。

山頂広場には立派な展望台があり、京都宇治方

面から生駒山、金剛山、葛城山、大阪平野、神戸、六甲山まで一望出来た。

竜王山頂から急な階段を下り 30 分で昼食場所の「清水廃寺・経塚」に到着。

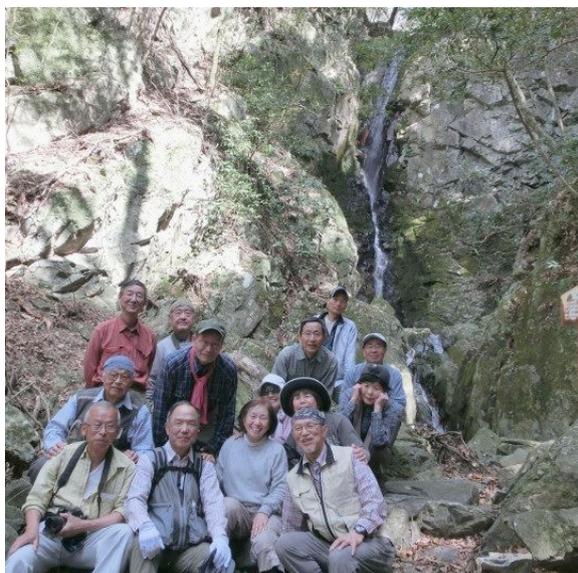


〈高山右近が廃寺とした清水寺跡にて〉

眼下には車作（くるまつくり）集落が広がり眺望も良い。満開の桜をめめながら昼食。暖かい日差しが気持ち良い。「清水寺」は鎌倉時代から室町時代に栄えたが、高山右近（キリシタン大名で有名）により焼かれた。その時僧徒が逃れて経文を埋めたという経塚碑が立っている。「高山右近も酷い事をしたもんだな」と誰かが言ってみんな同意。

13 時 30 分清水廃寺出発。満開の桜や大木のハクモクレン、レンギョウなどを見ながら茨木市「車作集落」を抜け竜仙峡へ向かう。

「車作」という地名は白鳳時代天智天皇の頃この村で産出する良質のケヤキを使って御所車を作り献上したのが由来らしい。広い斜面に階段状に多くの家が建っている風景は絵にしたいくなる風景だ。



〈細いが美しい竜仙の滝〉

14 時 30 分「竜仙の滝」到着。

高さは 13m だが水量もそこそこあって岩肌を縫って流れ落ちる滝は樹木と苔むした岩に囲まれなかなか神秘的だ。

滝壺からはジグザグの急登 10 分。みなさん足取り軽やかに？登りました。ここから高槻市「萩谷集落」まではほぼ下りなのですが、途中竹藪の中少々の登りがあり皆さん意外にしんどかったかもしれません。

15 時 45 分萩谷集落到着。淀川の支流の上流沿いにある小さな集落である。桜咲く集落の中を抜けさらに東海自然歩道を高槻撰津峡に向かう。途中「萩谷総合公園」で休憩。ここも桜満開。親子連れの人達でにぎわっていた。

16 時萩谷総合公園出発。ここから溪谷に下り 30 分足らずで「白滝」到着。「白滝」は高さ 15m 幅 5 m とあまり大きくはないが周囲の木々にマッチした美しい滝だ。



〈白滝にて〉

滝から少し下ると大きく開けた撰津峡に出て溪谷沿いの歩道を歩く。「撰津峡」は淀川の支流「芥川」の上流に約 4 キロにわたって奇岩、断崖、滝などが続く景勝地で「大阪みどりの百選」などにも指定されている。

17 時本日の Pw 最終地点「撰津峡桜広場」に到着。3000 本のソメイヨシノが満開。ここで缶ビールなど飲みながらのんびり花見の予定だったが、眼下に見える「花の里温泉美人の湯」に早く入ってビールを飲みたい」と言う声が多数上がったので記念撮影の後解散となった。

「花の里温泉美人の湯」は pH 9.1 の重曹泉で、ヌルヌルしたお湯は肌に良さそうな気がする。屋上の広い露天風呂でゆっくり浸り生ビールで乾杯し終了。

温泉の外に出ると夜空に大きな月。ブルームー

ンでした。ブルームーンと満開の桜が同時に見られるのは非常に珍しいそうです。(藤井氏談) ちなみに次のは2020年10月らしいです。貴重な体験をしました。



〈摂津峡桜広場は、まさに桜花爛漫〉

金岩さんによると本日の歩数は3万歩、歩行距離20キロだったそうです。少し多い気もしますが、今回のコースは茨木市のハイキングガイドによれば「健脚コース」です。みなさんまだまだ健脚健在!! 満開の桜や花々、のどかな山里、滝や溪谷など巡り程よい疲れが気持ち良いPwでした。

6. 六甲・岩梯子Pw

(報告者 15期 宇野 潔)

- ・実施日 2018 4/12(木)
- ・コース 阪急芦屋川駅～鷹尾山～(岩梯子)～荒地山(549M)～横池～風吹岩～保久良神社～(桜守公園)～阪急岡本駅
(イタリアンのオプションあり)
- ・参加者 (9名) <§:夫婦で参加>
金岩⑤、加藤§⑪、畔山⑪、赤地け⑫、三宅⑬、高村⑬、宇野§⑮
- ・報告

春たけなわの4月12日。花(桜)はもう遅いかと思われた六甲山でしたが、思わぬ「コバノミツバツツジ」のトンネルに春を満喫したpwとなりました。



〈ツツジの道〉

集合場所は、六甲山頂への一番ポピュラーな「芦屋川駅」(標高32M)です。六甲山系は、最寄駅(JR、阪急、地下鉄等)からそのまま徒歩で登れる(アプローチの短い)都会ではめずらしい山です。

途中までは、ポピュラーな六甲山頂登山ルートの高級住宅街を歩きます。メインルートで、たくさんの登山者が坂道を歩いてゆきます。しかし、我々は途中で、右に折れて城山から鷹尾山への稜線を目指します。ここからは、登山者の数はめっきり少なくなります。

このコースは、六甲山の中でも私が一番好きなコースです。平日は、ほとんど人に会いませんし緩やかな稜線歩きが楽しめます。そして、その後には「岩梯子」もあり、変化が有って面白いルートです。

稜線に出る途中から、コバノミツバツツジの群生が迎えてくれました。素晴らしい!の連続となりました。実は、私は春に来たことが無く、「桜は終わった」と全く花は期待していなかったもので、この群生には思わぬ感激の一言でした。



〈岩梯子上部〉

明るく楽しい稜線歩きが続きます。道に岩が現れ出し、少し急になってくると、本日の目玉の「岩梯子」が突然目の前に現れます。「えー! どうして登るの!」と云いながら、両手両足でほぼ垂直の岩を登ります。ただし、そんなに長く続きません。よほど足が短くなければ何とか登れます。最後は、やっとくぐれる、岩の隙間を通過して、完了となります。

通過したそこには、瀬戸内海までの素晴らしい展望が開けています。ここで、大きな岩の上で、絶景を眺めながらの昼食です。どういう訳か、こ

んなところに猫がやってきて、高村さんになついでいました。

今回の最高峰は、荒地山(549M)ですが、見晴らしは無く楽しくは有りません。

荒地山からは下って、高座の滝からのメインルートに合流します。元気な人は、これから六甲山頂を目指すのですが、われわれは、反対側(下山ルート)の横池(雄池、雌池)から風吹き岩(437M)を目指します。途中、六甲山で唯一飲める(知人ぞ知る)水場にも立ち寄りしました。



〈横池・雌池にて〉

雄池は、山の中なのを忘れるくらい大きなたたずまいで、落ち着いた風景を見せてくれます。大量のオタマジャクシにびっくり!春の息吹を感じました。

風吹き岩はメインルートにあり、多くの登山客が昼食をとるので、イノシシが良く出没するのですが(「イノシシ注意の看板」あり)、今回は我々に恐れをなしたのか?出没しませんでした。

この後は、風吹き岩から金鳥山(313M)をかすめて保久良神社、桜守公園経由でお洒落な阪急岡本駅(34M)まで歩きました。保久良神社は、古代文明「カタカムナ」の遺跡が有名で、梅林と桜の名所ですが、桜はやはりほとんど終わっていました。



〈保久良神社の葉桜〉

しかし、あの水上勉の小説「桜守」のモデルとなった笹部新太郎氏の屋敷跡である「桜守公園」では遅咲きの桜を見ることが出来ました。

阪急芦屋川駅(標高32M)~最高峰荒地山(549M)~阪急岡本駅(34m)と標高差約510mの春の楽しいPwでした。

最後は、「お洒落な街阪急岡本」の「 Pasta&ピッツァ 1580円食べ放題」でしっかり締めました。

7. 六甲・ハンカチノキPw

(報告者 11期 加藤 忠好)

- ・実施日 2018 5/1(水)
- ・コース 神鉄・北鈴蘭台駅=森林植物園~園内散策~東門~布引谷(二十渉)~五本松堰堤~布引雄滝~雌滝~新神戸駅
- ・参加者 (11名) <§:夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫§⑧⑩、藤井⑩、畔山K⑪、加藤T⑪、赤地け⑫、宇野K⑬、鈴木⑬、高村⑬、三宅⑬



〈ひらひらとゆれるハンカチノキの花〉

・報告
木に咲く花の中でも気になる花がある。その一つが「ハンカチノキ」の花である。

もちろん外来種の木であるが、咲いている姿がまるで木からぶら下がったハンカチのようで面白い。遠くから見ると、マタタビの葉に似ているがれっきとした花である。

数年前の春、食いしん坊の4人が奈良・大宇陀の大願寺へ薬草料理を食べに行った。それが偶然に近畿支部でも石川県人だったから笑える。昔はお寺も大変だなあ・・・と思うほどの寺であったが、この薬草料理が評判を呼んだのか随分と立派になっていた。

上品、かつおいしくいただいたのは当然のことであるが、帰り際に植物の標本のようなものが額

に入っていた。住職に聞くと、「これはハンカチの木という非常に珍しい花でそれを押し花にしたもの・・・」とのこと。



〈満開のハンカチノキ：天津の森〉

話を続けるために、その木なら六甲山にあることを聞いたと答えると、「そんなことはありません。とても珍しい木で、そんじょそこらにはないはず。我が寺の庭に植えてありますが。」とちょっと自慢げだった。

家に帰って調べると、やはり六甲の森林植物園にあるということだった。花の時期に見にいくと、この木は大木。しかも花が見事に満艦飾にぶら下がっていた。あの住職に見せてやりたいと思ったほどだ。

5月は季節が良いのに山行きの提案がなかった。なので私が企画することになった。花を見に行くとなると、いつでもよいというものではない。実施日は5月初日とした。

集合は神戸電鉄北鈴蘭台駅。1時間1本のシャトルバスで森林公園へ。GW期間なので混むことを想定し、バス時刻より少し早めを集合時刻とした。昔なら歩いただろうに、バスも無料だから特に誰も否定はしない。



〈シャクナゲはちょうど満開だった〉

下見の時に咲いていた春の花は既に終わっていたが、シャクナゲ・ツツジが満開だった。むしろ

多すぎてウンザリするほどだ。

もちろんお目当てのハンカチノキもちょうど見頃。ヒラヒラと花を揺らせていた。しかし、シャクナゲ園のは大木なので花がよく見えない。よって、花を見るべく天津の森へ歩いた。この木は未だ低木なので花を間近に見ることができた。落ちていた花は押し花とすべく新聞紙に挟んだ。

花を見ているとあっという間に12時近くになっていた。陽射しも強いので、さらにユーカリが一杯あるブリスベーンの森へ。その館で昼飯となった。

森林植物園は、戦前の紀元2600年記念事業としてS15年に神戸市が起工したもので、当時としては森林植物園という着想は非常に珍しいものであった。それは明治時代までは表六甲がはげ山で、そのため度々神戸の街が大水害に見舞われていたことと関係していると思われる。



〈無料のブリスベーンの館で昼食〉

この植物園には、日本各地の木はもちろんのこと、外国の木も植わっている。神戸市の姉妹都市であるシアトル、天津、ブリスベーン、リガについては、その国原産の木を植えて建物を添えた森として楽しめるようになっている。基本的には自然公園なので、ここだけでも十分に楽しむことができる場所だ。

それでも山行きとしては、やや不完全燃焼との声もありそうなので、これにトゥエンティクロスというバタ臭い名の登山道を神戸市街まで歩くことにした。昔は名の通り20回程度の渡渉があったらしいが、今では飛び石や橋が架けられ靴を濡らさない快適なよく整備された道となっている。

それでも六甲山は神戸市街から眺めると屏風のようにそそり立っている山だから、一旦雨が降ると鉄砲水となる。そのため堰堤も多く流路が変わることもたびたびである。

下見の時も、従来の飛び石が隠れるほどの水があり、迂回路がつけられていた。



〈靴を濡らさずに渡れる飛び石〉

森林植物園から谷へ抜ける山道がいわゆる徳川道。大名行列と居留地の外人が出くわさないようにと幕末に突貫工事で作られたいわば国道である。そのようなことを思い浮かべて歩く。また神戸ウォータの水源の谷筋だから、見た目には水はきれいである。

小橋や飛び石で布引の谷を左に右に遊んだ。途中、堰堤の堆砂でできたプチ上高地の雰囲気のある河原もある。誰もがそう思うのか、ここに架かっている怪しげな木橋には河童橋の看板がかかっている。笑ってしまう。谷沿いの歩きは変化があって本当に楽しい。

布引雌滝を過ぎればすぐに新神戸駅だ。一応解散としたが、近くにあった神戸らしい洒落た喫茶店に入り、ビールで打ち上げ。この店のビールを全部飲み干したが、それでもコーヒを飲んだ人よりか安かった。それほど量の量しか置いてなかったからだ。最後の最後まで笑える山行きだったけど、初参加の15期鈴木さんは楽しめたかな。



〈布引・雌滝にて〉

8. 生駒の瀑布と紫陽花を愛でるPw

(報告者 12期 赤地 賢一)

- ・実施日 2018 6/11 (月)
- ・コース 近鉄額田駅～長尾の滝～撰河原道～ぬかた園地・あじさい園～興法寺～辻子谷～近鉄石切駅～石切神社～新石切駅
- ・参加者 (8名) 〈§:夫婦で参加〉
金岩⑤、伊豫K⑧、藤井⑩、加藤§⑪、赤地§⑫⑬、三宅⑮
- ・報告

題名の生駒の瀑布とは近鉄額田駅からほぼワンピッチで着く。古刹・天龍院境内にある滝で、雄滝と雌滝併せて生駒山系随一の滝と称されている「長尾の滝」です。



〈長尾の滝にて〉

紫陽花は生駒山中腹の斜面に1500mに渡るつづら折りの遊歩道の両脇に30数品種、約2万5千株が色とりどりに、しっとりと咲き競っている関西でも屈指の「額田紫陽花園」です。

今回は奈良県側に行かず大阪側の辻子谷(ずしだに)を下り、近鉄石切駅の前にあるレストランで打ち上げをして解散としていましたが、打ち上げの折り、加藤さんが「石切神社」に行きたいと言うので「石切さん」を参拝して新石切駅で解散となりました。

それでは例によって、参加した皆さんからのメールを紹介してPw報告とさせていただきます。

〈加藤⑪〉:お世話になりました。ありがとうございました。楽しい一日でした。それにしても、なんということだったのでしょ。2つの前線に挟まれ、しかも南から台風が煽られていたというのに、ほとんど雨に会わなかったという不思議。まさに三宅効果の素晴らしさでしょうか～?。久しぶりにワングルの仲間と会い楽しいひとときが過

ごせました。確かに沿道のあふれんばかりの紫陽花は見事でした。生駒の西側の急峻な階段道、水車、朝鮮寺はまさに東大阪を感じました。自分の能力の限界を存じている加藤夫婦は、奈良から入り、生駒山頂の一等三角点を撫でてから参加して良かったです。実は、みなさんが到着する前に、売店が開店前なのに、頼み込んでアジサイ園名物のアイスクリームをチャッカリと食べてたのです。》



〈ぬかだ園地・あじさい園〉

《金岩⑤：先日の生駒・長尾滝～額田園地～興法寺～石切神社ハイキングでは天気予報を見事に読み切っていただき、お陰様で予定コースを完歩して終わることが出来ました。生駒山系も回を重ねるに従って、益々奥の深い山系であることを認識するようになってきました。アジサイも意外に多くの種類が迎えてくれていて、結構楽しむことができましたね。下見、当日の案内、具沢山の味噌汁他とK-K赤地さんには本当にお世話になりました。雨雲進路を適宜操作して頂いた(?) 晴男Mさんもお疲れになったことでしょうね。帰途の電車を降りたら本降りの雨、Mさんも息切れになったのでしょね。本当にお疲れさまでした。》



〈おやつタイム：大中小に興じる〉

《伊豫⑧：滝、お寺、紫陽花。なによりも、楽しく仲間と語らいながら歩けることに感謝感謝です。2週間ぶりに担いたら、たいした重さでもないのに、今朝少し肩がはっています。最後に、美味しい石切餃子まで。雨を覚悟していたのですが、三宅さんの法力?で遠く淡路島、明石海峡まで望める天気。ありがとうございました。》

《藤井⑩：昨日は、ほんとにいい流れでしたね。台風もくるとなれば、これはもう無理だと思っていたところが、行動中はほぼ傘もささずすみましてし、打ち上げのあの店も抜群でした。梅田で三宅さんと別れて伊丹に着いたら本降り。おかげで靴の泥もきれになりました。生駒の道中で智美さんが三宅さんの1m内を同行しようと言っていたのがよく理解出来ました。紫陽花ロードを鶯、相思鳥の囀りを聴きながらのんびり歩けたのも出て来た甲斐がありました。》



〈興法寺山門と紅葉〉

《三宅⑬：昨日は楽しい一日ありがとうございました。家に着く頃にはかなりの雨でした。晴れ男のジンクスがかろうじて守られてほっとしています。額田園地のアジサイ満開までもう少しでしたがまだ若々しくて却って綺麗でしたね(笑)。レストランの石切餃子もお好み焼きも美味しかったです。関西には何処にも良い店がありますね。赤地さん夫妻には細かな準備をしていただきありがとうございました。》

《再度、加藤⑪》生駒の西側は、断層によって作られた急崖。軟弱な加藤夫婦は、生駒ケーブルに乗って山上から下る。赤地夫妻を筆頭に頑強な方々は、額田駅のから沢沿いにぬかだ園地の紫陽花園に向かいました。園地では、早目に咲く紫陽花がわんさかとありました。その上に、ヤマボウシがあちこちに咲いていました。帰りは別の急崖

の谷道をくだり、一旦近鉄石切駅に出て、喫茶店で反省会。さらに複合扇状地の坂を下り石切神社まで歩きました。雨も覚悟の予報でしたが、幸いほぼ傘不要の天気。途中で日差しが射すときもあったくらいです。久しぶりにみなさんと会って興奮したのか、家内と夜遅くまでしゃべりました。夫婦二人で参加したので、お互い重くなったふくらはぎのリンパマッサージをしました。朝起きてもさほど足は重くありません。赤地夫妻には、下見・準備などお世話になりました。都合の良い?ときに聞こえない振りをする夫、それを許さない妻。その掛け合いが漫才を見るようで、それもまた楽しめました。伊豫さんにはたっぷりの白湯を持ってきていただき、水分補給に助かりました。我が夫婦の白湯は全く使われなかったのが、重量トレーニングに役立ちました。といっても500g程度ですが。思わず行けた石切神社、あんなに低地にあるとは思わなかったですね。あの高地の駅、途中の門前町、低地の神社の関係がいまだに不思議です。



〈辻子谷の水車〉

・・・ということで梅雨と台風のぎりぎりの合間を縫って「滝と紫陽花を愛でる+石切さん参拝のPW」は無事お開きとなりました。

私・赤地と連れの喜久子は生駒に住みついて、もう26年になります。それで近畿支部のPWのお世話をするときには、どうしても生駒山系になります。今回でかれこれ4,5回は皆さんと一緒しているのではないのでしょうか。奈良の都と浪速を結ぶ生駒山は万葉集にも謡われた歴史を刻んだ山系です。KUWVの皆様が奈良に来て生駒山に登られる際は、私とキッコに案内をお申し付けください。

9. 2018 サンマPinピラデスト今津

(報告者 15 期 間所 新一)

- ・実施日 2018 10/15(月)~16(火)
- ・場 所 ピラデスト今津 (近江今津)
- ・参加者 (16名) <§:夫婦で参加>
金岩⑤、伊豫§⑧⑩、高水間⑧、篠島⑧、畔山K⑩、加藤§⑩、森川⑩、高村⑩、宇野K⑩、金井⑩、三宅⑩、間所§⑩、川端⑩
- ・報告

かれこれ十数年続いている近畿OB会の秋の一大イベントである。一昨年から琵琶湖北西部の標高550mの山頂付近にある家族旅行村ピラデスト今津を会場としている。

昨年は、実施直前にピラデスト今津への道路が台風による土砂崩れで通行不能となり、残念ながら中止となってしまった。そんな経緯もあり、今回は満を持しての開催となった。

10月15日11:30近江今津駅に集合、送迎バスで会場に向かう。買い出し部隊他数名は車で直接会場へ。今回東海支部から16期の川端さんが初参加してくれ、12時頃には参加者16名全員が集合できた。

入村手続き後BBQ会場に移動。幹事三宅さんの挨拶の後、BBQ会場設営、BBQ材料調理、夕食準備の3班に分かれ準備開始。

てきぱきとした働きはさすがワングルOB。BBQは食べることも楽しいが、実はみんなでワイワイやりながらの準備作業も楽しみの一つだ。



〈BBQでの野菜のホイル焼き準備中〉

BBQの主役は、もちろん今年豊漁のサンマ。そして地元滋賀の近江牛。加えて野菜たっぷりのホイル焼き、豚汁、コシヒカリ新米の五目おにぎりなど。冷えたビールに加えて差し入れの日本酒、

焼酎、ワイン等が加わり、三つのBBQ炉で楽しい声弾んでいた。一方で、食い意地・飲み意地が逸るものの、実際には思ったほど食べられず残念との声も。

4時過ぎ、BBQ終了。この後もBBQ後始末、夕食準備、お茶会準備、映写会準備班に分かれ、てきぱきと作業が進んだ。

その後、長い階段をふうふう言いながら登って尾根の上にあるお風呂へ。完全貸切状態のお風呂ですっきり。

お酒も抜けたところで、夕方6時からロッジに移動して、恒例のお茶会開始。森川さん、高村さんの指導の下、抹茶と差し入れのお菓子でほっこりとしたひと時を過ごした。



〈大茶会 一服どうぞ!〉

夜はまだまだ続く・・・場所を変えて大映写会を開催。前半は、畔山さんが近畿OB会の一年間の活動を約30分のDVDに纏めてくれた大作を皆で鑑賞。各シーンにマッチした素敵な音楽入りだ。一年前の山行でも何とか思い出せる。まだ大丈夫と安堵する。

夜も8時を過ぎ、小腹がすいてきたので、五目おにぎりとお汁の夜食タイムへ。

大映写会後半は、篠島さんが長年取り組んできた黄葉のシルクロード(仏教伝来の道)ツアーの報告、続いて宇野さんにより紅葉真っ盛りの白山登山の報告が行われた。

映写会部屋の隣では、差し入れの高級ワイン、焼酎等で宴会が始まっていた。大いに盛り上がったのだが、残念ながらいつものごとく何を話していたかは記憶にない。

10月16日(2日目)6時頃からぼちぼちと起床。朝方雨が落ちたようだが、徐々に青空が広がり良

い天気になりそうだ。

7時、朝食。昨日から仕込んであるカレーにパン、おにぎり、野菜サラダ、牛乳、ジュース等から各自好きなものを皿に取って、おいしーい!



〈朝食：いただきまーす!〉

今日は、青空の下、山頂の広場でレクリエーションの予定だ。みんなでテキパキと後片付けをした後、ロッジ前で集合。

レクリエーション用のフリスビーを投げ合いながら遊んでいる途中で、金岩さんが切り株に引っかかり芝の斜面を後ろに1回転。みんなびっくりしたが、さすが普段から鍛えている金岩さん、ぴつたりと着地を決めた。

眼下に琵琶湖を望める山頂の広場へ移動。ここには体育館、グランドゴルフ、芝生広場等が揃っていて、遠くには竹生島が浮かんでいる。

いよいよフリスビー世界選手権近畿大会?の開催だ。約5m先の直径1mの輪にフリスビーを通すという一見簡単そうな競技だが、やってみると意外に難しい。



〈フリスビー大会での1投〉

まずは一人3投ずつ投げ、上位8人の決勝進出者を決める。思ったようにいかず、珍プレー続出でみんな大笑い。隣のグランドゴルフのグループもいったい何ごとかこちらを見ていた。



〈琵琶湖を望む山頂広場で〉

トーナメント方式の決勝の結果は、1位金岩さん、2位金井さん、3位川端さん、4位加藤智美さんとなり、高級ワイン、コシヒカリ新米（福井産・近江産）、隠岐の羊羹の景品をゲットし、皆さん笑顔が溢れていた。

楽しい時間があっという間に過ぎる。11時になり、三宅さんの挨拶で解散。送迎バス、自家用車で各自帰宅の途についた。2日間のサンマパーティー、皆様お疲れさまでした。



〈ファミリーコテージに遊ぶ：ビラデスト今津〉

2017 サンマP以降の近畿支部の活動 (すべて実施できました)

実施日	企画名	場所	企画・幹事
2017 11/21 (火)	播磨富士稜線P w	播磨アルプス	11期 加藤
12/15 (金)	京都・御土居P w	京都市中	11期 加藤
2018 1/27 (土)	河内飯盛山P w	生駒山系	10期 藤井
2/15 (木)	鷲峰山再々P w	南山城山系	11期 加藤
3/31 (土)	竜王山・摂津峡P w	北摂津山系	15期 三宅
4/12 (木)	六甲・岩梯子P w	六甲山系	15期 宇野
5/ 1 (水)	六甲・ハンカチノキP w	六甲山系	11期 加藤
6/11 (月)	生駒の瀑布と紫陽花P w	生駒山系	12期 赤地
10/15～16 (月、火)	2018 サンマP in 今津	野坂山地	15期 三宅、間所

東海支部

鎌倉街道 PW

(報告者 17期 渡邊 和文)

時：2018年3月25日(日)

メンバー：L. 渡邊(17)、森島(4)、中野(8)、森川(11)、野村(12)、川端(16)、小島(17)

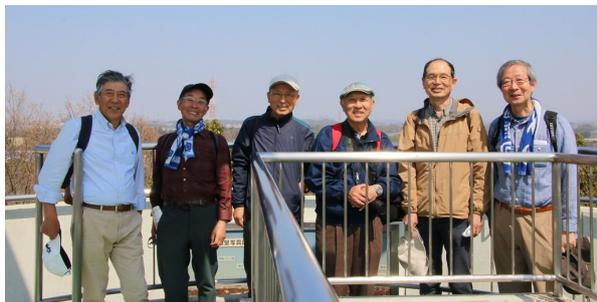
行程：前後駅9：20集合、9：27(名鉄バス)⇒豊明市文化会館9：38⇒鹿嶋社⇒沓掛城址⇒慈光寺→10：50二村山→11：20藤田保健衛生大学病院着(3.5km 1：40の歩行)11：32(名古屋市バス)⇒(地下鉄)徳重駅⇒吹上駅→12：45和食処「和楽」(昼食懇談会)14：20解散。
(オプション)山崎川の桜並木見物。

穏やかに晴れて暖かい日曜日、春の古道を辿り、歴史に触れ、石徹白出身の石徹白さん親子が腕を振るう和食を楽しみました。

京と鎌倉を結ぶ鎌倉街道沿いの鹿嶋社では在原業平の歌碑を見る。

今川義元が桶狭間の戦いの前夜泊まった沓掛城址は桜が見ごろで、堀や土塁がある公園として整備されていました。

街道の古鳴海宿と知立宿の間にある二村山(ふたむらやま)は尾張名所図会にも描かれた眺めの良いところです。今は展望台に上り360度の展望を楽しみます。ただし、春霞で山は見えず残念。源頼朝、北条泰時、藤原俊成、飛鳥井雅経、西行などに詠まれた峠道を下りバス停に向かう。



二村山展望台にて(撮影：森川 功氏)

市バス、地下鉄を乗り継ぎ「和楽」着。旬の筍、土筆や暖かい豆腐などの料理を各自好みの酒で堪能しました。ほろ酔い気分近く山崎川の桜も楽しみました。

伊吹山北尾根 PW

(報告者 17期 小島 敬)

時：2018年5月4日(祝日)

メンバー：参加者14名、車4台

北上組：L小島(17)、野村(12)、川端(16)、吉田(17)、渡邊(17)、竹本夫妻(21)、安井(22)南下組：森島(4)、中野(8)、柴田夫妻(13)、佐野(15)、磯部(佐野氏同僚)

行程：北上組〔笹又道コース〕

名古屋駅集合⇒尾又谷・古屋集落⇒笹又道登山口(さざれ石公園：標高420m)→笹又道→静馬ヶ原(1095m)→御座峰山(1070m)→大禿山(1083m)→国見岳(1126m)→国見峠(840m)⇒「巽かすがモリモリ村リフレッシュ館」

南下組：〔国見峠コース(北上組コースを逆行)〕

伊吹山(1377m)の北に続く県境尾根は、春に人気の縦走コースだ。天気は晴れ。北上組と南下組に分かれ、10時登山開始。5月2日の大雨の影響で、登山道は少し滑りやすく歩きにくかった。ザゼンソウの花は終わっていたが、ヤマシャクヤク、ヒトリシズカなどたくさんの林床の花々に出会えた。御座峰山(1070m)で北上組と南下組が合流、集合写真を撮った。



互いの車のキーを交換し、それぞれ国見峠とさざれ石公園へ向かう。途中雲がかかってきたが雨に降られることなく下山。稜線散歩は楽しめたけど、北上組も南下組も下りでかなり体力を消耗した。久しぶりに登山らしい登山だった。

麓の「巽かすがモリモリ村リフレッシュ館」で薬湯に浸かって山の疲れを癒した。

金華山PW

(報告者 16期 川端 俊朗)

時：2018年6月16日(土)

メンバー：L. 川端(17)、中野(8)、柴田夫妻(13)、
佐野(15)、小島(17)、渡邊(17)、安井
(22)、益川(26)母娘

行程：岐阜公園 10:00 集合→瞑想の小径→金華山
山頂 11:00→東坂コース→妙見峠→達目コース
→ヒメコウホネ自生地 12:00(昼食)→妙見峠 13:10
→唐釜コース→七曲コース→岐阜公園 14:45 解散

梅雨晴の合間を縫って、岐阜城で有名な金華山(329m)へ出かけました。都市の真ん中にありながら広葉樹林が広がり、国有林として保護されているため、自然が豊かな山です。幸いの晴天のもと、岐阜公園に集合、登りは長良川に面した北側の瞑想の小径を歩きます。日差しは強いのですが、登山道はアラカシやツブラジイの樹林におおわれてとても涼しい。しかし、たかだか329mの山とはいえ、全山チャートできていいる山で、頂上に近づくと岩場もあり、展望も開けて、結構な登山気分が味わえます。1時間かけて頂上の岐阜城到着。今日の登りはこれでおしまい。

岐阜城付近は地元の歩こう会や、ロープウェイで登ってきた人たちが溢れています。しばし展望を楽しんだあと、山の東側にある達目(だちぼく)湧水池にむけてゆるゆると下りました。ここにはヒメコウホネの自生地があり、小川の中に数輪、黄色い花を見ることができました。静かな水辺で昼食。



一服した後は南側の山すそを回りこみ、岐阜城の大手道だった七曲道に出て岐阜公園に戻りました。

解散後、有志で岐阜市内のそば屋「更科」で名物のたぬきそばをすすり帰途につきました。

貝月山PW

(報告者 17期 渡邊 和文)

時：2017年11月11日(土)

メンバー：L. 野村(12)、森川(11)、渡邊(17)

行程：大垣駅北アクアウォーク駐車場 9:30 集合⇒旧ふれ
あいの森 10:45→貝月山 12:00→旧ふれあいの
森 13:15

貝月山は岐阜県西部の揖斐川町にある標高1234mの山。最短コースの登山口である旧ふれあいの森のゲートまで車で入る。登山口付近は紅葉の盛り。高度が上がると既に落葉している。頂上には展望台があるが時折時雨の天候で、福井県境の山々は見えない。周辺の山々を地図で確かめる。笹の陰で風を避けて昼食を済ませて往路を引き返す。晩秋の静かな山を楽しんだ。

忘年会

時：2017年12月19日(土)

メンバー：森川(11)、窪田(11)、野村(12)、柴田
夫妻(13)、祖父江(15)、川端(16)、小島
(17)、吉田(17)、渡邊(17)、竹本(21)、
安井(22)

会場：名古屋駅前 はかた屋
もつ鍋を楽しみました。

暑気払い

時：2018年8月26日(日)

メンバー：森島(4)、白井(9)、窪田(11)、野村(12)、神
林(13)、柴田夫妻(13)、川端(16)、吉田
(17)、渡邊(17)、竹本(21)、寺本(27)

会場：名古屋駅前 奥志摩名駅中央店
27期の寺本さんが初参加。



11期 畔山 宏次

はじめに、2017年の11期会は11月13日～の開催のため、前号の「やまざと Vol. 32」に間に合わず、今Vol. 33に掲載となったことをお知らせします。

- ・参加者：井上和子、森川功、畔山宏次・知栄子、加藤忠好・智美、青柳健二、杉森和義・悦子、片田寛、向沖継・幸子、窪田安英、北川邦夫、長岡正利、上村人史 計16名（下線ゲスト）
- ・実施日：2017年11月13日(月)～14日(火)
- ・会場：和歌山県伊都郡高野町高野山

宿坊・西禅院（壇上伽藍ちかく）

およそ1200年前に弘法大師・空海が開いた高野山へは、大阪の難波駅から南海電車とケーブルカーを乗り継いで約2時間で到着する。しかし、台風21号の影響により電車の最奥部が不通となり、途中の橋本駅（和歌山県）からバスでの代行運転となった。そのため1時間近く所要時間が増えて、参加された方々には不便を掛けた。

ここ高野山は標高およそ900mの山上の盆地にあり、真言宗総本山の聖地である壇上伽藍や、弘法大師御廟のある奥之院は下界とは違う空気を感じる不思議な場所である。

11月13日

快晴、紅葉が期待できそうだ。今夜は壇上伽藍の近くの宿坊「西禅院」に予約を入れてある。ここは午後0時以降なら部屋に荷物を置かせてもらえる気楽な所で、1時過ぎに第一陣の8名が集合できた。



むかし、高野山にお参りする人々は参道脇に建てられた町石に彫られた数を頼りに登った。出発地の慈尊院は空海により建造され、この地までし

か入れなかった母親を想い弥勒菩薩を安置し、以来「女人高野」とも呼ばれている。この慈尊院を「百八十町」として標高差750m、距離約21kmを7時間近く登ると「一町」の壇上伽藍の根本大塔に至る。古の人はカウントダウンの数字に励まされ登ったのであろう。我々は車の助けにより45分程度で上がることができる。この大塔を見上げた時の古人の感動の大きさは、きっと我々の感動の比ではないだろう。



空海が真言密教の根本道場のシンボルとして位置づけたことから根本大塔（こんぽんだいとう）と呼ばれ、高野山の象徴でもある。この近くに「三鈷の松」と呼ばれる松がある。松の葉は多くは二葉であるが、この松からは三葉がわずかに落ちている。この三葉を財布に入れておくと幸せになり、お金が貯まるといわれているためか、この松の周りは大勢の人が落葉ひろいを始める。当然のごとく我々も探し、見事に三葉を見つけ財布に入れた方がいた。だが、その後に幸運を得たかは知らない。

秋の高野山は紅葉の名所でもある。例年の見頃は10月下旬から11月初旬と言われている。KUWV近畿支部のサンマパーティー^(*)との日程調整により今回の日取りとなった。紅葉の盛りはやや過ぎたとは言え、壇上伽藍から高野山の入り口の大門（「六町」石）へ散策すると、道の両側に並ぶ寺院の庭先の鮮やかな紅葉や黄色く色づいたイチョウを楽しむことができた。夕日に映える大門の雄大さは、参詣に上がってきた人々を感動させるに十分であろう。この散策の中、妙に空が広いことに気づいた。よく見ると、電柱と電線がない。

(*)2017年のサンマパーティーは前出の台風21号による施設被害のため中止となった。

景色が広く感じられ、気持ちの良いものである。また、カメラマンにとってはありがたいことだ。

宿坊の夕食は精進料理をいただいた。精進料理では野菜を主にして肉や魚を一切使わず、焼き物、揚げ物、酢の物、豆腐類、汁物などが基本で、がんもどき、高野豆腐、胡麻豆腐、野菜の天ぷら、野菜サラダ、白ご飯などがお膳に並ぶ。我々の年齢では腹一杯の量である。また、アルコール飲料もいただけたのは、左党にとってはうれしい限りであった。

壇上伽藍は日没するとライトアップされ、各建物が暗闇に浮き立って見ることができる。防寒具に身を包み近づくと、根本大塔が昼より大きく際立って見えた。中門の仁王様も陰影濃く迫力のある姿であった。

宿坊はお寺の棟続きにあり、内装は新しくされたが落ち着いた書院風であった。その特別和室と8畳和室を4部屋とを予約していた。特別和室は10畳と前室二間の広さがあり、全員が集まるのに十分であった。近況を話し、昔を話し、みかん(紀州産)やお菓子やお酒をいただき、夜の更けるのを忘れるほどであった。

11月14日

朝から雨が止まない。朝の勤行(ごんぎょう)が6時半から始まる。かなり冷え込むので防寒具を羽織って本堂の椅子に座る。目が慣れてくると数多くの釣灯籠が見えはじめ、厳かな雰囲気にも包まれる。やがて、ご住職の読経が本堂内に響き渡り、聞き入るうちに、きょう一日の活力を授かったような気持ちになった。

朝食もちろん精進料理である。読経や説法を聞いた後なのかもしれないが、この料理が格別ありがたいと、おいしく感じられた。皆さんの満足なお顔で集合写真を一枚パチリ。



今日は、車で金沢まで帰る人、大阪で美味しい食を訪ねる人、故郷に立ち寄っていく人、高野山をもっと堪能しようとする人にと別れて行動となった。



雨が降る中、金剛三昧院を訪ねた。しっとりとした落ち着いた風情であった。ここは北条政子が夫の源頼朝の菩提を弔うために建立された。初めは禅定院と呼ばれたが、三代將軍実朝の菩提を弔うときに金剛三昧院と名付けられた。そして、幕府の力で堂塔の増建が進められ、写真後方の多宝塔(国宝)も造営された。

高野山には時の権力者や武将を祀った寺院や墓標や供養塔が数多く見受けられる。熊谷直実と平敦盛、武田信玄と上杉謙信、織田信長と明智光秀、徳川家と豊臣家、と歴史を彩った人達がここに眠る。これらをじっくり観て回るには少なくとも3泊4日の日程が要りそうである。

高野山の食で欠かせないものが胡麻豆腐。白胡麻と葛と水だけで作られている。深山からでる湧水を使い作る高野山の胡麻豆腐は絶品で人気がある。有名店の店内でいただく「ワサビ醤油」や「和三盆糖」の生胡麻豆腐は実に美味しかった。ただし、日持ちがしないので、保冷パックを持っていないと売ってくれないことには注意が必要だ。割高な保冷パックも売ってはいるが。

高野山の探訪組のうち男3人は、南東に約15km離れた立里荒神社(たてりこうじんしゃ)に向かった。ここは空海が高野山に大伽藍を開基するにあたって、繁栄・守護を祈ったといわれる。拝殿の軒に開けられた穴を、真直ぐ突き抜けている杉の大木が印象的であった。

来年2018年はKUWV創部60周年に合わせ北陸支部による一期一会の会となる。それでは、みなさんAuf Wiedersehen!

2018年いちご会（11期会）報告

11期 井上 史三

今年で6回目となった11期のいちご会は北陸支部が担当。例年秋に行っているので創部60周年OB総会に合わせた日程にしました。

実施日 2018年9月14日～15日

<日程>

9月14日（金）

13:00 金沢駅集合→しいのき迎賓館→金沢城公園→県庁19階展望ロビー→千里浜渚ドライブウェイ→和倉温泉「ホテル海望」着17:00

9月15日（土）

9:00 ホテル発→能登島大橋→ツインブリッジのと→のと里山海道→輪島（朝市～キリコ会館～白米（しらよね）千枚田）→曾々木海岸→すず塩田村→（のとスターライン・穴水）→金沢KKR着 16:30

<参加者>

青柳健二 片田 寛 加藤忠好・智美
上村人史 北川邦夫 窪田安英 杉森和義・悦子
高田和守 向 沖継・幸子 井上史三・和子 （14名）

OB総会前日の14日金沢駅に片田氏、高田氏を除く12名があつまり、教養部在学中の大学の面影を求めて一路金沢城公園へ。



金沢城内 9月14日

そこでは菱櫓の入口まで登り、『ワングルの部屋はあそこだった』、また、教養部だけでなく『理学部はあそこ』、『教育学部はこっち』などと濃密だった在学4年間の想い、皆感慨に耽ったのでした。



金沢城内 9月14日

その後玉泉院丸庭園、県庁19階から360°の大展望を堪能し、のと里山海道を走り、千里浜渚ドライブウェイを経て和倉温泉着。そこでは片田氏、高田氏の2名が温泉を満喫して到着の遅れた12名を待ち構えておりました。ホテル海望では、向沖継さん推薦の名物仲居さんのレイ子さんのトーク&歌などで盛り上がりました。



和倉温泉「ホテル海望」 9月14日

15日は輪島の朝市を見て回り、その後キリコ会館では巨大で年代物のキリコの迫力に圧倒されつつ鑑賞しました。



キリコ会館 9月15日

外では、キリコ会館横の埠頭におりしもカムチャッカ帰りのパシフィックビーナスがその優美な姿を見せておりました。(カムチャッカ行では同期の長岡氏が講師として乗船していました。余談ですが・・・)



キリコ会館埠頭 9月15日

白米(しらよね)の千枚田横の「道の駅ポケットパーク千枚田の庄屋の館」にて昼食。海鮮丼、ステーキ丼が美味しかった。



白米千枚田 9月15日

この辺までくると、時間が押してきたので「曾々木海岸」、「すず塩田村」は車中からの見物のみでスルーとなりました。

あとは超特急で金沢 KKR へと向かった次第。

今回は北陸支部が幹事役でしたが、2年前と同様に今回も向沖継ツアーコンダクター(向 幸子さんのご主人)に案内していただき、金沢から和倉へ、そして和倉から能登への旅でした。向沖継様、今回も大変お世話になり有難うございます。

青柳氏は総会でスキー合宿の報告をする予定だったのですが結局総会には間に合わず、なんとか総会後の懇親会での報告となりました。



金沢 KKR 9月15日

懇親会では1年の時リーダーであった雲の上の9期の方々と我々11期の面々で懐かしい「山の子」を唄い、しごかれた?往時を偲びました。

あれから50年も経ったなんて・・・光陰矢の如し。

15 期会 白山一里野温泉と三方岩岳登山

15 期 上馬 康生

恒例の 15 期会は私と松林さんが幹事となり、学生時代から大きく変化した白山麓を見てもらうことや三方岩岳に登り昔の懐かしい山行を振り返ってもらうことなどを目的に、10 月 7～8 日に行いました。参加者と主な日程は下記のとおりで、参加表明後に怪我で入院の松下さんを除き全員の出席でした。

<参加者>宇野 2・奥名・金井・坂尻 2・佐野・鈴木・祖父江・高村・南保・舟田・増田・松縄・松林・間所 2・三宅・上馬 2 (合計 20 名)

<日 程>10/7 13:00 小松駅東口集合→吉野工芸の里(御仏供スギ・工芸作品展)→手取峡谷(不老橋・綿ヶ滝)→旧白山下駅→中宮展示館→白山一里野温泉岩間山荘(宴会・宿泊)

10/8 8:00 宿出発→白山白川郷ホワイトロード(ふくべの大滝・梅の木台)→三方岩駐車場→9:30(登山組 16 名とドライブ組 3 名に編成)→10:30 三方岩岳着→12:00 三方岩駐車場着・解散

開催前日から台風 25 号が接近してきて 7～8 日は石川県内でも多くの行事が中止される中、7 日は心配された列車の遅れもなく参加者の多くが小松駅に無事集まりました。名物小松うどんの昼食後、東口近くに野外展示されているコマツの高さ 7.3m、積載重量 297 t の巨大ダンプを見学したあと 4 台の車で出発。最初の目的地である吉野工芸の里へ向かいました。

工芸の里で 3 名が合流し、国天然記念物の巨大な御仏供杉(おぼけすぎ・おぼくすぎ)を歩いて見て回り、ちょうど開催されていた九谷焼・和紙・木工・金工など工芸作家の展示会を見学し



国天然記念物の御仏供杉(白山市吉野)

ました。次に行った不老橋と綿ヶ滝は、学生時代の白山登山では気づかなかった手取峡谷の見学で、水田地帯から一気に 30m 近く浸食された深い峡谷の下を流れる手取川や峡谷を豪快に流れ落ちる綿ヶ滝を初めて知った人も多かったと思います。

かつての白山登山の出発点である白山下は金沢の野町からの電車の終点でしたが、今は鉄道線路跡がサイクリングロードとなり、駅舎は新しくなって昔を偲ぶ古い時刻表が掛けてありました。周辺には当時を思い出す建物などありませんが、ここからバスで別当出合へ、またボンネットバスで岩間温泉や中宮温泉まで行って白山へ登っていたところが懐かしく思い出され、学生時代がみんなの心の中に浮かんでくるのでした。



白山下で(白山市河原山町)

次に行ったのは中宮温泉近くにある中宮展示館です。私たちの学生時代はまだ建物はなく、その少し前までは小学校の温泉分校が夏の間だけ開かれていたところです。館内で分校の教室を模した部屋で昔の暮らしを見たり、ブナ林の動植物や白山の生い立ちの展示を見たり、地形模型で白山の登山道や翌日行くホワイトロードと三方岩岳の位置を確認したりしました。

夕方着いた白山一里野温泉は岩間温泉元湯の源泉から高温の湯を引いてきた温泉で、ホテルやペンション、民宿など 10 数軒ありますが、よく知っている岩間山荘さんに泊まりました。早くから予約していたら、連休にもかかわらず他の客を取らず貸切りにしてもらっていました。ハンターであるご主人や息子さんの捕ったイノシシやクマの肉、近くの山で採られたマイタケやナメコ等各種山菜による、おかみさん手作りの特別料理を楽しみました。他の客がいなかったおかげで、宴会も二次会も気兼ねなく遅くまで行えました。

場所と季節柄、カメムシの飛来に一部悩まされたことと、ひとり遅くまで大きな声で年柄になく元気があったらしいことを除けば、いつものように和やかで楽しい一夜であったと思っています。宿泊料金は驚くほど安く、ホワイトロードの通行料金も協賛宿として無料となり、予定していた会費からかなりの額を返金するくらいでした。ちなみに、おかみさんは今回の集まりの前後にも2度新聞に出ているくらいの有名人です。

8日は朝から見事に晴れ上がり絶好の登山日となりました。8時過ぎに宿を出発し5台の車で白山白川郷ホワイトロードへ入りました。休日で久しぶりの晴天とあり、すでに多くの車が行き来していました。何とか駐車できた、ふくべの大滝と梅の木台でホワイトロードのある蛇谷周辺の地形や植物などの解説をし、三方岩駐車場に着いた時には満車状態で車を止めるのに少し手間取るくらいとなっていました。



梅の木台駐車場、後方は白山(ホワイトロード) 9時半ころにドライブ組の3人以外は、三方岩岳へ登り始めました。15期には自然解説のできるメンバーが3人いるので、先頭を舟田さん、途中で奥名さん、最後に私が入って紅葉している木々や草花などの話をしながら、また見える山々を説明しながらゆっくりと進みました。オオバクロモジの黄やナナカマドの赤、そしてハウチワカエデの変化に富んだ色合いの葉や、イワショウブの赤い実、ツルリンドウの赤紫の実、モウセンゴケなどが見られました。途中から振り返ると、笈ヶ岳や大笠山、奈良岳、見越山、大門山などが見えて、懐かしそうに学生時代を思い出して話し出すメンバーも何人かいました。そして約1時間で山頂広場(加賀岩)に全員到着することができました。

山頂からは白山や前記の山々のみならず360度の大展望で、雲から時々頭を出す穂高岳や立山な



三方岩岳で、白山を眺めながらも望めました。また少し先へ進み、昔の修験者が籠ったとされる窟や夏にはイワイチョウなどが咲く湿地なども見てもらいました。山頂で1時間ほどゆっくり過ごし、重いキスリングを担いで道のないところをブッシュ漕ぎに苦労したことや、雪山と一緒に歩いたときの様子など、それぞれの山々を確認しながら50年近く前の思い出話に花が咲きました。当時は山深くてなかなか来ることができない三方岩岳でしたが、ホワイトロードのおかげで開通時はいつでも簡単に登れて楽しめる山となりました。ちょうど紅葉の最盛期で、しかも休日の好天とあって登山者も非常に多くて賑わっていました。12時には全員三方岩駐車場にもどり、いったん今回の15期会を終了することにしました。天候に恵まれ、メンバーに恵まれ、特に地元のメンバーの協力のおかげで無事、楽しく有意義に行えたことに感謝しています。



笈ヶ岳・大笠山・奈良岳・見越山・大門山をバックにこのあと、松下さんの見舞いに行く者、車で妙高方面へ向かう者、金沢の坂尻邸で泊まって翌日からのオプション登山(砂防新道→山頂→白山禅定道)に参加する者などに分かれました。9~10日は宇野さん、坂尻さん、松林さんに8期の伊豫さんが加わり、私を含む5人で白山へ登り、ワンゲルの絆が続くのでした。

旭岳→旭岳キャンプ場→下山

僕たちはこの夏、北海道へ山行合宿に行ってきました。本来の予定では山中で三泊し四日かけて大雪山系を縦走する予定だったのですが、入山の時点で天候が悪く、回復も見込めなかったために上記の通りと相成りました。移動を含めて九日に及んだ今合宿の行程、感想を記します。

<初日>移動

朝に金沢を出発、新潟から小樽行きフェリーに乗りました。船旅に慣れていないことや、合宿への緊張から最初は落ち着けませんでした。メンバーの先輩方が良くしてくれたおかげで楽しく過ごせました。

<二日目>入山

旭岳→旭岳キャンプ場、テント泊。早朝に小樽に到着、札幌と旭川を経て旭岳に入山しました。この時点で、登山行程のカットを決断せざるをえないほど天候は悪く、山頂からの景色も良くはありませんでした。ですが北海道の最高峰ということもあって登頂したときの感動はひとしおでした。その後、山頂近くのキャンプ場にてテント設営を行い、先輩方と遊んだり食事を楽しんだりしました。

<三日目>下山

残念ながら、天候等を鑑みて下山することとなりました。正直に言うと、今回の登山は、登山経験に乏しい僕からしても少々不完全燃焼の感が残りました。北海道大雪山系の雄大な自然、美しい景色など味わうことがかなわなかったものが多くありました。これからの登山人生でリベンジを果たしたいと思います。

<四日目～>観光

本来の予定では観光の予定は二日から三日間だったのですが、上記の経緯もあって、今合宿は観光がメインになったといっても過言ではありません。田舎情緒のある地域から観光名所が集まる都市部まで様々なところに訪れました。メンバー全員で旭山動物園に行ったり、札幌でラーメンを食べたりと、とても楽しく北海道を満喫できました。自由行動の日も設けられており、穴場

スポットや以前から行きたいと思っていた場所にも訪れることができたので良かったです。

<<まとめ>>

今回の北海道合宿は上記したように少しばかり心残りのあるものとなりました。いつか必ず晴れた大雪山の素晴らしい景観を目にしたいですし、当初の予定も達成したいです。その機会があるのは来年か、はたまたその翌年か、あるいはさらに先になるのかは分かりませんが、その日に向けて今後励んでいきたいと思います。

夏合宿 飯豊連峰

62期 伏木 涼太郎

●プロローグ

今回、東北パーティーは飯豊連峰の杵差岳～北股岳～飯豊山といったルートを縦走しました。山中に4泊5日、移動や観光の日含めると6泊7日という日程で行われた今回の夏合宿、非常に濃密なものでした。その内容をここに書き記します。

●1日目

〈金沢—新潟駅—大石オートキャンプ場〉

朝7時、金沢駅にて恒例のお見送りをしていた。新潟駅に向け高速バスに乗る。ところがバス内にてメンバーの一人、M氏の様子がおかしい。どこかへ電話を掛けたりリーダーとなにか話をしている。どうやら金沢駅に愛用の登山靴を忘れたらしい。だが心配ご無用、ここは大都会・新潟。駅前のモンベルにて登山靴を購入。新潟駅から電車・タクシーを乗り継ぎ、その日は大石オートキャンプ場にて野営。

P.S. 山行の序盤では、新たに購入した登山靴をいかに汚さず、後輩やメルカリで売却するかばかりを考えていたM氏であったが、山行中に愛着が湧いたのだろうか、その後の富士山PWでもその登山靴を愛用している。今でも彼が山行に参加するたびにパーティーのメンバーは彼がどの登山靴を履いているかを必ず確認し、夏合宿の思い出話にふけるのである。

●2日目

〈大石オートキャンプ場—杵差岳—杵差避難小屋〉

朝5時、天候が悪化する恐れがあったので予定

より1時間早くキャンプ場を出発。この日はたいして面白みのない林道とこれまた面白みのない標高差1500mの尾根を約10時間半かけて登った。

林道ではアブやブヨといった虫が非常に多く虫除けスプレーを掛け、防虫ネットを着用して登山をした。行動中も避難小屋でも誰とも会うことが無く不思議な気分になった。



8月9日 杵差岳への急登にて

●3日目

〈杵差岳避難小屋—大石山—門内岳—北股岳—梅花皮小屋〉

朝8時、雨は小降りであったが、濃霧のため予定を2時間遅らせて避難小屋を出発。2時間ほど歩くと頼母木小屋に着いた。ここは、珍しく管理人さんが常駐している避難小屋である。今回の山行で初めて人に会う。管理人さんも久しぶりに人と会って嬉しかったのだろうか、飯豊連峰の写真を見せてくださりコーヒーをご馳走になる。その後、天候は安定し、無事に梅花皮小屋に到着した。

●4日目

〈梅花皮小屋—烏帽子岳—御西小屋〉

この日は快適な稜線歩きがほとんどであった。途中でガスも晴れこれから歩く飯豊連峰が一望できた。高山植物が点在していたが誰も名前が分からず次回までには勉強しておこうと思った。今日は御西小屋から飯豊連峰最高峰の大日岳へ往復する予定であったがメンバーの士気が上がらず断念。



8月11日 御西小屋からの景色

●5日目

〈御西小屋—飯豊山—三国小屋〉

この日は飯豊連峰の主峰飯豊山に登るのに相応しい快晴であった。飯豊山に登頂すると今まで歩いていた稜線そしてこれから歩いていく稜線が一望でき達成感とこれからの期待に満ち溢れた。

その後は標高を下げたせいだろうか稜線を歩いているせいだろうか大変暑く今回の山行では一番きつく感じた。



8月12日 飯豊山山頂にて

●6日目

〈三国小屋—弥平四郎—新潟駅〉

この日は、三国小屋から弥平四郎登山口まで下山するだけの3時間ほどの行動であった。三国小屋のトイレは素晴らしく洋式で水洗であったため快適な山行につながった。

登山口より乗合タクシーにのり野沢駅近くの温泉へ向かう。温泉で山行の疲れを取り、野尻駅より電車を乗り継ぎ新潟駅へ向かう。

今晚の宿は先輩が手配して下さった新潟駅

近くのゲストハウスであった。今まで宿泊したことのないオシャレかつ機能的な宿であった。また、打ち上げは新潟駅近くの肉料理のお店であり、ビーフシチューが絶品であった。

●7日目

〈新潟駅—金沢〉

この日は朝8時に高速バスに乗り、12時半ごろ金沢駅に到着した。夏合宿の終わりである。

●エピローグ

今回の山行は避難小屋を利用したものだったため大幅な軽量化を図ることができ快適な登山が出来ました。また、あまり行くことが無い山域であり、雄大な雪渓とおだやかな山並みの稜線歩き、種々の高山植物を楽しむことが出来た思い出深い山行となりました。

夏合宿 北アルプス縦走

63期 楠 大生



私たちの夏合宿は5泊6日の北アルプス縦走でした。ルートとしては立山から入山し、五色ヶ原、スゴ乗越、薬師岳、黒部五郎岳、双六岳、槍ヶ岳、そして新穂高に抜けていくというものでした。日程もかなり厳しく、11時間行動の日が2日間あり、5人中3人が登山初心者ということもあって、最初は不安しかありませんでしたが、私は慣れない重い荷物に苦しみながら、長い道のりを歩み始めました。そんな時、立山の美しいパノラマが目に飛び込んできて、私の不安は好奇心へと変わっていきました。

私にとってこの夏合宿は初めてのことばかりでした。1つは、3000メートルを越えたことです。幸いなことに高山病になることもなく、元気な状態で高峻な山々を拝むことができました。3000メートル越えは自分の中で1つの憧れでもあり、

4回目の山行で達成できるとは思ってもみなかったのでもって感激しました。



もう1つは、5泊6日という私にとっては長い縦走計画です。準備の段階で何をどう用意すればいいか全くわからない状態で、自分なりに行動食や必須装備をパッキングしていきました。かなり考えて装備を削ったつもりでしたが、それでも80リットルがパンパンに膨れ上がっていました。そして重量も20キロほどで、背負うのがやっという体感でした。山行の中で早く自分の食糧を消費して軽くしたいと、晩御飯の順番を巡って話していたことを思い出します。私はその晩御飯の時間が毎日1番楽しみで、その日の疲れが癒されて次の日もがんばっていたなあと感じます。テント泊も慣れていくもので、後半は全く苦に感じることはありませんでした。それでも午後6時に就寝して、翌朝2時に起床してからの準備をまたしたいかと言われたら、遠慮したいです。

そして、1番私の心に残っていることは、4日目に膝の靭帯を負傷したことです。実はこの怪我のせいで予定を変更して4泊5日で下山ということになりました。私は自分のせいで、最後の槍ヶ岳にこれまで苦楽を共にしてきた仲間達と登頂できないことが悔しくてたまりませんでした。それでもみんなは全くわたしを責めることなく、下山を温かく受け入れてくれました。だから私はまたこのメンバーを誘って槍ヶ岳に行くことを約束しました。

うまくいかないことも多く、辛いことばかりでしたが、もう2度と行きたくないと言えればそれはウソになります。この山行で私たちは今までの何倍も成長できたと強く感じます。これからもしこの夏合宿より辛いことがあっても難なく乗り越えていける気がします、山が好きだから。

8月10日から13日にかけて中央アルプスを縦走してきました。当初の予定は9日から14日まででしたが、台風で出発を一日遅らせ、10日出発となりました。台風の進路と計画書をにらめっこしつつ、一日遅らせれば安全という判断でした。



8月10日朝。メンバー全員が遅刻することもなく集まり、先輩方から差し入れをいただきました。この差し入れが後で大惨事をもたらすのですが、それはのちほど。出発！北陸新幹線で長野まで移動し、乗りかえること二回。ロープウェイで一気に1000m登り、標高2612m。目の前には、晴れ渡った青空の下、千畳敷カール。雄大でした。

悲劇が起きたのはその日の夜でした。リーダーのリュックのなかで差し入れのメロンが割れ、さらに液漏れしてぐちゃぐちゃに！食感も変化してしまって食べられない人もいました（僕です）。食べ終わったあと、トイレットペーパーにメロン汁をしみこませて処理し、さらに袋を五重にして漏れないように工夫してまとめましたが、重さは食べる前と変わらなかったです。

先輩方、来年は液漏れしない差し入れをお願いします。



8月11日。くもり。昨日のスタート地点の千畳敷ロープウェイ駅経由で険しすぎる宝剣岳を迂回しました。濁沢大橋を通り、檜尾岳に到着。避難小屋で幕営。宝剣岳迂回の時だけ晴れていたのので、晴れた状態で千畳敷カールを二回も見ることができました。このときを最後に「山にいる時は」ほとんど曇っていました。

8月12日。東川岳、熊沢岳経由で空木岳。（メインザックを背負っている状態で岩場）+（天候に恵まれない、ときおり雨も降る）+（想像以上岩場が険しい）＝（結構きつかった）。個人的には、岩場のきつさが一線を越えた後に、なぜか楽しくなって不思議でした（これがクライマーズハイなのか？）が同じことを感じたメンバーもいたようです。

8月13日。メンバーの体調と天気をふまえ、南駒ヶ岳の ATTACK を諦め、下山することとなりました。あとは下りるだけということで気持ちは楽でした。朝、体調を崩していた某二年生がゴール目前に走り出したのを見て、皆で「おい！！！」と言ったのも懐かしいです。温泉に入り、電車を乗り継いで金沢で解散した時は、達成感を感じました。

僕自身、去年の合宿が悪天候の影響で1泊2日で打ち切りとなってしまい、今回の山行が初めての本格的な縦走でした。夏合宿経験値は一年生と同じという状況でしたが、「チームのなかの潤滑油の役割を果たす」という目標を立てて歩いてきました。去年の経験から、少し先を読むことができたので、今何をすべきかを考え、周りの人を巻き込んで行動できたことが良かったと思います。去年は、リーダーの後ろをくっついて、言われないと行動できなかったもので、この合宿を通して得たものは大きかったと思います。



パーティーとしても、体調が悪いメンバーが出るなかで、装備を分ける、ペースを工夫するなど協力体制があったことがよかったと思います。トラブルがあっても“チーム力で乗り越える”という、“Inoichiban”なパーティーでした。

夏合宿 南アルプスパーク

62期 山口 溪太郎

自分にとっては2回目の夏合宿は、南アルプスの縦走でした。夏合宿が始まる前に、地図を見て行程の確認をしていると、今まで自分が歩いたことのないような距離を歩く予定であることが改めて分かりました。天気の良いればとても素晴らしい景色が見られるということで、楽しみではありましたが、体力的に耐えられるかどうか不安な気持ちもありました。

しかし、非常に勢力の大きな台風が夏合宿の日程と同じところに接近するということが分かりました。メンバーで色々なプランを話し合った結果、当初6泊7日で予定していた行程を2泊3日に変更し、台風が近づく前に夏合宿を終了させるプランに変更しました。具体的には縦走ではなく、1日目は移動、2日目に甲斐駒ヶ岳、3日目に仙丈ヶ岳に登るという行程でした。

1日目

個人的に、今年の夏合宿が去年の夏合宿や他の山行に比べて大きく異なった点は、移動手段が自家用車であった点です。自家用車で移動したことで、大きなメインザックを持ち歩かずに済むだけでなく、南アルプスまで公共交通機関でアクセスするためには新幹線を使わざるを得ないため、コストも大幅に抑えることが出来ました。お金がない私たち学生にとって、これは非常にありがたかったです。移動中は、この日は天気も最高に良かったので、メンバー同士で会話を楽しみながら、多少行程は少なくなってしまうけれどこの夏合宿を楽しみたいという気持ちでいっぱいでした。

こうして車は仙流荘に到着し、ここからこの日のテント場である長衛小屋まで、マイクロバスで移動しました。この道中、シカの親子が急にバスの前に現れました。この時ほどの距離でシカに遭遇することはなかなかないので会えて嬉しかっ

たです。ただ、もともとはシカや他の動物たちが住むところに人間が勝手に道路を作ってしまったということを改めて思い知らされました。自然と触れ合っていく上で、私たちは動物たちの住処にお邪魔するという気持ちを持っておかなければならないというようなことをバスの中で考えながら、終点の北沢峠に到着しました。ここから10分ほど歩き、長衛小屋に着きました。

2日目

この日は朝から雲がかかっており、予想はしていたものの、天気はあまり良くありませんでした。登り始めると、雨が降ったり止んだりしていましたが、いいペースでどんどん登っていきました。山頂に近づくにつれ、雲が晴れる時間が増えてきました。しかし、個人的には、前半で先頭を歩いてそれなりに早いペースで歩いてしまったため終盤で多少ばててしまいました。このあたりが来年への課題だと思いました。



山頂についた頃もちょうど雲が晴れる時があり、わずかながらもいい景色を見ることが出来ました。下山する途中で電波が入る場所で天気予報を確認すると、入山前の予報よりも天気が前倒しで悪くなるということが分かり、次の日以降は北沢峠から仙流荘へのバスも運休する可能性があるため、この日に下山するということを決めました。

結果的には1泊2日という短い夏合宿となってしまいましたが、山頂に行くことが出来ただけでなく、メンバーとの親睦を深められ、楽しい時間を過ごせました。



60周年記念総会の直後の9月18～20日にかけて北アの燕岳に登った。ここは表銀座と称する代表的な縦走路の起点だが、後期高齢者にはテント泊では無理。燕岳のテント場で2泊して銀ブラをすることにした。

今夏は台風が多数発生し、盆休み以降で登山の機会を狙っていたが、ついに初秋となってしまったわけです。何故に燕かという、最も簡単に登れる山がその理由。もうそろそろ高い山は限界なので、これが最後か？

新宿発7時のあずさ号に乗車して、穂高駅からタクシーで中房温泉の登山口まで。11時半から登山開始したが、ここからが悩みどころ。地図の案内によれば尾根まで凡そ5時間だが、テント泊の荷物があり自分の足では多分7時間程度の予測となる。日没前に着きたいのだがどうなるか？

結果は老骨に鞭打ってなんとか6時に燕山荘のテント場に到着できた。ところがテント場は混雑していて、寝床に適した場所は残っていなかった。設営が済んだときは6時半で既に暗い。下界の安曇野の街明かりがきれいだ。

テント泊の良いところは静かなことだが、現実には厳しかった。隣の住人の寝息とか、夜8時過ぎに設営をする物音やら、朝3時には行動開始する人やら。寝床は多少の傾斜があって苦労するし、荷物を減らすために夏用の寝袋にしたのが失敗であった。夜間に脚のけいれん防止に、白山で後輩から教わった芍薬甘草湯を服用した。効果があったのか軽度の痙攣で済んだ。



御前峰にて鍋島君と

ところで白山の南竜の合宿では、鍋島君のガイドで展望コースから日の出を見に出かけたが、早朝の暗闇には苦労した。ヘッドランプの光が弱く木道が終わった悪路で笹に覆われた大きな窪みで転倒した。大きな怪我が無かったが単独行であったらとヒヤリとした。何とか御前峰まで登ったが、これが白山の見納めと感傷的になった。



大汝峰と千蛇ヶ池

やはり夜は9月半ばになると3度程度まで冷え込んだので安眠できず、持参のウイスキーを目が覚める度に飲んだ。これが失敗であった。翌日の朝は快晴で北アの山々が眼前に広がる。これを見るために昨日苦労したのだから。槍・穂高から遠くは剣まで、南アも富士山も雲海から顔を出している、絶景だ。朝食にラーメンを食し、状態の良さそうなテント場が空くのを待ってテントを引っ越した。そこで燕岳に向かうのだが体がふらつき、力が入らない。どうも二日酔いらしい。去年のこの時期にはマレーシアのキナバル山の登山であったが、あの時は前夜では禁酒したのだが。



槍・穂高を背景に燕岳にて

さて燕を往復した後は、本来の目的である銀ブラと称して大天井岳を目指した。往復8時間の予定で歩き出したのだが、思うように進まないし、振りかえるといつも燕山荘が良く見えて遠ざからない。見通しの良い頂上にあるためもあるのだが。途中由緒のある名物の岩を過ぎて、キレット状の下りから上りきって展望の良い尾根に出るのだが、全面に大天井の登りを見て意欲が無くなった。縦走でなくピストンの行動にはなにか無駄がある、前に進むほど帰りが遠くなる。こんな風を感じたらこれでお終いだ。時間も1時だし昼めしのアルファ米の弁当を食べて引き返した。行動食として自家製のキュウリが、二日酔いの喉の渴きを癒してくれた。



大天井への縦走路

本来の縦走路として歩ければ大天井から、常念岳に楽に銀ブラが可能なのだが、現在の体力ではテント泊では無理だ。だから大天井岳のピストンの計画だったのだが、これでも無理とは何としたことだ。二日酔いもあるけど、意欲の減退は恐るべしだ。退職を記念してテント泊の装備一式を購入して、5年経過した。もう投資した資金の減価償却も完了したし、高い山は小屋泊りに方針を変えることにするか。4時にテント場に戻りのんびりと夕焼けの山々を眺めながらウイスキーを飲む、至福の一時だ。明日は下山で転倒が心配なので、早々に禁酒して眠る。設営をやりなおした寝床は快適だ。

5時起床であまり冷え込みがなく、天候は悪くなる模様。急に小屋上空にヘリが飛来し、一人を釣り上げて去った。以前に南アの登山基地である樺島でも経験があるが、怪我か急病人か。南アの時は墜落による顔面打撲で歩行困難と

のことであった。自分は特に老化でバランスが悪く、白山の下山ではよく滑り、後ろを歩く後輩に冷やかされたこともあった。下山では前のめりの転倒や、シリモチをついた時の尾てい骨のダメージは禁物でぜったいに避けたい。用心して4時間半で下山、登りのコースタイムと同等だ。温泉は屋外のみ露天風呂で、入浴中に雨が降りだした。

ところで、主題である老化現象だが、生物を構成する細胞は常に入れ替わり、2年もすると人は全く別の細胞で入れ替わってしまい別人になるそうだ。これを福岡伸一博士によれば動的平衡と称するそうだ。入れ替わる細胞のものは食物で、不要となった細胞は便となって排出される。だから食事は大切なのだ。筋肉は老化が始まると年に5%ほど低下するそうだが、動的平衡というが細胞が全く同じく入れ替わるのではなく、必要とされない分だけ少しずつ欠落するのかな。老化が始まると動的平衡の原理からすれば、けして筋肉が増加したり、骨が強くなることはなさそうだ。現状維持すら困難であり、確かにトレーニングの効果も2週間以上は持たないのが現実だ。骨も同様で破壊と再生が繰り返されているので、常に負荷を掛けないと変質してしまうようだ。骨粗しょう症のメカニズムか、自分も努力はしているが、それでも8ミリほど背丈が縮んだ。最近アンチエイジングとかよく言われるが、これは女性の美容面の表現らしく、体力の老化現象を阻止する意味ではないと思う。脳内の記憶のメカニズムは別らしく、この流れでは認知症の件は説明できないと思う。

余談だが、金属の場合は全く別であり、自然界にあっては腐食と疲労が老化現象だ。特に疲労の現象は、繰り返されるストレスから金属の結晶間に微小なクラックが生じることだ。だからヘリとかオスプレイとかは、長期間使用すればいずれ墜落する。便利な機械だが、どれだけの期間の使用で廃棄するか判断が肝心だ。

帰りは雨が強くなるところで、シルバシートに収まって帰途についた。この9月という中途半端な時期は人が少なく、悪くない。

仏教伝来の道を旅する

ヒマラヤ・カラコルム・パミール
を越えて西域南道へ

やまざと 31 号の北インドとネパール中心の「仏陀の道を旅する」に続き、33 号では「仏教伝来の道を旅する」を寄稿します。伝来の道はいくつもあります。今回の旅は玄奘三蔵が建国間もない唐を 628 年に出て 644 年に帰還し仏教研鑽と膨大な経典をもたらしました。その唐への帰還ルートに当たるコースと今度の私の旅はほぼ同じです。今は自動車が行き通じるとはいえ我が国から見れば桁違いの悪路ですが、玄奘の往時はインダス川の渡河や谷沿いの崖路を荷駄部隊を率いての旅でした。素晴らしい才覚の彼は各地の政権に協力を取り付けてこの難行を切り抜けています。この事情とルートを知る為にも出発前に玄奘の著わした「大唐西域記訳本」を予め読み、往路復路の足跡を古地図にプロットして見ましたが難しい作業でした。

私の旅は 2017 年 10 月 13 日成田を出て 27 日に戻る 15 日間でした。

10 月 14 日・イスラマバード～ペシヤム

ガンダーラは BC6 世紀～AC6 世紀にわたり現在のイスラマバード・ペシヤワール・アフガンのジャラバードなどカブール川北側で続いた国で交易で栄え仏教が盛況を極めたエリアで仏像製作も AC1 世紀に始まり仏教美術と遺跡が多い。インドも中央アジアでも仏教出現以前から古く地域に受容されていたバラモン教、ゾロアスター教、ミトラ教とも仏教隆盛後も共存しており、その後のイスラムのような排他性がなくガンダーラの都市遺跡であるシルカップでも仏教以外の遺跡が混在していました。



ガンダーラ
タキシラ都市遺跡
仏教寺院跡
BC3—2



ガンダーラ
ジョウジアン仏教
僧院跡
AC2—3クシャーン朝

10 月 15 日・ペシヤム～チラス

チラスまで 220k を 1 列 + 2 列シートの小型バスで標高 1200m 以上でインダス川沿いの川まで 400m はあるというガードレールもない曲がりくねった道を道幅全体を使って運転手は器用に車を交しながら走ります。バスは日本からの中古車で車はスズキとトヨタとバイク、スズキの軽四トラックを改造して座席とテント屋根を付けただけの 12 乗の車が住民の足でバス停もあり、そのバスの事を住民は「スズキ」と呼んでいます。

旅のコース



左：ガイドのサリーム氏、右：運転のシャー氏



自生の大麻の群生の羊も山羊も食べている



バスを先導警備する警察車両

10月16日チラス～フンザ

岩絵・ヒマラヤ西部 8000m 峰のナンガパルパット・三峽合流点などを見ながら杏の紅葉とポプラの黄葉に染まる桃源郷フンザへ向かう。



チラスの岩絵
インダス川渡河を待つ間に僧や商人などの旅人が描いた



西部ヒマラヤ・ナンガパルパット (h8126m)
チラス上部の展望台より



三峽合流点
右：ヒマラヤ
奥：カラコルム
左：ヒンドウクユシユ

10月17日フンザを歩く

ジープでドゥイカル村カラコルム展望ピーク・さらにナガール村でデイラン峰から流れるホーパール氷河・アルチット村旧市街・フンザのバルチット城など見所と住民とのふれあいの多い1日だった。外務省 HP では此の地は立ち入り回避地区となっているが警察のガードもなく、アジア系とは違うヨーロッパ系の顔立ちの住民は親切でカメラにもポーズをとってくれるし、物乞いはイスラマバード以来、会う事はなかった。フンザは豊かではないが貧困さを感じさせない、イスラムであるがイスマール派でシーア派の一派であるが、女性も顔を見せているし礼拝の回数は少ない。全体的に教育熱心でウルタルII峰アタックで遭難死した登山家長谷川恒男氏の遺志で開校した長谷川スクールは大学設置を考えていると翌日の訪問時の校長の弁。



ダウド
ホテルの夕食の一品・うどん＋スパゲッティ風



ウルタルII峰&フンザの村・ホテルテラスより



レデイスフィンガー (h5985m)・フンザピーク (h6277m)



スマイヤル・ラカボシ (h7788m)
ドゥイカル村展望ピークより



デイラン峰から流れるホーパール氷河
ナガール村



フンザ・アルチット村の女性と子供達



目が青い人もおり、アジア系民族ではなく、BC3世紀アレキサンダー東征との関連説もある

10月18日フンザ～ススト

標高 2500m のフンザから標高を上げて上部フンザ地区グルミット村ワヒ族のゴジャール地区を訪問、カテドラル山群を眺める旧王族の経営するゲストハウスの庭で昼食、パキスタン最後の国境の町スストに向かった。道路は上部フンザから急に舗装も抜群で日本並みの国道に変わった。路傍の岸壁に「中国・パキスタン友好の印」と大きく

目立つ赤文字が書かれていた。経済援助、インフラ整備をネタに実質支配を目指す中国共産党の帝国主義が此処でも見えていた。

ガンダーラからフンザにかけては古代サンスクリット本「華嚴経」などが見付かっており、11世紀にチュルク系イスラムのカラハン朝の支配を受けるまでは仏教が栄え、西トルキスタン、東トルキスタン、中国への仏教伝道ルートの主要拠点であった事は考古学仏教史からも明らかになっている。



1991年ウルタルII峰で遭難死した登山家長谷川恒男氏遺志で開校・長谷川スクール・フンザ



カテドラル高峰群
上部フンザ

10月19日ススト～中パ国境クンジュラブ峠～
中国新疆ウイグル自治区タシュクルガン

パキスタンのバスもガイドもスストでお別れ、中国が用意したオンボロのマイクロバスはヒーターもないので標高がグングン上がると寒くなるばかり、其の心算で出発前から冬装備の厚着にしていた。民家一つない道を標高をあげて2時間余り登って国境に着いた。この先は中国側に入るとタシュクルガンまでカメラもダメで監視人がバスに同乗している。国境のパキスタン側でクンジュラブ峠 (h 4733m) と周りのカラコルムを撮る。やっとバスがゲートをくぐると、全員が全ての荷物を持って下車、大きな倉庫のような審査場で徹底的に調べられる。荷物の一つ一つや持参した薬を分析器にかけて時間をかけて調べる。漸く荷物が終わったら、別室に一人ずつ入れて裸にして股間から脚裏まで調べる、女性にも人権侵害だが、この峠の審査場で約3時間余りかかった。中国人はスイスイ審査を通過しているので、敵国日本人を苛めてやれ、という方針のようだ。荷物を改めてバスに載せて出発するともう夕方近い。氷点下の中での荷物調べや身体検査でトイレも近くなる。職員が使うトイレには鍵をかけて使わせてく

れないので、倉庫の外へ出て男女とも用を済ませた。お蔭で私は此処で風を引き2日ほど不調だった。パミールを走りに走って夜中に漸くタシュクルガンに着いた。またしても重いスーツケースを検査場まで荷揚げしようとするが、急勾配のスロープなので引き揚げられず、客が協力して引き揚げているが職員は手伝いもしない。そして長々と検査を始めたが、審査場の先から女性の中国人ガイドが大声でワイワイ叫び出したら検査はスピードアップした。ここには立派なトイレがあったが、用を済ませてトイレから出ようとする、建物のアルミサッシのエッジがこちらを向いており、ぶつかったら顔面に大怪我の可能性大というしろもの、中国中がこんな具合ではあるが、この国にはサービス精神と人間工学的配慮が全く欠けていると言わざるを得ない。この2点は2012年7月にアパチベット自治州の大娘姑山 (h 5025 m) に登った時と変わらないままであり、世界一の工業国を目指す中国トップの2025作戦方針も見通しは難しかり。



クンジュラブ峠 (h 4733m) パキスタン側から撮影・玄奘三蔵もこのカラコルムを越え帰還



クンジュラブ峠
中パ国境ゲート
中国側を撮影



パミール高原
タジク人のパオ
車窓撮影

10月20日タシュクルガン～カシュガル

タシュクルガン市街地は標高3100mで見える山脈も崑崙山脈に変わります。街外れの石頭城は1400年の歴史があるとされ、タジク人の都であり、玄奘三蔵も立ち寄った事が彼の著書大唐西域記にも記されている。この中国西端の街を北東に進むと、タジキスタン国境に幻想的な水色と佇まいの崑崙山脈を背にするカラクリ湖とブルンクル湖に出ます。崑崙でも高峰のコングール峰（h7719m）とムスタングアタ（H7546m）が湖面に美しい。



早朝の石頭城

タシュクルガン郊外



上:カラクリ湖(h3600m) & コングール峰(h7719m)
下:ブルンクル湖

カシュガルは西域南北道の接続点でシルクロードの要衝、玄奘はソロク国と言われたこの地は仏教が盛んだった事を伝えている。現在も人口120万人のウイグル族主体の街。



カシュガル市街果物店(スイカ、メロン、ざくろ)ウイグル自治区は果物が豊富



ウイグル族の子供達

カシュガル市街

10月21日カシュガル～ホータン

今日は520kのバス移動、ウイグル自治区に来たら移動距離が長くなったが道は平坦、しかし、道路の各所で公安の検問が多くその度にパスポート提出などで待たされる。ところによっては公安車が先導するので台数が纏まるまで待つという全く迷惑だが、外人に見せたく無い所に行かせないようにしているらしい。パキスタンでは警察が観光客をガードしてくれたが、ウイグルでは真逆で公安が予約した観光施設に行かせずコース変更させたり、検問で時間ロスさせる、バスがGPSで監視されており砂漠の一本道でも制限時速を守るので時間の遅れは回復出来ず、ホテルでの夕食が途中のドライブインで済ませた事も多かった。公安や役人ばかりが威張り外人観光客に迷惑をかけているが、昔のチベット自治州ならこの場合はガイドが袖の下で解決していたが、今はそれも難しく公安に振り回される事態がウイグルでは続いた。

食事はパキスタンの鶏肉とカレーから様変わりして羊肉が増え、シシカバブ・ラグメン・ポロが多かったので私には向いていた。



ラグメン

羊肉入りスパゲッティの感



シシカバブ

羊肉の焼き鳥の感



ポロ

羊肉入りのピラフの感



ざくろ売りの露店
日本の2倍以上のサイズ甘い

10月22日ホータン滞在

チャリクリクからジープでミーラン遺跡へ向かう24日の予定が公安当局から立入禁止指示が出た事が分かったので21日に続き22日もホータンに宿泊、22日はホータン近郊を廻る事に。こんな事がウイグルでは多すぎる。

ホータンではサンスクリット本の華嚴経が見付かっており、玄奘の大唐西域記によれば、ホータンでは仏教寺院100ヶ寺、僧侶5000人とあり、11世紀初めにイスラムチュルク系のカラハン朝が侵攻するまでは仏教が隆盛であり、多くの訳経者が出ている。

ラクダ仏教遺跡はイギリスのスタインにより発掘されて(1900~1901)ガンダーラ様式の仏像や漢代の銅銭が出てその多くは大英博物館に所蔵され、1903年には本願寺派の大谷光瑞氏が率いる大谷探検隊も訪れて学術調査をしています。崑崙山脈から流れ出るホータン川は玉石の産出で有名だが、今では採掘は上流の岩稜地帯で行われている。川に出て私も探して見たがさっぱり分らなかった。ホータン川はタクラマカン砂漠を横断してタリム川に合流して砂漠に消える。さまよえるロプノール湖の源流です。



マリクアワト古城跡
ホータン川沿のゴビタン砂漠



ラクダ仏教遺跡 ホータン



ウイグル族のブドウ農家・祖父母と孫 ホータン



ラクダ
ラクダ遺跡付近

10月23日ホータン〜ニヤ

今日は300kのバス移動、ニヤへの途中、世界で一番小さい仏教寺院遺跡となるダムクの展示室に寄ったが内部は撮影禁止、寺は南北2.25m東西2.0mという小型遺跡、付近に似た寺がもっと有ったらしい。(タクラマカン砂漠について) タクラマカン砂漠の周辺部で土・砂・砂利が混じったエリアが砂漠に向かって数十kmの幅で続き「ゴビタン砂漠」と呼ばれる。崑崙山脈からダムと水路で用水を引き農業生産も盛んで将来は大規模農業地帯になると思われる。ここには砂漠に向けた植物が繁茂しておりその代表格が此処ではタマリスク、ベニヤナギ、ラクダソウ、葦草である。ゴビタンから先の砂漠中心部は風で砂漠の地形が変わるような砂の砂漠で「流動砂漠」と呼ばれる。タクラマカン砂漠ではこの流動砂漠の地下20m~30mでは水が、その下の層は原油やガスの宝庫でタクラマカンを横断する2本の公路を設けて資源開発を進めており、既に中国では大慶油田に次ぐ規模で、新疆ウイグル自治区の砂漠は中国の隠された資源宝庫と言える。



ダムク小寺院遺跡
発掘現場を囲む展示館
AC7世紀頃



タマリスク

ギョリョウ科

ダムク付近



ベニヤナギ

タマリスクに寄生

ダムク付近



ラクダ草とアシ草 ダムク付近

ニヤ遺跡は今のミンフン市街から120k北上したところに南北25k東西10kの広大な遺跡で今も調査が続られているが今回は出掛ける事が出来なかった。この調査に私の中央仏教学院時代の蓮池先生が参加されており話を聞く機会があろう。此処でも最大の発掘成果を上げたのはイギリスのスタインであった。

10月24日ニヤ～チェルチェン

昨日ホータンからニヤに向かう道中から少しずつ現れていたが、今が見頃の胡楊が目立ってきた。(胡楊・こよう・ことかけやなぎ について)

「生まれて千年死せず、死して千年倒れず、倒れて千年朽ちず」と形容されており、現在は伐採禁止のヤナギ科やまならし属の樹木。樹高最大15m、幹周り最大2.5m、陽光を好み、中央アジアの砂漠地帯の王様の存在。黄葉すると日本の銀杏よりも濃いオレンジに近い色合いになる。葉の形状は銀杏に近い物や細い柳葉の形状もあり、一本の樹でも数種の形状の葉が混在する。

日本の針葉樹林のように密植状態になる事はなく、ゴビタン砂漠にぼつぼつ間隔をあけて立つ。



胡楊の黄葉 西域南道・チェルチェン付近

チェルチェンには16時頃到着、こんな早い時間に着くのは稀だ。前漢時代は且末国と呼ばれ、西域36国の一つでしたが、618年には随に滅ぼされ7～8世紀は強大な吐蕃(チベット)に支配されており、玄奘三蔵の帰路コースだった。

(ミイラについて) ウイグルでは各地の博物館でミイラの展示があり、今日のサボンルク古墳群は実際の古墳の周りに壁を作り、屋根を掛けて展示用にしたものだ。乾燥地帯のウイグルでは死者を着飾らせてそのまま、深さ3.4m長さ5.0m幅2.7mの穴を掘りそこに歴代の家族の遺体が並べられたもので、気候の関係でそのままでミイラに仕上がってしまう。

10月25日～26日チェルチェン～コルラ～ウルムチ

中国公安によるチャリクリク・ミーラン遺跡立入禁止の為、西域南道の旅は24日で終わり。25日は南道から砂漠公路で西域北道のコルラへ向かい、26日はコルラから北京へ、27日は北京から成田へと帰還した。砂漠公路は流動砂漠の中に道を作り、砂嵐で道が埋没しないように道の左右にそれぞれ幅100mの砂漠植物による緑化を行い公道を維持している。途中で塔中油田など大型油田があり西域北道の街は精製石油化学の街に変貌している。別の機会にウルムチ～西安の仏教伝来の道を寄稿したい。終わり

金沢あるある

9期 山中 重夫

60周年を向かえ学生時代、余り興味を持たなかった金沢の全てが懐かしく、今まで見聞きした金沢について思い出を残したく記載します。間違いもあるかと思いますがご指摘ください。こんなこと知ってますか？

(母校について)

四高時代

1. 設立にあたり名古屋と争った。(金沢を決める決定打は、当時の文部大臣森有礼が、金沢の老婆が孫を学校へ連れて行く姿を見て感動して決めたとか。

(本当かな、とは言え明治初年金沢は、東京、大阪、京都について4番目の都市であったことも大きいのではないのでしょうか。)

2. 「帰れ帰れ南下軍」という歌がある。当時四高は、柔道を除いて全てに弱かったそうで三高がこの歌をつくったそう。(3期田村氏より)

余談ですが、もう1校「南下軍の歌」を応援歌にしている学校があるのをご存知ですか。それは長野高校で、松本深志高校との対抗戦があり

その時歌うそうです。又神奈川県小田原高校には、「南下軍の歌」のメロディを使った応援歌があります。

3. 犬山市の明治村には、四高の物理教室、武道場、金沢監獄まで移築されています。それは、名鉄の土川社長が四高出身であったからです。

4. 会津には、その歌碑があります。田村氏の呼びかけの寄付で建てられらものです。作曲者が会津出身だそうです。

5. 四高の校舎が赤レンガなのは雪に最も映えるからだそうです。

金沢大学時代

1. 戦前8番目の帝大として北陸帝大の構想があったそうです。(戦争での為でしょうか)

2. 豊田文一学長(4代目)の時代に海洋学部構

想がありました。(これも何故かなくなりました)

3. 何故多くの反対を押し切って角間に移転したか。

当時の事務局長が、筑波大から転任してきた役人で東京教育大から筑波大への移転で大きな汚点があったそうで、その名誉回復の為頑張ったそうです。(某元教授談)

4. KUWVOB会で唯一Wikipediaに記載されている方は小出義夫さん(6期)二水高校から金大理学部卒ノーベル賞受賞の益川塾の指導教授をされていたようです。

小出さんのホームページ;

<http://koide-phys.com/index.html>

(金沢について)

1. 日本最初の宗教都市であった。(1546年今の金沢城に大阪本願寺の別院として尾山御坊が完成し、御坊が陥落する1580年までそれを中心にかんりの自治が行われていたそうです。

2. 金沢のどじょうのかば焼きは、隠れキリシタンが、浅野川上流でどじょうをとり焼くことにより生活の糧にしていたそうです。(高山右近は、前田家に加護されていました)

3. 芭蕉が奥の細道の中で最も長く逗留していたのは、金沢で一週間いたそうで、香林坊の交差点や寺町、卯辰山山麓の寺院には、多くの歌碑があり、昨年それを廻り、「つば甚」に香林坊より移築された芭蕉が逗留したという部屋で食事をしました。(高額出費でした)

4. 金沢は日本で2番目に幼稚園が出来たところです。1番目は、慶応、2番目は、北陸学院だそうです。(つば甚女将より)

5. 金沢には、シャッター通り商店街がありません。多くの都市にシャッター通り商店街がありますが、片町にはシャッターを閉めている店はありません。それは、山出保前金沢市長(金大校友会会長)が、市中心部に大型スーパーを進出させなかったからです。21世紀美術館、鼓門、金沢西口開発など全て市長の功績だと思います。(山出保著:町づくり金沢岩波新書をご覧ください)

以上、つれづれなるままに筆をとりました。

『一本足りない男』の物語

9期 鍋島 武

◆ 陸上競技 3000mで惨敗

一学年 60 名程度の能登の片田舎の中学校。私の 2 年先輩に、足の速い男がいた。県中学陸上競技大会 3000m で第 2 位に入賞。我らのヒーローだ。

小生が 2 年生の時に、この偉大な先輩のタイムを超えた。部落の期待は一気に『次は武の番だ』と盛り上がった。小生もその気になった。

幸いにも羽咋市 郡大会の 3000m をクリアして、小松の末広競技場の県大会に出場。だが結果は散々なもの。順位さえ数えられない。

これではいけないと、翌年（中 3）に向けて、特訓開始。今度こそは期待にこたえたい。汚名返上の意気込みも強い。

中学 3 年の時の羽咋郡・市の大会は問題なく優勝。金沢市営グラウンドの県大会に挑む。

結果は昨年同様に悲惨なもの。期待を裏切ることになり、地元に戻るのも嫌だ。

あんなに頑張っ
て猛練習をしたのに、何が足りない
のだろうか。

◆ 卓球大会で完敗

能登は雪国。冬は室内競技の卓球が盛んだ。中学 3 年の時、我が堀松中学は羽咋郡代表で県中学卓球大会に挑む。



団体 1 回戦。2 勝 2 敗で、決着は大将格の勝負に。小生の出番だ。『武なら勝てる。平素通りにやるだけだ』と、先生に励まされて、試合開始。

結果は完敗。何故か、脚も手もいつものように動かない。何がダメなのだ。何が足りないのか。教えてくれ！

◆ 大学入試に失敗

38 豪雪の年。金沢大学の入試に失敗。4 月から



（自宅前の道も練習の場だ）

金沢の予備校に通った。この予備校からは毎年 50 名前後は金沢大学へ入ったと思う。

予備校の 4 月のテストで、5 番か 6 番だったと思う。一か月前の本番でこの実力を発揮すれば、浪人しなくてもよかったのに。

今簡単にできることが、なぜ一か月前にできないのか。本番に弱いね。一本足りないね。

◆ ゴルフでいつもチョコ献上

前日までの練習やスタート直前の調整では、調子は上々だ。今日のゴルフは期待できるぞ

それが、最初のティショットで大スライスの OB。『ああ、今日もだめだ』で、18 ホール終了。

やはり本番に弱い。何か一本足りない。



（小生がいつもチョコを献上する KUWW 千葉 9 期生）

◆ 脳ドックで すべての原因が判明

本年 9 月 3 日、勝田台病院で脳ドック受診。

私の脳の MRI 画像を見ながら院長先生と面談。

先生：『これは珍しい画像だ』『血管が一本足りない』 比較的太い血管を指しながら、『この血管がもう一本あるのが通常の人間の脳』

小生：『いつ、どうして無くなったのですか』

先生：『生まれた時からだね』

小生：『どうしたらいいのですか』

先生：『どうしようもない。普通に生活しているのだから、このままでいくしかないね』

脳ドックの結果報告の書類上の所見は、『異常なし』とは書かれているが、小生は子供の頃からの悔しい現象の原因はこれなのだ…と納得。

◆・その後、ちょっとしたヘマをする度に、女房から『一本足りないのだからしょうがないわね』と言われている始末。

・お袋の 7 回忌に、『お母ちゃんのお腹にいる時、一本つけ忘れてるよ。でも頑張っているよ。ご安心を』と報告するつもりだ。

・千葉 9 期様 次回からハンディいただきます。

以上

先日、テレビで1955年製作のキャサリーン・ヘップバーン主演の映画「旅情」を見た。舞台はイタリアのベネチアである。2014年、私は妻とベネチアを訪れた。その時の風景で映画の画面と大きく異なっていたのは、ベネチアのターミナル駅であるサンタ・ルチア駅に乗り入れる列車が蒸気機関車から電気機関車に変わったこと、サン・マルコ広場から鳩の群れがなくなったことぐらいであった。映画に現われる小さな水路や路地の様子は全く変わっていなかった。そのことがベネチアの路地を大きな迷路と見立てて通り抜けた試みを、思い出させた。迷路通り抜けを試みるまでの経緯を順に述べます。

I. 磁気コンパス (磁石)

1. 初めてのロンドンでの街歩き。バッキンガム宮殿からパディントン駅近くの宿へ歩いて帰るのに、視界が開放的なハイドパーク内を1.5km斜め横断するのが分かり易いと考え、宮殿からパークに向った。途中、地図に誤りがあり、道に迷った。通りがかりの婦人に道を尋ね、パークに辿り着いた。妻の英語が役に立った。しかし英語の通じない国で道に迷ったらどうするかが気が掛かった。

2. 初めてのミラノ。繁華街で買い物をし、地下鉄を乗り継いで宿に帰る予定であった。最初の地下鉄では先頭車両に乗るべきだったのに後方に乗り、人の流れに合わせて動いたら地上に出てしまった。地図で位置の確認はでき、歩いて帰る方角が分かったが、交差点のどの通りを進めば良いか分からない。しかし太陽が出ていて、自分の影で進むべき方角との関わりが分かり、通りの選択ができた。と同時に磁石の利用が頭に浮かんだ。以後の旅は磁石の携帯となった。2回目のロンドン、コベントガーデン（東京なら浅草か？）では磁石のお世話になった。

II. ストライキ

迷路の試みの前々日、ミラノからの列車で日本人と通路を挟んで同列になった。彼はイタリアで料理修行中である。その会話でイタリアの鉄道の話となり、ストライキに留意することを示

唆された。私は前回のイタリアの旅では、交通機関にストライキの気配を全く感じなかったが。

III. 迷路への試みまでの幸運

1. 前々日の宿泊はフェラーラであった。この夜、教会が後援する若者たちの演奏会があった。会場は宿から近く、通行上の治安に問題がなさそうなので、覗いてみた。初めて聴く曲なのだが、ジリオラ・チンクエッティ（1970年ごろ）を思い出させる旋律が混じり、楽しく過ごした。また若者たちにカンツォーネが根付いていることが羨ましく思った。

2. 翌朝、駅に向うバスは通勤時間帯を過ぎていたのか、乗車は私たちだけであった。運転手から声がかかり、取り留めのない話を英語で交わした（交通、観光関係は英語が可）。下車の際、運転手は無料の仕草を示した。（イタリアのバス運転手に関しては喜劇が書けるような体験や苦虫を噛み潰した人など様々）「グラッチェ」と言って、よい気分でフェラーラ駅舎に入った。

3. が列車運行表示板を見たら驚いた。乗る予定の列車が運行休止。駅員に理由を聞くと、快速列車はストライキとのこと。次発の特急は満員で発券されない。次々発の特急にバラバラ席があり、旅が継がった。これにより途中のパドヴァ観光を止めざるを得なくなったが、ベネチアでの滞在時間を長くすることができた。

4. 宿はベネチア島の対岸のメストレ（メストレ・カナルア駅間は列車が頻発、所要は約10分）。荷物を宿に置き、サンタ・ルチア駅近くのヴァポレット（水上バス、路線網が充実）切符売り場へ向った。36時間券を求めたら、明日は水上バスがストライキで12時間券しか売れないとのことである。予定に大きな狂いが生じた。食事をしながら妻と、ベネチアでの行動計画を練った。当初、36時間券を活用すれば、気分しだいで何処へでも行けるので詳細な計画を立てなかった。計画は次のようになった。この日は主に水上バスでベネチア本島以外の島々を巡る。翌日はサンタ・ルチア駅から観光客の多くが歩く大運河（ベネチア本島中央を逆S字に貫いている）東側を迂回する道を歩き、リアルト橋詰を経て、サン・マルコ寺院に向い、寺院とその周辺を観光する。

5. 島巡りには路線の乗り換えが必要で、不慣れなため大運河を一往復半してサン・ジョルジョ・マッ

ジョーレ島に着いた。島の教会の鐘楼からの眺めは周辺島々を含めたベネチア全体を俯瞰するものであって、想像以上に素晴らしかった。小説「ベニスに死す」の舞台のリド島、ガラス工房のムラーノ島を巡った。共同墓地であるサン・ミケーレ島を間近かに見た。ベネチア本島の北東側海沿には倉敷の旧繊維工場を思わせるレンガ造りの建物が多くあり、水上バス停留場で多くの労働者が帰宅のため乗込んできたことから、ベネチアは製造業も盛んだと思った。

6. 翌日、水上バスが動かないこともあってか、サン・マルコ寺院への道も寺院周辺も観光客で溢れていた。時間に余裕がありドゥカーレ宮殿など観光拠点の行列待ちも気にならず、またゆっくり見学ができた。昼食はゴンドラが行きかう水路脇のテラス席に座れ、食事と共にベネチアらしさも味わった。

※残念であったのは、サン・マルコ寺院から少し離れたピエタ教会（ヴィバルディが司祭を務め、孤児たちに音楽教育をした）に「四季」の演奏会掲示があったが、演奏開始が20時では、サンタ・ルチア駅までの約2kmの安全な帰りに確信が持てず、断念せざるを得なかったこと。

IV. 迷路への試み

食事中、まだ十分な時間があるので、サンタ・ルチア駅に戻る道を次のように決めた。リアルト橋を渡り、ベネチア共和国時代から存続しているような建物の込まった地区を通り抜ける。地区の通り抜けは直線距離で1kmの大きな迷路とも思われた。

実行はリアルト橋を渡ったところで進行予定方向に沿った路地を選んで始まった。観光客も多く、通りには屋台も並んでいた。混雑の中、屋台の果物などを買って食べたり、店内に入って見て回ったりして雰囲気も楽しんだ。今までの幸運もあってか、たかが1kmの距離との思いもあってか、進行方向を気にせず相対的に人の多くいる方向を選んだ。

そのうち、人も店も少なくなった。建物は同じように2~5階建てで隙間なく連なり、路地はだんだん狭くなり複雑に曲がりだしたりもした。路地の交差場所で進行方向のことが気になりだした。そこで路幅や先の行止まりの有無などの確認と予測も取り入れ進路を選んだ。たま

に磁石も利用した。

お土産品を売る小さな店がぽつんとあったりすると、覗いたりした。

小さな広場に出た。ベンチに座り、経路を思い返し地図で現地点の確認を行なったが全く分からない。広場は2~5階の住居のような建物にびっしりと壁のように囲まれ、視界は真上の空だけである。数百年前の世界に取り残されたような感じがした。

完全に迷路に陥った。人は全く見当たらない。脱出方法考えた。そして次のことに思いついた。水路は必ず大運河に通じているから、水路に出会ったら沿って歩く、大運河に出れば開けた視界と前日の水上バスでの行き来で見た景色とから位置確認ができると。再び歩き出したら小さな水路が見えた。水路に沿って歩く道が無いところは、いったん離れても水路を確認できる位置を守りながら、水路に並行に進んだ。いつのまにか路地は道といえるものになり、低い独立した建物になっていた。個人宅への通路の先に大運河が見えた。そこへ行って見渡すとアカデミア橋が見えた。結局、リアルト橋からの歩いた方向は目標方向から大きく外れていた。大運河から離れないようにしてアカデミア橋に行った。それから先は地図を頼りに、島の南岸の埠頭に向かい、そこを歩き、ビジネス地域と思われる低くて小奇麗な建物と掘割のような水路のある地区を通してサンタ・ルチア駅に辿り着いた。

今、考えれば、試みはドン・キホーテが単騎で風車に突撃したようなものでもあった。

また、記述した不便や苦労を、現在はスマホで回避や解決ができる。だが、旅の未知からくる不便や苦労はワクワク感にも通じる。

※ストライキ余聞

ベネチア、ドロミテなどイタリア北東部を旅し、ミラノに戻った。宿で翌日の空模様を知るためテレビをつけた。ニュース番組で、明日アリタリア航空が部分ストライキを行うような内容があった。私たちの帰国便はアリタリア航空。イタリア語は全く分からないのでフロントに問い合わせたら、国内便の一部でストライキとの事であった。安心した。

3期の登内(とのうち)郁夫様を偲んでー「北の都会」などでの思い出から

11期 長岡 正利



金大広報・森様、
2018. 10. 27 撮影

雪恋ふる北の都の金沢に、^{ころざし} 美しき星舞ひ降りたり。高き志をいだきて。
それ、はるかなる北天を仰ぎつつ万感の思ひを込めて歌ふ哉、我らが魂の歌を。

ああ、若き日の哀感に明け暮れし北の都の想ひ出は、はるかにも遠く消えなんとすが、
かの青春の陽炎は、我らが友情に残れるを確信して。

今宵のうたげをのびやかに語り、歌ひ過さんかな。北の都・・・、アイン・ツバイ・ドライ！

【上写真で手にマイクが、登内様と同期で上の寮歌序詞の、金大理 S36 卒・楠 通昭様。】
【右端には登内様と同期の WV 田村昭夫様。中央に小生と、後列右端には金大山崎学長。】

WV・3期 OB の登内郁夫様が、2016 年の 8 月にお亡くなりになりました。

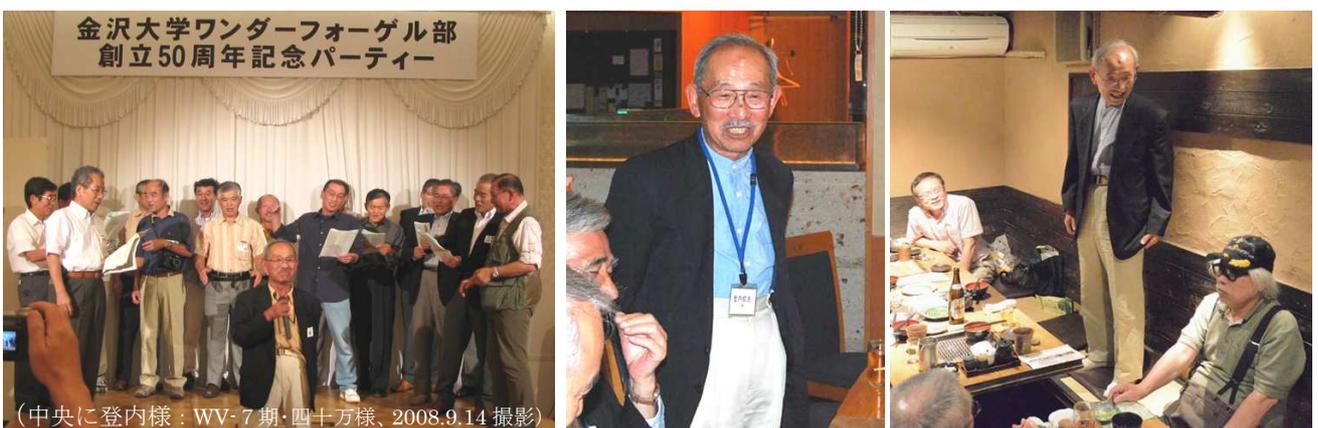
なぜ、11 期の小生が、3 期・登内様の？、につきましては、前年の 5 月までは、毎月のように、「北の都会」で登内様にお会いしておりましたゆえです。しかし、毎月何をお話ししていたのか？言葉少ないお方でしたが、その記憶は殆どなくて、今、お声の調子のみ、鮮明によみがえります。

「北の都会」とは、「東京四高会」と金大 OB の集まりで、毎月、銀座ライオン「クラシックホール」で、お昼にビールを飲みつつの会話と招聘先生方の卓話（講演）、それに四高寮歌を高唱しています。下は、記憶に残る「北の都会」での登内様です。そのお姿を偲んで頂ければと思ひまして。



上は「北の都会」2015年4月「四高漕艇班追悼会」献歌の際に。
左は「北の都会」2014年11月と15年5月(最後のご出席)にて。

写真を見ておきますと、毎回のお姿・旗振りのあり様・お話しぶりが浮かんで参ります。合掌。
続いては、WV-OB の集まりでの登内様。WV-50 年記念会と、関東 OB 総会 2013 年と 14 年での。



(中央に登内様：WV-7期・四十万様、2008.9.14 撮影)

ネパールと元留学生のソバナさん

15期 舟田 節子

「息子が行ったきりのネパールって、どんな所なのかと思って…」

2007年の3月末、石川ネパール協会で開催した企画展に訪れたお母様は、写真の裏まで覗きたそうに眺めておいでました…。さて、どれほどネパールの魅力をご説明できたでしょうか？

ヒッピーやビートルズに限らず、インドやネパールは若者が填まる国…既存の価値観がひっくり返る国です。

もちろん私の場合は、世界最高峰のエヴェレストが聳える国としてインプットされ、続いて、世界の8000m越え14座中、8座が聳え、それらをトレッキングで拝める国…の認識でした。

平成30年は、久しぶりにネパール色に染まった年でした。

そもそもは、e教育サロンという、金沢大学先端科学・イノベーション推進機構内の一般社団法人の理事長を、元卒論指導教官が務めておいで、その月刊機関誌の表紙と巻末を、季節の山と花の写真で飾るようになったのが、ことの始まりです。冬場は取材が難しくなってしまうので、見応えある手持ち写真の中から、「エヴェレスト街道などはいかが？」と提案したところ、3回シリーズで、紹介することになりました。

12年前のことになってしまいましたが、ポジフィルムを39本も使ってきた絶景の数々。山というからには、エヴェレスト！という絶対存在のお茶濁しなら、まあ許されるかも…。ネパールという国や、高所トレッキングも判るように、解説をつけました。

これが元で、この夏には、いわゆる「生きがいサロン」系の月例会で、「エヴェレスト街道に行く」という題での講演を…という流れになりました。

猛暑の時期に、氷雪の映像で涼んでもらおう…が趣旨の、気軽なものでした。少しでも多くの方に見て頂けたなら、散財が報われるというものです。結果は、大盛況ということになりました。

何ととっても、世界レベルの絶景なので、

満足していただいて当然！

でも自分としては、1時間の持ち時間内で、見せるべき映像と話題が、本当に適切に選んでいたか？の疑問が残りました。ある種の基準には達していたい…。そうならなかったらどうか？

それが、たまたま2日後に、BSアーカイブで、天空紀行「エヴェレスト街道に行く」が流れることになったのです。これはシメタ！と、どこを切り取り、何を語っているか、隈なくチェック。

結果は9割がた合格。今時の、どんな器か判らない人の「いいね！」をもらったって仕方がないことです。その点、天下のNHKが同じシーンを絞り込み、同じ話題を語ってくれたなら、そのレベルの鑑識眼はあることになる…（自画自賛）。

あらためて、とびきりの景色を見てきた、とおきの体験することができた！の幸せに浸ったものです。



ソバナさんがe教育サロン勉強会の講師に
(10/12 金沢大学ナノ生命科学研究所にて)

さて、これまで、日本にはない標高と景色を求めて、キナバル登頂、キリマンジャロ登頂、タスマニア、カナディアンロッキーのアシニボイン、ジャモニー〜ツェルマットのオートルート、カムチャッカ、四姑娘山麓などを旅してきました。

しかし、やはりネパールは、特別です。あの敬虔な祈りを捧げる人達や、60年前の日本に重なる山村風景があつての、ヒマラヤです。征服の歴史の、ヨーロッパアルプスとは違います。

さらには、金大へ留学生として来ていたソバナ・バジュラチャリアさんを知ったことで、ネ

パールは唯一無二の国になりました。

そのあたりを今回はまとめてみます。(加齢すると、昔話が多くなります。あれがこう繋がったから…と、俯瞰できるのは、過ぎてから判ることなのです。)

さて、そもそものスタートは2000年のことです。ミレニウム、そして銀婚式。何か思い切ったことをやりたい!

この伏線には、当時アルパインツアーサービス社の名古屋所長だった、29期OBの深井君の存在があります。「何か思い切ったこと」とは、私の場合、すでに、ヒマラヤトレッキングを指していました。

でも、家族と、仕事(自宅でのフランチャイズ学習塾)を抱えた金沢の箱入りは、懂れても、決断のしようがありません。

ところが、一年前、兄嫁が白血病で亡くなり、母が兄宅の主婦に返り咲きました。子育てが終わるまで待った後に、必ずしも悠々自適の時間が保証されるわけではないのです。そこからの教訓は「待つてなんかいられない!」でした。

そんな時に、大学時代は共に山サークル系だったと判った、高校の同級生から、「クンプ協会」なるものを紹介されました。なんと、シェルパのふるさと、クンデ・クムジュン村に博物館を建てようという趣旨の会でした。そんな大それた話…でしたが、経済格差のお蔭で、ネパールでは150万円もあれば学校が建つのだそうです。そのプランの視察のために、協会主催のトレッキングを出す…という。

突然ぶら下がった「ルビーロマン」! 国際支援という、この大義名分なら、家族も、塾の保護者も説得できます!(もちろん、言い訳の次元)

実はネパールのヒマラヤの麓の村からは、お隣富山県の建設会社に、村の若者8名が技術研修生として毎年訪れていたのです。日本語を習得した彼らは帰国後、村の成功者が経営する建設会社兼ガイド会社に勤めます。その成功者とは元教師で、インテリの彼は消えゆく伝承集めなどにも協力的…というのがご縁でした。(その建設会社は、後に、富山の会社の支社という形になりました。)

多くのシェルパ族が、日本の夏の山小屋に、出稼ぎに来ています。岩の殿堂の剣岳、そして立山

近辺は、シェルパたちにはとても近い所…そのように、北陸は、かの地と繋がっていたのです。

その後6回もネパールを訪ねることになったのですが、この初回(2000年2/23 ~3/5)は、やはり圧巻でした。政変前のネパール王国は、今のブータン以上に、幸せな国の評価がなされています。カトマンズの往来は、人と牛が溢れていました。ロープでドアを結わえた中古車が、クラクションで人をかき分けながらのろのろ走っていて、人力車がメインでした。大肉塊や果物の並ぶ汚い露店、真夜中だというのに、「ヒャクエン、ヒャクエン」と言いながら群がってきた子供達…。

(その次の5年後には、それらはもう消えていました。中世文化のままのネパール王国の、ぎりぎり最後を見たのだという気がしています)

国内線でルクラに降り立ち、エヴェレスト街道に入りました。多くのチベット仏教の表象物や、額の紐で三角竹籠(ドッコ)を担ぎ、素足で歩く人々…何もかもが珍しくて、1ピッチ行かないうちに、フィルムを1本使ってしまうくらいでした。

チベット仏教では、旅の安全を祈ったり、歓迎したり印として、カタという絹布を首に掛ける風習があります。これをめぼしい橋や表象物に巻いていくと、無事にそこへ戻れる…という言い伝えもあります。

ナムチェバザールから、思わぬ風雪の中を下山した際、バリバリに凍り付くカタの列に、自分のを結わえてきました。「もう一度、ここへ!」

ナムチェの丘からは、エヴェレストはヌプツェ〜ローツェの壁に遮られ、わずかな頂上部しか見えません。それ以上を見なければ、この奥へまわりこまねばなりません。カラパタールでのパノラマ写真のポスターを、教室に貼り、さらに5年間眺めることになりました。「いつかきっと…」

なおこの時は、下山の飛行機がルクラから3日間飛ばず、チャーターヘリを頼んでカトマンズに戻り、ようやく帰国便に間に合うという目にも遭いました。

そんな興奮冷めやらぬ時に、ネパールからの女子留学生が金大へやってきたのです。

カトマンズの南に隣接する古都パタン生まれ

のソバナ・バジュラチャリアさんは、14歳の時、まず全国日本語弁論大会に出場して最優秀賞をとり、次に日本国際交流基金主催の日本語検定試験で全国優勝し、初来日をしたという人でした。その時のご縁で千葉県の大学に私費留学をし、さらなる磨きをと、ネパール人が一人もいない金大を選んで、「現代日本の地域社会における寺院の役割～金沢の事例」という論文にとりかかっています。そのアルバイトの一つであったネパール語講座が彼女との出会いでした。

流暢に日本語を使えるソバナさんゆえ、文化の違いや些細なことの考え方の違いなどを自由に話し合えましたし、金沢の文化も楽しんでもらうことができました。写真の勉強に来日した弟のアムリット君とも、先端技術大に留学してきた二番目の弟アンモール君との交流もありました。



デン君の七五三祝い
(10/19 久保市乙剣宮にて)

さて、私の「いつかきっと」は、末息子が金大に入学した(2005年)ことにより、叶うことになりました。バイトと称して留守番＝塾稼業を押し付けたのです。教材セットなど、運営ノウハウを叩きこみました。

- ・4/23～5/6 シッキムヒマラヤ(カンチェンジュンガを見る)
- ・8/5～8/15 カラコルム(フンザ、メルヘンの草原 ディラン、ラカボシを見る。OB会で)
- ・10/27～11/23 エヴェレスト街道(ゴーキョ、カラパタール、チュクンピーク)

のように、海外トレッキングをしまくりました。

最後の28日間のトレッキングは、王宮乱射事

件がおきて、ネパール方面へのトレッキングが出ない時期が続いたあげく、ようやく成立したものです。

ナムチェから奥は、高所順応が必要になり、一日につき500m以上標高を上げることができません。そのため展望地一か所でも、20日間かかることとなります。であれば、エヴェレスト街道方面の三か所の展望地を一度で済ませた方が、三度に分けてのチャレンジより、効率がいいとなります。

この時の躊躇の背中押しをしてくれた深井君には今でも感謝です。私より若い読み手に、この稿で一番に伝えたいことでもあります。

トレッキングに申し込む程度の「無謀」なら、やるべきです。あれから、13年の間に、こんな28日間にでられるようなチャンスは一度もありませんでした。自分も周囲も、あれから、歳をとる一方でした。まだ一眼レフを首からぶら下げているだけの体力がありました。存分に、見るだけ見たと言えて、アングルを選べたのは、余裕があったお蔭です。どのシーンも、今でも鮮やかに思い出出すことができます。

これまで重荷のように思ったこともある家族が、一番に夢を応援してくれたことも、一生の宝といえることでした。

この旅の最終日には、ソバナさんのパタンにある実家を訪ね、両親と、新婚ホヤホヤのアムリット夫婦の歓待を受けました。(ソバナさんは、この年の2月に同じカーストの青年と結婚し、川崎市に転居していました)

2007年8/8～8/18 ランタン谷 OB会
山が全く見えない雨期の、ネパールを体験。花を楽しめましたが、山ヒルに襲われ、一年近く、傷跡が潰瘍状態になり悩まされました。

この時も、ソバナさんの実家を訪ね、今度は留学準備中のアンモール君にパタンの町を案内してもらいました。

2009年 来日したアンモール君と交代するように、ソバナさんは帰国し、日本大使館に勤務することになりました。

2011年5月には、奨学金を出してくれていたロータリーの留学生のホームカミング制度を利用して来日。この時は私の勤務校での職員研修でも講師を務めてもらいました。まだ、東日本大震災の傷跡深い日本に、不便ゆえ感謝しながら過ごすネパールを語り、励ましていきました。

2013年3/24~4/1 シャクナゲに染まるゴラパ二峠へ。狭いネパールなのに、西側は民族も宗教も全く違います。ダウラギリや世界一の渓谷、カリガンダキも見ました。この時は、岩崎元郎氏の「地球を遠足」のシリーズでした。妊娠中のソバナさんと待ち合わせ、国際交流祭り用の買い付けを手伝ってもらいました。

2015年12/28~1/2 マナスル三山展望トレッキングへ。この年の4月25日、ネパールで大地震発生。直後にソバナさんの無事を電話で確かめたあと、この頃ようやく出始めた「震災応援トレッキング」に参加しました。ソバナさんと抱き合って再会を喜び、愛くるしいデン君にはステップアップミルクをプレゼントしてきました。

初日をエヴェレスト遊覧飛行で拝みましたが、年始風景が全くないことに、「お正月」だって日本文化のうちなのだと、再発見しました。

そして、2018年10月の今回は、ロータリーの、貯水タンク寄付のプロジェクトにからんでの来日となりました。ご主人と5歳になったデン君も同伴だったので、後半は我が家にホームステイをしてもらいました。ネワール語、英語、日本語がチャンポン状態のデン君には、幼稚園体験や、息子や孫息子達も着用した羽織袴のセットで七五三体験もしてもらいました。翌日は一転ネパールの正装で、ひがしの茶屋街へ。「金沢芸妓のほんものの芸にふれる旅」というイベントに参加し、ここでも「かわいい！」ともてまくりでした。

e 教育サロンの勉強会にも参加してもらいましたが、キャンパス内をドライブした時、「ママの勉強した大学だよ」と語りかけるソバナさんは、本当に幸せそうでした。

これからますます働き盛りになるであろうソ

バナさん、抵抗なく異文化を受け入れているデン君…新しい時代を生きていってくれるでしょう。



『金沢芸妓のほんものの芸にふれる旅』に参加
(10/20 ひがし茶屋にて)



金沢城公園と兼六園を周る
(10/21 金沢城公園にて)

ネパールの政治はまだまだ落ち着いたとはいえませんが、停電も断水も解消されつつあり、近代化が加速していくようです。

山をきっかけに異国の人と知り合い、日本や金沢を少し違う視線で見られるようになったのも、幸せなことと思います。

Key words :

遠山郷(下栗、民宿『井戸端』)、天竜川、赤石岳、隕石クレーター、アニメ『君の名は。』、リニア中央新幹線、JR 飯田線秘境駅、岸田國士・飯田讃歌

信州三大秘境の一つと言われる遠山郷(とおやまごう)は、天竜川の支流・遠山川の流域(旧南信濃村と旧上村)を指す。人々は、遠山川の谷あいを開けた村(上村、和田〔標高400-600m〕)と山腹に点在する村(下栗(しもぐり)、大野〔標高1000m〕)に暮らしている。遠山郷は傾斜地集落の眺望や12月の霜月祭などが有名だ。南北に走る中央構造線が赤石山脈と伊那山地を二分しており、中央構造線に沿って秋葉街道〔秋葉神社⇄諏訪大社〕(国道152号)が走り、上村や和田の旅館には今も旅籠の名残がある。秋葉街道はかつての塩の道「遠信古道」で起源は縄文時代に遡る。遠州から塩、諏訪和田峠から黒耀石が運ばれていた。飯田ゆかりの柳田國男(旧飯田藩士・柳田家の養嗣子)は秋葉街道について「我々から言うならば寧ろ諏訪路とも、遠山通りとも呼んでみたい」(『東国古道記』1952年)と述べている。

下栗は遠山川の深い谷を見下ろす傾斜地にある集落だ。大井川上流部から赤石山脈の茶臼岳を越えてやって来た狩猟採集民が、最奥の大野に住みつけたのが村の始まりと言われている。その後西へ一里ほど移動して現在の下栗に定住し、焼畑農業を始めた。傾斜は急だが南向きの斜面なので、日照時間が長く畑作に適していた。3つの水源(上井戸、中井戸、井戸端)の周りに集落が作られた。



<下栗集落(撮影は全て2018年7月)>

村人の大半は大麦や雑穀を主とした畑作に従事している。穀類は大麦、トウモロコシ、蕎麦、粟、ヒエ、キビを、野菜等は大豆、ジャガイモ(二度芋)、コンニャク、野沢菜、赤石茶、桑などを栽培している。斜度20~40度の急斜面の耕作地では、土が流れないように様々な工夫がなされている。1)畝を等高線状に作る(等高線耕作)。2)常に下から上に土寄せする。3)畑地の間に茶などを植える。4)輪作を行なう。大麦を秋に播いて翌年6月に収穫し、雑穀や豆類を6月から10月にかけて栽培することで畑が裸地になる期間をなくし土壌の流出を防止している。(野中健一『長野県下栗地区における山村生活誌』1992年)

我々に馴染みのある人たちも下栗を訪れている。深田久弥は長野県側から光岳へ登る前に泊まり、案内人を雇っている。下栗は深田久弥お気に入りの村だ。冠松次郎は戦前5本の文部省山岳映画に関わり『赤石岳』(1929年)の撮影では下栗ののんびりとした景色が印象的だったと語っている。民俗学者宮本常一は『山に生きる人びと』(1964年)の中で繰り返し下栗を取り上げている。漫画家つげ義春は1973年4月、秋葉街道取材旅行(上村→大鹿村→高遠)の際、聖岳を背景にした下栗の写真を撮っている。紀行作家岡田喜秋も『山村を歩く』(1974年)で下栗に泊まっている。

2005年の広域合併で遠山郷も飯田市になった。飯田市は人口1万人に対して5.32軒の焼肉屋がある「焼肉屋比率日本一の町」(2013年総務省調査)だ。理由はいくつか挙げられている。1)山に囲まれた飯田は昔から熊、猪、鹿などの山肉への嗜好が強かった(遠山郷には星野屋など今も山肉を売る店がある)、2)満蒙開拓団で満州へ渡ったのは伊那谷出身者が最も多く(下伊那郡阿南村「満蒙開拓平和記念館」資料)、その人たちがジンギスカンを持ち帰った、3)戦中、天竜川の平岡ダム建設の為にたくさんの朝鮮人労働者が働き、彼らから焼肉のタレを学んだ。飯田市民の焼肉好きは本物で、ジンギスカン用の鉄鍋(中央が盛り上がった鍋)は一家に一個あるとのこと。

【1 遠山郷・下栗】

《東京⇒豊橋⇒平岡⇒上村⇒下栗》

初めて遠山郷を訪れたのは、41年前の1978年1月だった。下栗という赤石山脈の仙境へは当時

住んでいた東京から丸一日かかった。豊橋駅で新幹線から飯田線に乗り換え。車内の物売りのおばちゃんが連結部に座り込んで弁当を売っているのを見て、アンデスの高原列車かと思った。飯田線には秘境駅がいくつもある。乗降客のいない駅を列車は律義に停車していく。佐久間ダムを過ぎ長野県にはいってしばらくすると平岡駅に着いた。3時間近い天竜川を眺めながらの鈍行旅だ。平岡は遠山郷の南の玄関口となる。ここから路線バスに乗り秋葉街道を北上し上村で下車。

この先は歩くしかない。上村小学校〔標高564m〕横から下栗〔標高1000m〕まで標高差400m強、7kmの道を、雪がちらつく中、3時間かけて登った。こんな山奥に本当に村があるのだろうかと思いつつ不安になりながら歩き続けた。突然視界が開け、20~40度の急斜面にへばりつくような畑と家々が現れた。山上の集落なのに、天に向けて両手を広げたような伸びやかさに驚いた。当時村で唯一の民宿『井戸端』に泊めてもらった。夕食はマトンのジンギスカンだった。



<『井戸端』から聖岳>

翌朝は晴れ。宿の前からはピラミダルな聖岳〔3013m〕が谷奥に望めた。下栗で一番高く開けた場所〔1060m〕に上村小学校の分校があった。子供たちの声が山あいには響いていた。村に滞在し、風土に合った穏やかな暮らしを大切にしている人々の様子を見て、すっかり魅せられてしまった。『井戸端』の野牧さんは当時60代後半。20代の僕にはどう見てもおばあさんだったが、みんなは「おばさん、おばさん」と親しげに呼びかけていた。温かく話し好きで大正琴をたしなまれる上品な女性だった。『井戸端』は野牧さんがひとりで切り盛りしていた。晩御飯の支度を手伝ったり、

突然やってきた野牧さんの親類と酒を飲んだり、まるで実家に帰ったような気分だった。その後『井戸端』のおばあさんを訪ねて足しげく下栗へ通うことになる。最初は独りで行き、次に友人や家族と訪れ、ワングル同期の渡辺君（17期）を誘うこともあった。それまでは山のピークにしか関心がなかったのに、前衛の山やそこでの村人の暮らしに興味を持つようになった。

通い始めた頃は、まさに下栗の大きな転換期だった。麓の上村から自動車道が開通したのが1960年代、最奥の大野まで延びたのは1985年。道路のお陰で生活は格段に便利になった。それまでで商人が山道を通して生活用品や食料品を運んでいたのを、車が取って代わった。そして、その道路を通して人々は、仕事や教育の機会を求め村から去って行った。

【2 赤石岳】

《①転付峠→千枚岳→荒川三山→赤石岳→樺島》

南アルプスは北アルプスのような華やかさはないが、山一つ一つが大きくて奥深いのが魅力だ。赤石山脈の盟主赤石岳〔3120m〕に初めて登ったのは、ワングル現役時代の1972年10月「南ア南部PW」だった。メンバーは、PL川端さん（16期）、奥名さん（15期）、北川さん（16期）、同期の井上君と僕の5名。山梨県側から前衛の山を越え、主稜線を縦走後、静岡県側に下山するという秋の南アルプスを堪能するPWだった。他のほとんどのことは忘れてしまったが、千枚岳〔2880m〕を出発する時のPLの言葉は鮮明に記憶している。日の出1時間前、澄み切った濃紫の空には星々が瞬いていた。千枚岳から真南、大井川が大きく抉ったV字谷の底、はるか駿河湾の水平線上にカノーパス（全天でシリウスに次いで明るい恒星）が見えた。東海地方での南中高度はわずか2度強。出たと思ったらすぐ沈んでしまうので「横着星（おうちやくぼし）」と呼ばれるくらい、なかなかお目にかかれない星だ。誰かが興奮気味に「あれは竜骨座のカノーパスだ」と叫んだら、PLの川端さんが「それは不可能プス」と返した。オヤジ・ギャグに誰も笑わなかった。夜明け前の凍てついた空気が更に冷たくなった気がした。

《②平岡⇒上村⇒しらびそ峠→大沢渡→大沢山荘→大沢岳→百間洞山の家→赤石岳→樺島》

二度目の赤石岳は、山の友人と長野県側から小屋泊まりで登った。新幹線豊橋駅で待ち合わせ。平岡からのバスを上村で下車し、タクシーでしらびそ峠〔1833m〕へ。ここから大沢渡へ700m下り、沢から1700m登り返す体力勝負のルートだ。大沢渡から標高差で150mほど上がったところに無人の大沢山荘があった。他に登山者もおらず広い部屋でくつろぐことができた。水場も整備され、なんて素敵なお避難小屋だろうと思った。翌日、大沢岳〔2819m〕を越え百閒洞山の家〔2515m〕に泊まる。宿の主人から前泊の小屋を聞かれ正直に大沢山荘と答えたら、なんと経営者が同じだった。「水場の整備で物入りだね」と言われ、大沢山荘の宿代を泣く泣く払った。現在しらびそ峠から赤石岳へのルートはあまり歩かれず、大沢山荘も荒廃が進んでいるようだ。せめて小屋の水場だけはきちんと使えていますように。

南アルプス南部の山名を冠した日本酒には、『聖岳』（長野県飯田市・喜久水酒造）と『赤石岳』（静岡県島田市・大村屋酒造場）がある。『聖岳』はJR飯田駅前の酒屋でもネット通販でも買えるが、『赤石岳』は手に入らない。噂によれば、夏期のみ営業する赤石岳の小屋でしか入手できないとか。下界で売らず、赤石岳まで酒をボッカするこだわりが凄い。酒好きで体力のあり余っている人はぜひ赤石岳へ。（大村屋酒造場は『赤石岳』の小売りはしていません。ほんとうは、下界では島田市の竹島酒店が唯一『赤石岳』を扱っています。数が少ないので事前に予約して欲しいとのことです。）

【3 下栗再訪】

《飯田⇒矢筈トンネル⇒しらびそ峠⇒下栗⇒上村⇒矢筈トンネル⇒飯田りんご並木》

2018年7月初旬、梅雨の晴れ間を縫って、23年ぶりに独りで下栗を訪れた。飯田駅前でレンタカーを借り東へ向かう。一部完成した三遠南信自動車道の矢筈トンネルを抜けると遠山郷だ。飯田から1時間。下栗の宿が取れなかったため、しらびそ峠の村営「ハイランドしらびそ」（収容人数90名）に泊まった。眺望は素晴らしく、南ア南部だけでなく、振り返れば中央アルプスや遠く槍・穂高も望めた。宿泊客は3人だったが山荘のスタッフは6人もいて手厚いサービスを受けられた。



＜南アルプス南部のパノラマ（左から荒川岳、大沢岳、中盛丸山、兎岳、聖岳）＞

しらびそ峠から下栗までは南アルプスエコーラインを走る。ガードレールもなく岩だらけだった悪路がきれいに舗装され、快適な40分の山岳ドライブを楽しめた。だが期待して訪れた下栗に昔日の面影はなかった。丁寧に耕されていた急傾斜の畑もところどころ荒れていた。廃屋も目立った。いつもお世話になっていた民宿『井戸端』は、住む人もなくひっそりとしていた。〔下栗人口：1977年83戸330人⇒2017年44戸90人〕

分校（1977年時点で児童数22名）は1987年に麓の上村小学校に統合され、校舎跡には宿泊施設「高原ロッジ下栗」と食事処「はんば亭」が建てられていた。子供たちが元気に遊んでいた校庭は駐車場になり「飯田線の秘境駅と天空の里・下栗を巡る」ツアーバスが停まっていた。分校跡地には二つの石碑があった。それは僕には、この村はこれから“日本の原風景”のテーマパークとして生きていくのだ、という観光立村宣言に思えた。

- ・『遠山郷下栗の里を日本のチロルと命名する』（東京学芸大学教授 市川健夫）
- ・『下栗ほど美しい平和な村を私はほかに知らない』（日本百名山登山作家 深田久弥）

【4 御池山隕石クレーター】

遠山郷は21世紀に入って、日本国内唯一の隕石孔・御池山クレーターで知られるようになった。下栗の北の御池山〔1905m〕で発見された直径900mの隕石孔だ。3万年前に直径50mほどの隕石が衝突してできたと言われている。南アルプスエコーラインは、ちょうどこの隕石孔の内縁部を走っている。飯田市郊外には旧石器時代の竹佐中原遺跡

と石子原遺跡（共におよそ3万年前）が見つかっており、伊那谷には太古から人々が住んでいたことがうかがえる。御池山に天から突然巨大な星が降ってきて山が割れるのを目の当たりにし、彼らはこの世の終わりだと思ったに違いない。

もし隕石が西へ20kmずれて伊那谷南部に落下していれば真円の隕石湖が出現し、その隕石湖を天竜川が貫き独特の景観になっていたことだろう。隕石湖と言えば、2016年に大ヒットした新海誠監督アニメ映画『君の名は。』の舞台「糸守（いともり）湖」が連想される。御池山のクレーターではなく、伊那谷南部の旧石器人が全滅し隕石湖が立ち現われた並行世界があるとすれば、『君の名は。』のヒロイン三葉（みつは）のような特殊能力を持つ太古の記憶の伝承者が畔に住んでいて、再びの災厄から人々を救うのかもしれない。（『君の名は。』は、時空を超えた男女とりかえばや物語です。放送が始まる時間になると銭湯の女湯から人が消えると言われた『君の名は。』（1952年NHKラジオドラマ。後に映画化）ではありません。ただ、男女が会えそうで会えないというシチュエーションは似ています。）



<御池山クレーター・見所ご案内看板>



<クレーター（ビューポイントから南西方向）>

【5 飯田讃歌】

2027年の開通を目指しリニア中央新幹線〔品川⇄名古屋〕の工事が始まった。飯田にも新駅が予定されている。たくさんの秘境駅があるJR飯田線とリニア中央新幹線がつながるのだ。東三河・遠州・南信州を結ぶ三遠南信自動車道も中央道飯田JCから南の新東名高速道路へ接続すれば、東西からのアクセスが飛躍的に良くなる。その時、遠山郷へは多くの観光客が押し寄せていることだろう。秘境駅は休日の金沢駅のように観光客で溢れ、「日本のチロル・下栗」の分校跡駐車場はツアーバスで満杯になる。“日本の原風景”を守る為、モンペ姿の急傾斜地耕作特化型AI搭載ロボットが鋤で丁寧に畑を耕している。周囲の景観に溶け込んだヒト型ロボットは夕暮れ時には野良仕事を止め、谷に向かって大きく腰を伸ばす仕草をしてから最寄りの空き家へ行き、静かに充電をする。遠山郷は大きく変わるかもしれない。でも遠くに眺める南アルプスの姿だけはいつまでも変わることはないだろう。

劇作家の岸田國士は戦時中、娘の岸田今日子らと飯田に疎開（1944～47年）していた。一家は優しく遇され、岸田國士は帰京に際し讃歌『飯田の町に寄（きし）す』を贈った。飯田大火（1947年4月）で中心街の7割を焼失した市民には、復興へ向けた心強い応援歌になったことだろう。防火帯のりんご並木には『飯田の町に寄す』の碑が建っている。改めてこの碑に向き合うと、リニア中央新幹線の開通により新たな時代を迎える飯田の人々へのメッセージにも思える。

「飯田 美しき町、飯田 静かなる町、飯田 肅然と古城のごとく丘に立つ町」と始まる讃歌は、こう結ばれている。

飯田 天竜と赤石の娘

おんみさかしくみめよく育ちたれど

いま新しき時代に生きんとす

よそほひはかたちにあらず

美しく静かに

ゆかしく豊かに

おんみの心をこそ新しくよそほひたまへ

（初出「飯田市報」第1号1947年6月26日）

2018年小屋作業に参加して～甦った新道～

20期 松下 和隆

【日程】

- ① 2018年春、6月2日～6月4日（2泊3日）
- ② 2018年秋、台風24号のため中止。

【参加者】

■ OB（12名）

- （13期）大島良治、辰野隆義、吉本良治、
- （15期）上馬康生、奥名正啓、坂尻忠秀、松縄宏、
- （16期）北川隆次、
- （17期）上田喜久雄、
- （19期）梶典雅、
- （20期）久富象二、松下和隆、
- （22期）黒崎敏男

■ 現役（3名）

- （61期）山本球、
- （62期）笠島聡一郎、吉田優輝

■ 集合写真（ベルクハイム、6/2上馬氏撮影）



後列左から（敬称略）、松下、梶、笠島、吉田、山本、大島、上田、辰野、前列左から、上馬、坂尻、松縄、奥名、黒崎、吉本、北川

【1】崩壊が進む、倉谷の道

春の小屋作業は、新緑とそよ風に包まれ、犀川ダム湖畔を歩く足取りもすこぶる軽やかです。ただ近年は、出島を過ぎたあたりから、倉谷沿いの道が激しく崩壊してきており、歩いていてもちょっと気が抜けません。つり橋を渡って倉谷川沿いにさしかかると、毎年のように道が浸食されていく様子が、はっきりと分かります。特に雨量計付近の道は、浸食が激しく、道が徐々に削れていく様子が手に取るように分かります。コムラ谷から雨量計の手前までの区間は、昨年と比べてみてもその変化は著しく、やがて道がなくなるのも時間の問題かと思われます。



浸食が進む道 Before/After（雨量計の手前、左は昨年9/30撮影、右は今年9/20黒崎氏撮影）

また、雨量計過ぎの「へつり」の箇所は、吊るされた丸太の上を今までは何とか通行可能でしたが、現在は（黒崎氏の10/2下見報告によると）難所の距離が更に増大し、最後部分はなんと大岩をよじ登らなければならなくなっていました。また先日の台風24号の増水で、丸太の一部が流された模様で、今現在10/2においては、通行不能の状況です。



増大する難所（雨量計過ぎの「へつり」、左は昨年5/13撮影、右は今年9/20黒崎氏撮影）

【2】高巻ルートの整備

前述の難所を迂回するべく、昨年从高巻ルートの整備に着手しました（下地図を参照）。



高巻ルートの水平化案（梶氏作成）

昨年は従来ルート（緑色）を整備しましたが、ベルクハイムの裏をかなり登らなければならず（50m程度）皆さんからの評価はイマイチ（いやイマニかな）でした。そこで今回は、その水平化を試みるべく新ルート（赤色①）を新設しました。

若干斜めに登りますが（20m程度）従来の急登に比べれば歩き易くなったかと思えます。コムラ谷の出合までは、従来のヤセ尾根（緑色）を活用します。鉄塔がやがて現れてきますが、ここからコムラ谷へどうやって下るかが、今現在、課題として残っています。

最短ルートは赤色ルート㊸なのですが、ここはあまりにも急坂で不向きでした（梅氏調査より）。残るルートは、昨年、暫定的に刈払った緑色ルート㊹もしくは以前からあるルート㊺かと思われませんが、それぞれ一長一短あり、どちらが良いか今後の調査と検討が必要です。ルート㊹は倉谷の道からすぐに登れるのがメリットですが、斜面は急傾斜で、うまいルート選定がカギであり、重い荷物のボッカも想定した緩斜な道を作る必要があるでしょう。一方、ルート㊺は昔からある道なので少ない労力で整備できるかと思えます。しかし、この道も現状ではかなり急登なので、緩斜道への付替えが必要です。また出合からのアプローチも長かつブッシュにすぐ覆われてしまうので、保守がちょっと大変そうです。ここはひとつ、皆で良い知恵を出し合いたいものです。

【3】水が出ない…

冷えた缶ビールが飲めるぞ！…小屋に到着したらすぐさまこの目的を達成せんがために、のんべーの皆さんが沢の取水口へと出向きます。しかし、なぜか今回はいくら待っても水が出ません。原因は取水ホースの漏水でした。ホースの劣化がかなり進んでおり、数か所から漏水しています。一部を大島さんが応急手当し、なんとか水が出るようになりましたが、水量は明らかに落ちてきています。来年の課題がまたひとつ増えました。



ホースの漏水手当（ベルクハイム横の谷、6/2撮影）

【4】ベルクハイムの夕べ

一日目は前述のような作業やトラブルで、あっという間に時間が過ぎてしまいました。午後4時頃にはもうみんな腹ペコです。作業をちょっと早めに切り上げて、夕食とすることにしました。小屋からは何やらいい匂いがしてきます。黒崎シェフが腕に寄りをかけてじっくりと煮込んだ特製カレーです。ベルクハイムが、レストランへと変わりました。



黒崎シェフの特製カレーを堪能（6/2上馬氏撮影）

夕食後は囲炉裏を囲んでみんなで談笑。山奥なので誰に遠慮することはありません。明日、新道が高三郎まで開通するだろうことを祝して、横断幕の文言をみんなで考えることにしました。「祝、KUWV 高三郎新道、甦」と決まりましたが、なんと「甦」の一文字が、誰も正確に思い出せません。あーだこーだと悩んだあげく、最後に、現役生の山本君が思い出してくれました。おお、これはもしや「新道ルネサンス」の予兆か…長年途絶えた高三郎への道が今ここに復活し、再び現役生達のもとへと戻っていく…なんてことになれば最高だなと、僕はその時、心ひそかに願いました。

6月の囲炉裏はちょっぴり熱く、後半は「護摩行」のようになってきたので、水をかけ、明日に備えて寝ることにしました。



ベルクハイムの囲炉裏（6/2撮影）

【5】高三郎新道、甦る！

翌早朝4時、ベルクハイムを出発。高三郎へと新道整備に向かいました。新道登り口の金山谷には、新しい橋が架かっていました。去年までの丸太橋はもう無く、ちょっと上流側に新しい橋が架けられていました。前よりも低いので、万が一落ちても大丈夫です。



金山谷の新しい橋 (6/3 撮影)

金山谷を渡り、今回の作業場である高三郎頂上付近へと向かいます。草刈り機などの資材を荷揚げするため、滴り落ちる汗を拭き拭き、新道を黙々と登りました。そんな時、現役生の吉田君(2年)が傍らでポロリと言いました。「僕はこんなきついコース初めてです」と…。

新道は「新人トレーニングコース」とばかり思い込んでいた僕には、ちょっと意外でした。でもよくよく考えてみると、それは先輩からの伝承があったからこそその思いなのですよね。それが途絶えてしまった今の現役生にしてみれば、新道は上級者向けの難コースであり、ましてや高三郎なんぞは秘境中の秘境なのでしょう。実際、東京の冒険ツアー会社(パワーゾーン)では、高三郎ツアーを組んでいて、「白山連峰の秘峰、マニア垂涎(すいぜん)の山」などという粋なキャッチフレーズで参加者を募集していたりします(黒崎氏紹介より)。新道は、今やちょっとした「冒険コース」になっているようです。道理でしんどいはず。旧道分岐直前の急登なんかは、まさにワールドカップ級…「激坂、半端ないって！」です。

途中、昼寝岩で休憩しました。コシアゲ谷からの涼風が、なんとも気持ち良かったです。「昼寝岩」を懐かしいと感じたあなた、ぜひもう一度、新道にチャレンジしてみたいかがでしょう。



「昼寝岩」で休憩 (6/3 上馬氏撮影)

ベルクハイム出発から5時間半。やっと作業現場に到着しました。9時過ぎより草刈り機を使って作業開始。坂尻さんの大活躍により、濃密なブッシュが草刈り機によってバンバンと吹っ飛んでいきます。そして、いよいよ最後の1本。この灌木は、のこぎりを使って丁寧に切り倒しました。ドサッ…4年越しの作業が、遂に完了しました。



万歳三唱、最後の一本を伐採(高三郎頂上付近、6/3撮影)

高三郎頂上の三角点周辺もきれいに整備し、そしていよいよ記念撮影です。用意してきた横断幕

「祝、KUWV 高三郎新道、甦」を掲げて、残雪の上に並びます。空はブルースカイ！…絶好の記念撮影日和です。後列4人は「60周年記念Tシャツ」を着てポーズを決めます。見て下さい、表と裏のデザインがアピールできるように、各自着分けているのが分るでしょうか。どんなときでも、ちょっとなにかしたくなるのが、ワンゲル魂です。



新道、甦るなり（高三郎頂上、6/3 上馬氏撮影）



祝いの酒（高三郎頂上、6/3 撮影）

その後は、持参の酒でささやかな乾杯。振り返ると犀奥の山々が見えます。白山まで届くこの道に、青春のエネルギーを燃やしましたね。その日々が走馬灯のように甦ってきます。



見越・奈良・大笠・白山（高三郎頂上、6/3 上馬氏撮影）

【6】感想と今後について

(1) 取水ホースの漏水補修

これは直近の課題でしょうか。大島さんの応急処置で暫く持てば良いのですが…

(2) 小屋前の朽ちたニセアカシアの伐採

昨年からの持ち越し課題です。今回は伐採プランを練りました。次回はその執行あるのみです。

(3) 高巻ルートの整備

崩壊が進む倉谷ルートの代替えとして、必要性が高まってきました。「できるだけ登らない」を合言葉に、今後も整備を進めていきましょう。

(4) 新道の保守

4年間続いた新道整備も今回でひと段落。今後は、この道を多くの人々に楽しんでもらいたいものです。春はシャクナゲ、秋は紅葉…「懐かしの高三郎ツアー」をお楽しみ下さい。ただ、その際は、「のこぎり一本」をご持参下さい。皆さんの「ボランティア整備」に期待します。

(5) 作業を終えて

最終日は快晴。作業目標も達成し気分は最高。ベルクハイムからダムまでを、皆でワイワイと楽しく歩きました。同伴するOBの皆さんはその道の専門家ばかり。目に入るものがすぐに話題となり、しかも解説付きで返ってきます。動植物、地質、歴史、心理、化学、宇宙…など、話が尽きません。まるで青空教室です。この楽しさを現役生達とも分かち合いたい。自然を観察しながら皆でワイワイとベルクハイムへ行ける、そんな「ハイキングコース」みたいな道がもう一本（今の通行止めルートを迂回するようにして）あると素敵だな、と思いました。それは、鍵の制約が無く、いつでも誰でもが、安全に気ままに行ける道です。



ありがとう、高三郎（犀川ダム、6/4 上馬氏撮影）

『やまざと』一昨年号に続いて、近年の外国での写真を紹介させていただきます。なお、遅れての送稿で、編集の仲村様と皆様、ご担当の谷内様(デザイン・プリーズ社)には大変お世話になりました。

その8: インドのガルワールヒマラヤ・花の谷と、スィク教聖地のヘムクンド湖へ - 2015年7月に

ヒマラヤの「花の谷」は、ヒマラヤ登山の黎明期・1931年に、英国人 F.Smythe が到達して名付けた地。ヒマラヤ山中に分け入ることが困難であった時代には花の宝庫と言われたものの、今日の目で見れば、ヒマラヤの何処にでもある、氷河が削った広い谷。花々も、普通のヒマラヤ山中です。



山中にはスィク教の聖地「ヘムクンド湖」があって、大勢の巡礼者が。観光の人は目立ちません。小生は、インド南部からのドラヴィダ系の人たちと。標高に応じた服装に見るとおり上部は寒冷な。



氷河湖脇のスィク教寺内と、その行者さんと一緒に。下界での、三叉戟を携えたヒンドゥ遊行者。山中・シリケシのガンジス河岸辺で、亡き人を偲びつつの、流し灯で祈る人たち。



山麓・ハリドワールの、ヒンドゥ教の沐浴地(ガート)は、常に、驚くような賑わい。氷河からとうとう流れ下る大河・ガンジスの水は、炎天下にあっても歯の根が合わなくなる位の冷たさですが、この水が全ての罪障を洗い流し、現世の苦しみからの解脱が叶うとの、信仰への熱意で。

右下の2枚は平野部で出逢った麗しの人たち。皆様も、どうぞ、素晴らしいインドへ是非！



その9:インドネシア・ジャワ島とスメル山登山ー山火事からの帰還ー 2015年10月に

日本山岳会(JAC)創立110年記念事業「インドネシア・プロジェクト」の一環として、参加者が自ら組織し企画した登山隊(JAC副会長が隊長)として、ジャワ島の最高峰スメル山などへ。

ジャカルタは、思っていたよりも遙かに現代的な大都会でした。下は、Central Park Hotelと隣接のSOGO店内。更に隣接のMallでのMAZDA新車発表会と、その説明嬢。



東洋最大規模を誇るボゴール植物園を訪問。その歴史は蘭印総督府の庭園に発する。日本の統治時代は中井猛之進が園長を務めたが、軍が植物園の樹木を徴発・伐採しようとした際に身を挺して阻止した史実が、誇りを以て語られる。その正門と森閑の園内。休日には、若い人たちが賑わう。



スメル山(3679m:メルー山とも)は、ヒンドゥー世界で言う世界の中心に聳える須彌山。10数分に1回は小噴火で、急峻な砂礫斜面はずり落ちつつ登る困難さ。乾期後半の現地では各地で自然発火の野火で、下山は猛火迫る中を何とか。目は見えず、呼吸出来ない恐ろしさを思い知りました。



下山後には、友人の知人がマラン近郊でガムラン舞踊の学校をやっておられるので、そちらを訪問。最後の2枚はジャカルタでの、モデルさんの業務用撮影に混せて貰ったの。まじまじと見つめられて、小生、レンズを通していても、思わずのたじたじでした。では、この続きはまた来年に。



(なお、KUWV-OB会のHP中、「会報Web版」からご覧頂けますと、カラーでの閲覧が可能です。)

その10: 昨年は、小特集「白山開山 1300 年に寄せて」の中で、「かつての白山信仰と山中での昔の暮らし」の拙稿を載せて頂きました。今年は、その 1300 年祭礼についての、次の講演予稿を。

セッション I

日本山岳文化学会 大会 2018. 11. 17-18 一般講演
(東京慈恵会医科大学高木会館 2 号館にて)

各地での白山開山 1300 年祭礼(昨年)と関連の催し

長岡正利

演者は本学会 2016 年大会で、一向一揆(天正 2(1574)年)や明治の廃仏毀釈を経ても現代に遺った白山信仰の諸仏(うち重文が 2 点)などを紹介した。白山は、伝承に拠れば、養老元(717)年に越前の修験僧・泰澄が登頂・開山したとされ、昨年がその 1300 年目にあたることから、関係の各地では開山 1300 年祭が華やかに催された。

その創祀史実については下記文献に委ねるとして、ここでは、白山の三馬場(越前の白山平泉寺、加賀の白山比咩神社、美濃の長瀧白山神社)などでの白山開山 1300 年祭を紹介するとともに、神仏習合の面影を伝える富山県南砺市の五箇山上梨白山宮の祭礼を写真紹介する。その御本尊は十一面観音(神社ではあるが)で、33 年毎の御開帳が来春にあたる。



平泉寺白山神社の拝殿両翼に広がる一向一揆で焼亡の三十三間拝殿礎石列



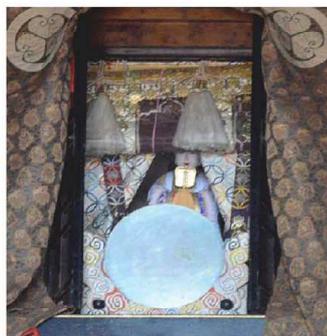
開山1300年祭で開扉の拝殿内部中央の繪馬は室町期とされている



寄進年が読み取れる繪馬の一つ、寛永15(1638)6月18日 越前藩主松平家の



開山1300年祭で開扉の本社奥殿と、



奥にのぞく白山女神像御前立ちお顔



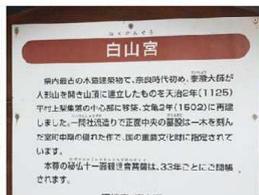
越前藩主が寛政7(1795)年再建の本社奥殿の「白山妙理大権現」額と昇り龍



夜の訪れと共に始まる五箇山白山宮の秋祭り



当日昼の奉納踊り



本尊が33年毎に御開帳(次は来年5月11・12日)との標札と、重文説明にもその旨が

【文献】若林喜三郎編『白峰村史、上・下巻』。白峰村役場 (1962・1959)
北國新聞白山総合学術調査団編『白山』。北國新聞社 (1962)
白山本宮神社史編纂委員会編『白山比咩神社史—古代・中世編』。北國新聞社 (2016)
平泉隆房「越前馬場の信仰」。『悠久』No.148 特集「白山信仰」鶴岡八幡宮 (2017)
平泉隆房「泰澄大師の出自と『泰澄和尚傳記』」。『藝林』Vol.66-1 (2017)
勝山市編『白山平泉寺—よみがえる宗教都市』。吉川弘文館 (2017)

上述の五箇山上梨は、高校生時代からのご縁の地です。皆様、どうぞ、来春の御開帳にお越しを。

KUWVOB会 会計報告

1. 一般会計(平成25年9月1日～平成30年8月31日)

(円)

【収入の部】		【支出の部】	
項目	金額	項目	金額
前期(25.8.31)繰越金	1,066,355	OB会報(やまざと)印刷費	1,376,898
OB会費納入	2,688,120	OB会報(やまざと)郵送費	247,560
寄付金	3,372	「Tシャツ」作成費	118,280
55周年懇親会会費	435,000	小屋作業関連費用	636,709
「森のうた」CD販売代金	1,000	OB役員と現役との懇親会補助	104,907
「Tシャツ」販売代金	63,500	55周年記念総会懇親会	916,246
預金利息	634	事務費	20,100
		支払手数料	20,148
		郵送費	50,107
		会議費	20,370
		現役支援金	550,000
		スキー合宿記念誌作成支援金	100,000
		その他(香典、電波使用料、雑費)	34,415
		次期(30.9.1～)繰越金	62,241
計	4,257,981	計	4,257,981

2. 特別会計(金沢市補助金)

(円)

収入		支出	
前期残	290,000	日当	312,000
入金	540,000	機材	202,640
		繰越金	315,360
計	830,000	計	830,000

3. 財産目録(平成30年8月31日現在)

(円)

科目	金額
普通預金(北國銀行本店営業部)	15,273
郵便貯金(振替口座)	3,064
現金(一般43,904+特別315,360)	359,264
計	377,601

4. 次の5年間の一般会計予算(案)(平成30年9月1日～平成35年8月31日)

(円)

【収入の部】		【支出の部】	
項目	金額	項目	金額
前期(30.8.31)繰越金	62,241	OB会報(やまざと)関連	1,500,000
OB会費納入	2,600,000	小屋作業関連	400,000
60周年懇親会費	800,000	OB役員と現役との懇親会補助	100,000
Tシャツ販売	250,000	60周年記念総会懇親会	900,000
寄付	50,000	現役活動支援金	500,000
利息	500	諸経費	200,000
		次期(35.9.1～)繰越金	162,741
計	3,762,741	計	3,762,741

平成31年～平成35年までの

OB会会費及び寄付金の納入についてのお願い

会計担当 小久保 光将 (23期)

日頃はKUWVOB会運営にご協力いただき誠にありがとうございます。

本会発足から25年が経過し、この間も5年ごとの周年行事、会報やまざとの発行を中心に、小屋酒場（小屋作業）、現役との懇親会等多くの行事を実施することができました。

これもひとえに多くのOBの皆様から会費のご協力があったからこそ継続できたものであり、この場を借りて皆様のご協力を改めて感謝する次第です。

さて、このようにOB会を円滑に運営していくためには、1人でも多くのOBの皆様に会費納入のご協力を頂くことが欠かせません。

ご負担をおかけすることは大変心苦しい限りですが、何卒OB会の趣旨にご賛同いただき、ご協力くださいますよう、よろしく願いいたします。

記

1. 会 費

・年2,000円。ただし、事務負担軽減のため、5年間の一括払い（＝10,000円）にて納入いただければ幸いです。

2. 現役活動支援寄付金

・今回から「現役活動支援寄付金」として任意のご寄付をお願いすることとなりました。ご賛同いただける方は1口2,000円として、任意の口数を会費に加えてお振込み頂けますようお願い申し上げます。

・この寄付金は、現役生の活動支援や将来における万一の事故対応の目的で使用することとし、当面の間、積立金として一般会計とは別に管理します。

3. 納入方法

・振込用紙を同封してありますので、郵便局から振り込んでください。（手数料は各自のご負担となります。）

・その際、金額、住所、氏名、ご自分の「期」をご記入ください。

・銀行振込でもOKです。その場合は次の口座へお願いします。

北國銀行本店営業部 普通預金No.223703 金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会

森のうた

- 一、キミは覚えているかい？
雨上がりの森のにおい
氷りだす月
オレンジに染まる谷　くだったこと
ボクは　ほしい
雲のように
変わりつづけるころ
ボクは持っているかな？
峰の奥の空の深さ
鳥の孤独
あの山でキミがつぶやいた言葉
ボクは　ほしい
オオシラビソの
立ちつくす激しさを
- 三、キミは知っているかい？
にこ毛そよぐブナの森を
山靴の夢
倉谷のタムシバの花の白さ
ボクはほしい
カタクリの
日なたに躍る気持ち